



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



室蘭工業大学研究報告. 文科編 第46号 全1冊

メタデータ	言語: eng 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2803

室蘭工業大学
研 究 報 告
文 科 編

第 46 号

平成8年11月

MEMOIRS
OF
THE MURORAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Cultural Science

NO. 46

Nov., 1996

MURORAN HOKKAIDO

JAPAN

Editing Committee

K. Izumi	Professor	<i>Chief Librarian</i>
N. Kishi	Assistant Professor	<i>Civil Engineering and Architecture</i>
M. Kobiyama	Assistant Professor	<i>Mechanical System Engineering</i>
M. Hatanaka	Assistant Professor	<i>Computer Science and Systems Engineering</i>
Y. Hashimoto	Assistant Professor	<i>Electrical and Electronic Engineering</i>
T. Sato	Assistant Professor	<i>Materials Science and Engineering</i>
Y. Yoshida	Assistant Professor	<i>Applied Chemistry</i>
K. Hashimoto	Assistant Professor	<i>Common Subject</i>

All communications regarding the memoirs should be addressed to the chairman of the committee.

These publications are issued at irregular intervals. They consist of two parts, Science and Engineering and Cultural Science.

文 科 編

目 次

「社会的ジレンマとしての環境問題」の批判的検討

—広瀬幸雄の所論を中心にして 丸山 博 1

Die Phänomene der deutschen Übersetzung des

Prajñāpāramitā hṛdaya - sūtra

und seiner Text - Kritiken..... 大村英繁 17

シャルパー・マルセル

Der Tee als Medizin und Kunst.

Herausgegeben von..... シャルパー・マルセル 49

大村英繁

Die Leiden und der Gesundheitszustand Goethes.

Eine kurze Abfassung über die Leiden und deren Gründe

von Johann Wolfgang von Goethe..... シャルパー・マルセル 79

大村英繁

関係節の定義と述語タイプ 塩谷 亨 93

文法単位としての文について 松名 隆 111

「社会的ジレンマとしての環境問題」の批判的検討 —広瀬幸雄の所論を中心にして

丸山博

Critical Study on Environmental Issues as Social Dilemmas-with special reference to Hirose's remarks

Hiroshi MARUYAMA

Abstract

A social dilemma occurs when individual rational actions made for their short-term private interests have long-term cumulative effects which destroy the environment and injure the individuals themselves as well as others. Theoretically, the social dilemma represents a paradox in terms of collective goods. Y. Hirose makes a hasty conclusion that local environmental issues can be said to have social dilemmas from the standpoint of researches based on social psychology.

People's lifestyle, believed to be exclusively responsible for the environmental issues by Hirose, should be thought to have to do with less than half the issues. The rest should be attributed chiefly to the state and large enterprises that govern the present socio-economic system. In other words, local and global environmental issues are caused by social relationships such as power, property and the production and distribution of wealth rather than the tragedy of the commons--the prototype of the social dilemma.

In order to solve the issues, each of us should make sense of their essence. As a conclusion, in this paper, I try to define the essence of local environmental issues concerning water supply, energy-saving and water pollution.

はじめに

広瀬幸雄（1995）は「環境問題についての態度と行動の矛盾が問題を解決できない一因にもなっている」¹⁾とし、「環境問題の特徴の一つである、社会的ジ

レンマの側面に注目して」²⁾、環境配慮行動の規定因をさぐり、環境保全行動を促進するためのいくつかのアプローチを検討している。しかし、それらのアプローチはいずれも環境問題の解決につながっているとはいいがたい。それはそもそも環境問題が社会的ジレンマであるという広瀬の問題設定自体に無理があるからだと思われる。本稿では、まず広瀬の提唱する環境配慮行動促進の社会心理学的アプローチの概要をとらえ、つぎに環境問題解決の展望と環境問題の解決を担う主体形成に対する筆者の考えを示したうえで、「社会的ジレンマとしての環境問題」の問題点を明らかにしたい。

1 環境配慮行動促進の社会心理学的アプローチ

広瀬は環境配慮行動の規定因を目標意図と行動意図の2段階の意思決定を想定した要因関連モデル³⁾によって整理し、それにもとづいて環境問題についての認知・態度・行動の変容アプローチを環境認知の変容アプローチ、態度と行動意図の関連強化のアプローチおよび行動評価の変容アプローチの3つに分類し⁴⁾、今まで主としてアメリカで行われてきた調査研究の事例をそのいずれかに位置づける⁵⁾ことによって、自らのモデルの正当性を主張している。3つのアプローチの概要はそれぞれ以下のようにとらえられる。

(1) 環境認知の変容アプローチ⁶⁾

マスメディアやローカルメディアによる環境保全のキャンペーンがその代表的なアクションである。具体例としてつぎの3つがあげられる。①環境問題の仮想的場面を設定した実験室実験において、「エネルギー危機が深刻である」との情報が提供された場合に被験者の省エネ意欲が強まったことが確認された。②慢性的な水不足に見舞われているカリフォルニアでは、節水関連の情報を住民に2ヵ月に3度の割合で郵送したところ、低所得者層の住民には水使用量の減少がみられたものの、高所得者層には効果がみられなかった。③オーストラリアでは、テレビによるガソリン節約のキャンペーンが環境認知やガソリン節約の意図をある程度変容させることに成功した。

(2) 態度と行動意図の関連強化のアプローチ⁷⁾

態度と行動とを結びつけることを目指した方法の代表的なものとして、段階的要請法と役割演技法の2つがある。

①段階的要請法によるアプローチ：公益活動への小さなコストの要請に応じた場合には、突然大きなコストをとまなう行動を依頼されるよりも、住民はすすんでそのコストの大きな公益活動に参加することが確認された。また、より多くのリサイクル活動への協力を応諾した住民ほど、行動が環境にやさしい方向に変容することが確認され、家庭での省エネ行動の場合においても同様の結果がえられた。

②役割演技法によるアプローチ：他者を説得するよう働きかける役割を果たした本人自身の態度と行動意図の一貫性は高まることが知られており、このことは環境配慮行動についてもあてはまることが調査結果から明らかにされた。

(3) 行動評価の変容アプローチ⁸⁾

①社会規範評価の変容アプローチ

準抛集団の社会規範を明示したり、環境保全への協力を表明する公的な機会を設定することで行動への社会的期待を意識するようにながす方法であり、上記の態度と行動意図の関連強化のアプローチと同じく、行動変容への効果が顕著でその効果も持続するという特徴をもっている。

②便益費用評価の変容アプローチ

環境配慮行動は資源浪費的行動よりも便益が小さくコストが大きい。そこで、環境配慮行動をとった場合にのみ物質的報酬を与えることによって環境配慮行動を選択しやすくする方法が試みられ、その結果、リサイクルや省エネの事例において環境配慮行動をひきだしたことが確認されている。しかし、報酬の提供が短期間で終わるとすぐにリサイクルや省エネの行動が消失してしまったり、報酬に見合う効果（ごみ減量や省エネによる経費削減）がえられにくいという問題もある。

③実行可能性評価の変容アプローチ

省エネやリサイクルの場合において、環境配慮行動の技術や知識を教示する、行動実行の適切な時点でプロンプト（手がかり情報）を提示する、行動結果である消費量などの情報をフィードバックする、という3つの方法が試みら

れ、それぞれに適した状況が異なるので、各アプローチの特徴を理解したうえで活用すべきである。

広瀬の変容アプローチはこのようにいずれも社会情報を効率的に個人に与えることによって一人ひとりの行動を環境に配慮したものへと誘導しようとするものである。それは広瀬が、環境問題の解決を個人のライフスタイルの変容におき、個人が環境配慮行動を選択するか否かは社会全体の動向に影響されるととらえている⁹⁾ からだと思われる。しかし、環境問題は個人のライフスタイルを環境に配慮したものへと変えることによって解決されうるのだろうか。

2 環境問題解決の展望と環境問題の解決を担う主体形成

2-1 環境問題解決の展望

環境は人類の生存・生活の基礎的条件であり、そのかぎりにおいて、「公共の利益のために公共機関に信託され、維持管理されるべきものであって、公共信託財産である」¹⁰⁾。しかし、日本の公共機関は財界などの「支配階級の意志を貫徹して営業権や財産権を優先させ」¹¹⁾、住民の基本的人権の遵守を後回しにしており、その結果、公害の原点といわれる水俣病事件以降も依然として環境問題をひきおこしている。その端的な例は大気中における二酸化窒素の環境基準の緩和や産業基盤重視・生活環境軽視の公共事業の推進にみられる。

1960年代における公害反対の世論と運動を背景に、自動車のもたらす反社会的・自然破壊的な影響への世論のきびしい批判を契機として、東京都など7大都市が国にさきがけて自動車の排ガス規制を行った¹²⁾。自動車産業を擁護していた国も、こうした流れに抗しきれず、当時としては世界でもっともきびしい二酸化窒素の環境基準を設定せざるをえなくなり、その結果、自動車産業は巨額な投資を行い、新しい環境基準に適合するエンジンを開発した¹³⁾のである。しかし、それも束の間、国は1977年のサミットにおいて、欧米諸国から日本の輸出超過を非難されて内需拡大をはかることを約束し、高速道路や瀬戸大橋などの大規模な公共事業を推進するために、翌年、二酸化窒素の環境基準を緩和した¹⁴⁾といわれる。それは鉄鋼、化学、電力や自動車などの産業に公害防止投資

の節約によって1兆円以上の利益をもたらすことになった¹⁵⁾が、大都市圏では緩和された環境基準さえ達成されない地域が多く、ぜんそく患者があとをたたないという事態を招いている¹⁶⁾。また、日本の公共投資はその絶対量や国民総支出に占める割合では世界一であり¹⁷⁾、その多くは自動車道路をはじめとする産業基盤の整備に回され、公共交通、公営住宅、公園、緑地帯など生活環境への投資が節約されてきた¹⁸⁾。こうしたことが「高度成長の原因となり、重化学工業化、大都市化、自動車中心の大量高速輸送体系や大量消費生活様式」¹⁹⁾という経済構造を生みだし、公害の激化を招いたといわれる。それどころか、日本は先進国では唯一、環境アセスメント制度が国や企業などの反対によって立法化されていないこともあって、空港、ダム、道路の建設など公共事業そのものが環境問題をもたらしており、大阪空港、名古屋新幹線、国道43号線のように裁判所から政府あるいは公共事業体が損害賠償を求められた場合もある²⁰⁾。

このように国が企業の資本蓄積を助成するために公害防止や環境保全の費用を後回しにするという構図は、世界銀行やIMFなどの国際機関と先進国の多国籍企業との間にもみられ、その結果、地球環境問題を生みだしている。このことはスーザン・ジョージ (Susan George, 1989, 1995)²¹⁾による2つの債務—環境関係の分析に求めることができる。

第1は世界銀行などの途上国への融資が生態系に破壊的なプロジェクトに向けられていることである。世界銀行の融資は道路や電力などの産業基盤に向けられ、多国籍企業の発展途上国に対する投資の地ならしをしてきた。その典型的な例として世界最大の債務国ブラジルのグランデ・カラジャス鉄鉱石プロジェクトへの融資があげられる。プロジェクトの1つツルクイ・ダムの建設には3万人、5000家族以上の非インディオ家族の移住と21万haの熱帯林の水没を必要とした。世界第6位の債務国インドネシアでも、世界銀行の融資にもとづくクドゥン・オンボ・ダムの建設やトランスミグラジ (移住) 政策などによって、何百万もの貧しい人々が熱帯林に移住させられ、熱帯林の消失を速めている。

第2は融資をうけた途上国がおもにIMFの指導のもとに天然資源を現金化することによって借り入れの返済を行うことである。IMFは債務国に融資を提供しているが、その融資条件はいつも債務国が国際収支黒字を回復するよう輸出

増大のためのあらゆる努力をすることを要請する。熱帯林もその要請から逃れることはできない。重債務国のブラジルとインドネシアが1980年代以降、世界の森林消失ランキングの1位と2位を占めているのは偶然ではなく、先進国主導の世界銀行とIMFによる輸出主導型成長モデルの当然の帰結である。そして、輸出のために伐採された森林からの収益は大半が先進国の多国籍企業に入り、生産国にはごくわずかしかなかったため、南北間の経済的格差は拡大しつづけている。また世界第2の債務国メキシコでは、環境基準がないことに加えて、IMFの指導にもとづく通貨の大幅切り下げによって、化学物質や溶剤、廃棄物などをあつかう先進国の多国籍企業が公害防止費用の節約と安い労働力を求めてアメリカとの国境付近のマキラドーラ地区に多数進出した。その結果、地区の生態系は荒廃し、工場労働者たちは生計費水準以下の低賃金のなかで危険な化学物質にさらされ、周辺住民も健康被害に苦しんでいる。

以上の検討をふまえれば、日本における環境問題も、熱帯林の破壊や有害廃棄物の越境移動などの地球環境問題も、国や世界銀行・IMFなどが企業の資本蓄積に加担し、公害防止や環境保全の費用の節約を許していることに起因する社会問題といえよう。換言すれば、現代社会では国や企業が社会経済システムを支配しており、消費は生産に従属していることから、生産を民主的に規制し、分配においても南北間および現在世代と将来世代との間の社会的衝平をはからないかぎり、問題解決はありえないのである。そのためには、国や世界銀行・IMFなどが自然の多様性を保全し、基本的人権の尊重としての公共性を保証する民主的なシステムへと変革されなければならない。個人のライフスタイルを環境に配慮したものへと変容させればよいというような単純なものではない。

2-2 環境問題の解決を担う主体の形成

では、社会変革を担う主体とは何か。変革主体は国や世界銀行・IMFなどの権力ではなく、住民あるいは市民の一人ひとりである。なぜならば、現代社会においては、「環境政策は資本主義経済の原理をこえた住民の世論と運動によって形成され前進した」²²⁾からである。このことは学校教育や社会教育に対して、環境問題の本質を認識し、持続的な社会経済システムの実現に向けて自己の果たすべき役割を自覚した主体の形成を要請する。筆者ら

(1996)は、こうした主体形成の重要な契機は環境問題の原因とその解決方法についての科学的な認識、すなわち環境科学の概念の形成にあると考え、環境科学を「人間生活圏の自然と人間・社会との相互作用における自己認識と人間・社会の変革に関する科学」と規定した²³⁾。そして、環境科学にもとづく環境科学教育を自然環境科学教育と環境政策科学教育の2大領域からなるものとして、それぞれの教育内容をつぎのような視点から構成した²⁴⁾。自然環境科学教育は自然と人間・社会との相互作用の質的發展をあつかい、自然の社会化と相互作用の地球化という基本概念を媒介して人間・社会の高度な活動性についての科学的な認識を形成するものとし、環境政策科学教育は自然環境科学教育を基礎にして、人間・社会の高度な活動性が自然と調和するための具体的政策をあつかい、持続的発展概念を環境問題解決の鍵概念として現在の社会経済システムを持続的なものへと社会変革する主体を形成するものとした。こうして構成した教育内容を担う具体的な教授プログラムとして授業書を作成し、それにもとづく授業を行ったところ、持続的発展概念を獲得した者には社会変革の主体としての自覚がみられた²⁵⁾。なお、持続的発展概念については、「人間生活圏を自然・人間・社会の統一したシステムとしてとらえるとき、人間の発展を正の値に保ちながら、人間のイニシアティブのもとで自然と社会の発展がつねに正の値をとるようにすることであり、ローカル、グローバルを問わず、人間生活圏のすべてのシステムに適用される」と定義した。つまり、環境問題を解決しうる持続的発展概念とは、自然の発展(=自然の多様性の保全)と社会の発展(=社会経済システムの民主化)を疎外している現代の資本主義社会から資源・環境の持続的な利用と民主的な管理を可能にする持続的な社会経済システムへの社会変革を示唆し、その主体が人間一人ひとりであることを明示するものである。

かつて多くの住民運動・市民運動は、たとえば三島・沼津・清水の二市一町におけるコンビナート誘致反対運動の成功にみられるように住民自らが環境問題についての学習会や環境アセスメントを行ない、一人ひとりの自然・人間・社会に関する科学的認識を高めながら、基本的人間の遵守としての公共性を媒介して自治体に産業優先政策の転換を迫り、環境政策を前進させてきた。換

言すれば、住民一人ひとりには学習会や環境アセスメントを通して、現在から未来を予測し、予測された未来から現在の自然・人間・社会のあり方を問い直すことによって、社会変革の具体像を認識するとともに、自分自身を社会変革の主体へと変革し、問題解決をはかってきたといえよう。環境科学によって社会変革の主体を形成するという立場からみると、環境問題を解決するには、住民や市民一人ひとりに主体形成にいたる環境科学的な認識、すなわち「自己意識を中核とする科学的認識」²⁶⁾の形成が求められることは歴史的にも明らかなのである。個人の行動変容は社会全体の動向に影響されるから社会情報をいかに効率的に個人に与えればよいかということではないといえるのである。

3 「社会的ジレンマとしての環境問題」の問題点

広瀬は共有地のジレンマに対する人々の認知・行動と地域環境問題の仮想事態における認知・行動とを比較して、地域環境問題は便利さ快適さの追求という個人利益と環境保全という共通利益とが対立する社会的ジレンマの構造をもっているとの結論を導き出している²⁷⁾。そして、その結論を前提として、環境配慮行動の規定要因を分析し、目標意図と行動意図の2段階の意志決定からなる要因関連モデルによって環境配慮行動の社会心理学的アプローチを提起したのである。しかし、広瀬が地域環境問題としたのは、渇水時の節水、ターミナルでの自転車放置、ゴミ減量、合成洗剤による生活排水の4つであり²⁸⁾、広瀬自身も述べているように、いずれの事例でも「コミュニティの大多数の住民が環境汚染的行動をとることになれば、環境汚染など深刻な事態が予想されることを暗示する内容となっている」²⁹⁾ように設定されている。つまり、広瀬はもともと地域環境問題を便利で快適な生活をとるか、それらを犠牲にしてでも環境保全をとるかの社会的ジレンマとしてとらえ、それにふさわしい事例として上記の4つをとりあげているのであり、それゆえ、共有地のジレンマと4つの地域環境問題の仮想事態とに対する認知・行動の比較調査結果をふまえてえられた要因関連モデルは社会的ジレンマにおける個人の行動選択を説明しようとしているにすぎないといえよう。

「社会的ジレンマとしての環境問題」は環境問題をウィリアム・ロイド (William Lloyd, 1833) の「共有地の悲劇」³⁰⁾として把握し、環境問題には加害も被害もない、だから一人ひとりが気をつければ問題は解決するというように、国や企業の加害責任を住民や市民に転嫁し、拡散することに行き着くものと考えられる。ギャレット・ハーディン (Garett Hardin, 1968, 1972) はロイドの「共有地の悲劇」をもとに、「地球は人類の限りある共有資源であり、そこに爆発的に増加した人口が地球の収容能力を超えて殺到することによって、人類は“全面的破滅”に向かう危機に直面しているという説を唱え、それゆえ、いまだに増えつづけている途上国の人口を犠牲にしてでも、地球という“救命ボート”にすでに乗っている先進国の人々が救われなければ人類は生き残れない」と主張した³¹⁾といわれる。「共有地の悲劇」の環境問題への不用意な適用はこのような人口増加が環境問題の主要な原因であるかのような間違った認識につながるということを忘れてはならない。前章において指摘したように、公害はもとより、地球環境問題も、生産と分配、権力関係、所有関係などの社会的・経済的諸関係によって規定される社会問題であり、加害と被害の関係は明らかであって、一人ひとりが気をつければ問題は解決するというように個人レベルの問題に解消することなどできないのである。

では、広瀬が地域環境問題としてとりあげた4つの事例のうち、自転車の放置問題は別にして、他の3つについてはどのように考えればよいのだろうか。これまでの研究にもとづいて、主要な問題点を指摘しておきたい。

(1) 喝水時の節水

広瀬は地域環境問題の第1に「水道局の節水協力の呼びかけに対して、庭木や芝生への水道水の散水をつづけるか否か」という仮想事態を設定しているが、喝水時に節水するかどうかということはその場しのぎであって、水不足という問題の根本的な解決にはならない。水不足の問題を真に解決するには、喝水をもたらすような今日の水供給や水の再利用などにかかわる社会システムについて、とらえ直す必要がある。日本の水行政については嶋津暉之 (1991)³²⁾が多くの具体的な事例を実証的に分析し、水不足をもたらす社会システムの問題点をおよそ以下のように指摘している。なお、水不足は地球的規模で見れば、食

糧生産、水生環境の健全性、社会の安定性などを脅かす問題もふくむが本稿では日本国内の問題に限定する。

①慢性的な水不足という話は事実ではなく、ダムの過大放流と水利権の意図的な設定によってつくりだされたものであり、度々くりかえされる渇水騒ぎは土建資本と政治家と水行政にかかわるエリート官僚などからなる利権集団が「ダム建設を早く進めよう」という世論の形成をもくろんだといえる。

②工業用水、水道用水、農業用水のいずれの場合においても、国の需要予測は過大であり、新たなダム開発をしなくても、工業用水道や農業用水道などの余剰水の転用、水道における節水や工場における水使用合理化などの全面的な推進、あるいはまた河川維持用水の見直しを行うことによって、将来の水需要の増加には十分対応できる。

③ダムは利水のみならず、治水対策としても役立つ確率が非常に小さいばかりか、ダムそのものが災害を誘発する危険性もある。あるべく治水対策としては、上流部では森林の保全を進め、中下流部では遊水池の設置などによって流域の保水力や雨水調整効果を保持・強化し、下流部の都市においては雨水の地下浸透を全面的に推進することなどが考えられる。

(2) ゴミ減量

広瀬は「市は急増するゴミを減量するため、住民に対して燃やせるものは燃やし、生ゴミは庭に埋めるよう呼びかけているが、あなたが共稼ぎで忙しいとしたら呼びかけに応じるか」という仮想事態を設定しているが、これがゴミ減量についての地域環境問題といえるのだろうか。

ゴミは素材の量的側面からみれば、ゴミの最終処分(=埋め立て)地の確保が限界に近づいているという問題があり、実際、2005年頃までに自区域内に処分地が確保できないという自治体が93にもものぼっている³³⁾。素材の質的側面からは最終処分場における地下水汚染やゴミの中間処理(=焼却場)におけるダイオキシンなど有毒な有機塩素化合物の大気中への放出などの問題が指摘される。1995年現在、日本国内全体に降下するダイオキシンは年間1.3-1.4kgに達しており、ベトナム戦争時の1年間にベトナム国内にまかれた枯れ葉剤中のダイオキシン量のおよそ10分の1にも匹敵するといわれる。また社会的側面からは、

ゴミ処分場の建設の場合もダム建設と同様、行政が計画を住民に一方的におしつけ、住民参加という民主主義をふみにじっているという問題³⁴⁾がある。ゴミ減量はこうしたゴミの素材面や社会面における諸問題をふまえて、ゴミが増えている原因をさぐり、それをもとに社会的な解決をはかっていかなければならない。ゴミ増加の原因とそれにともなう問題点については、寄本勝美 (1990)³⁵⁾、植田和弘 (1992)³⁶⁾、熊本一規 (1995)³⁷⁾らが以下のような指摘をしている。

①ゴミのなかで急増しているのは家庭ゴミではなく、都市のオフィスからだされる紙ゴミやレストラン・ホテルからの厨芥・容器などの事業系一般廃棄物である。その主因は地方自治体が事業者に自己処理責任を負わせず、事業系一般廃棄物を無料でうけ入れてきたばかりか、ゴミ処理を考慮せずに都市計画を進めてきたことにある。

②家庭ゴミのなかで急増しているものは容器・包装ゴミである。1991年の京都市清掃局の報告書によれば、粗大ごみを除く家庭ゴミを容積比で見ると、その6割以上が容器・包装ゴミであるという。それはゴミ処理コストを社会全体で負担しているという現状では、使い捨てのプラスチック容器のほうが再利用ビンよりも安くつくため、企業がプラスチックを選択するからである。

③家庭系と事業系の一般廃棄物は産業廃棄物（以下、産廃と略す）にくらべれば、圧倒的に少ない。つまり、1985年の資料では、廃棄物全体の87%を占めているのは汚泥、動物のふん尿、建設廃材などの産廃なのである。産廃の場合は、自治体が広域処分場を都市から離れた山間地につくることもあって、不法投棄による環境破壊が後をたたないという問題もかかえており、大量廃棄社会からリサイクル社会への転換のための社会経済システムの確立が求められる。

(3) 合成洗剤による生活排水

広瀬は生活排水問題の仮想事態を「市は合成洗剤禁止条例を制定したが、あなたが共稼ぎで家族も多いとしたら、不便で手間のかかる粉せっけんをつかうか、それとも隣町から合成洗剤を買うか」としている。しかし、生活排水の問題は水汚染問題の本質とかがわかって議論されるべきであり、合成洗剤をつかうかどうかということに矮小化してはならない。水汚染問題の本質に関しては宇井純 (1994)³⁸⁾が中西準子 (1994)³⁹⁾に依拠して、以下のようにまとめている。

①1970年以降、地方自治体につづき、国による工場排水の水質規制が強められた。その結果、メッキ工場やパルプ工場などに典型的にみられるように、合理的な排水処理が進められ、70年に河川の有機汚染負荷の80%を占めていた工場排水は89年には15分の1に減少し、全体の汚染負荷の25%程度になった。

②霞ヶ浦では合成洗剤や肥料の流入に加えて水門の閉鎖によって淡水化されたところから、富栄養化が急激に進み、水質が悪化した。栄養塩類の蓄積は湖水だけでなく、閉鎖性海域でもおこっている。たとえば、瀬戸内海や東京湾では干潟などの埋め立てが進められ、その結果、赤潮や青潮という現象が頻発し、海中の生物種の数が増加している。また産廃の安定型処分場や管理型処分場における地下水汚染、ゴルフ場からの農薬による水道水の汚染などの問題もある。

③国の巨大化した流域下水道の問題点は第1に費用が非常にかかること、第2に処理した水が河川にもどらず、水の使い捨てのシステムであること、第3に大量の工場排水をうけ入れる計画になっていること、があげられる。言い換えれば、第1の問題点は地方自治体の費用負担を大きくして、将来にツケを残すことになり、第2点は循環を絶つことで水の浪費を進め、第3点は処理効果を悪くするばかりか、分離した汚泥も有害物質をふくんで利用できなくなる結果を生み出す、ともいえる。

以上(1)(2)(3)で検討したように、渇水時の節水を水不足問題、ゴミ減量を広くゴミ問題、合成洗剤による生活排水を水汚染問題として、それぞれの本質をとらえ、それらにもとづく教授プログラムによって環境問題解決の主体形成をはかることが環境問題についての態度と行動の矛盾を統一し、環境問題の真の解決につながるものと思われる。

おわりに

今日、「公害は終わった。これからは地球環境問題の時代である。地球環境問題は加害も被害もなく、一人ひとりのライフスタイルに起因している。だから、みんなが気をつけなければならないのである。」という危険な主張がまかりとおっている。なぜ、危険なのか。それは問題の本質をおおい隠すものだからだ。環境配慮行動促進の社会心理学的アプローチはこうした主張を支えるも

のであり、問題を解決に導くものとはいいがたい。なぜならば、みんなが節水やゴミ減量に協力したり、合成洗剤をつかうようになったとしても、水不足問題、ゴミ問題、水汚染問題といった環境問題が解決したとはいえないからである。本稿では、環境問題が行政の公共性などにかかわる社会問題であること、それゆえ、真の問題解決には具体的な教授プログラムによる「自己意識を中核とする科学的認識」の形成が求められることを示し、環境問題を社会的ジレンマとして把握することの問題点を明らかにした。水不足問題、ゴミ問題、水汚染問題の本質についての教授プログラムの作成がつぎの課題である。

(平成8年6月7日 受理)

註

- 1) 2) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，13（名古屋大学出版会，1995）
- 3) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，44（名古屋大学出版会，1995）
広瀬は環境配慮行動を説明する4つの先行モデルを参考にして、行動決定までの意志決定のプロセスは環境にやさしい目標意図を形成するまでと、環境配慮の行動意図を形成するまでの2段階に分かれると仮定し、環境にやさしい目標意図の規定因として環境リスク認知、責任帰属認知、対処有効性認知の3つをあげ、環境配慮行動の規定因として実行可能性評価、便益費用評価、社会規範評価の3つをあげたものを要因連関モデルとよんでいる。
- 4) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，212（名古屋大学出版会，1995）
- 5) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，212-220（名古屋大学出版会，1995）
- 6) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，213-214（名古屋大学出版会，1995）
- 7) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，214-217（名古屋大学出版会，1995）
- 8) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，217-220（名古屋大学出版会，1995）
- 9) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，34（名古屋大学出版会，1995）
- 10) 宮本憲一：環境経済学，55（岩波書店，1989）
- 11) 宮本憲一：環境経済学，62（岩波書店，1989）
- 12) 宇沢弘文：宇沢弘文著作集Ⅵ環境と経済，311（岩波書店，1995）
- 13) 宇沢弘文：宇沢弘文著作集Ⅵ環境と経済，311-312（岩波書店，1995）

- 14) 15) 宮本憲一：環境と開発，229（岩波書店，1992）
- 16) 高村泰雄・丸山博：環境科学教授法の研究，584-585（北海道大学図書刊行会，1996）
- 17) 18) 19) 20) 宮本憲一：環境経済学，87（岩波書店，1989）
- 21) スーザン・ジョージ（向寿一訳）：債務危機の真実，226-245（朝日新聞社，1989）スーザン・ジョージ（佐々木健・毛利良一訳）：債務ブーメラン，21-72（朝日新聞社，1995）スーザン・ジョージは『債務危機の真実』では第10章「債務と環境」において，ブラジルのグランデ・カラジャス鉄鉱石プロジェクトやインドネシアのトランスミグラジなどの具体例をあげて2つの債務-環境関係を指摘している。また『債務ブーメラン』では「第1のブーメラン 地球環境」のなかで債務累積額と森林破壊の相関関係やメキシコ・マキラドーラ地区の有害廃棄物問題などについて詳しい分析を行っている。
- 22) 宮本憲一：環境経済学，253（岩波書店，1989）
- 23) 高村泰雄・丸山博：環境科学教授法の研究，9-10（北海道大学図書刊行会，1996）筆者らは環境科学教育を環境科学を教える教科領域であると規定したうえで，環境科学を本文のように規定し，それが自立した科学として成立するかどうかを研究対象，研究方法および評価の体系の3つの側面から吟味して，自立した1つの体型的な科学として存立できるものと考えた。
- 24) 高村泰雄・丸山博：環境科学教授法の研究，11-12（北海道大学図書刊行会，1996）環境科学教育の2大領域は環境科学の規定に対応しており，人間生活圏の自然と人間・社会との相互作用における自己認識は自然環境科学教育，人間・社会の変革に関する科学は環境政策科学教育となるのである。
- 25) 高村泰雄・丸山博：環境科学教授法の研究，491-511（北海道大学図書刊行会，1996）授業をうけた学生に授業書「環境政策科学」の最後の頁の課題「あなたが今できることはなんですか。また将来しなければならないことはなんですか。」についてレポートの提出を求め，回収したレポートを検討してえられた結果である。
- 26) 高村泰雄・丸山博：環境科学教授法の研究，16-37（北海道大学図書刊行会，1996）高村は環境科学教育には「学習主体の自己意識を中核にして環境科学

の基本的概念や法則に関する科学的認識を形成することが求められ、これまでの科学的認識の形成に関する理論を主体形成とのかかわりでさらにいっそう発展させる必要がある」として、ヘーゲルの自己意識論や最近の脳科学の知見を検討し、自己意識の本質をつぎのように規定した。「自己意識とは、未来において本来あるべき自己を普遍的・社会的なくわれわれ」として措定することによって、現在の個別的・個人的くわれに欠けているものを見だし、それをわがものとして獲得しようと自己の外の世界に働きかけながら、未来のくわれわれに向かって能動的に活動する実践的な意識である」。そして、自己意識は環境科学教育においては、現在のくわれから出発して、欲望対象であるくものを介し、他人であるくなんじとの相互承認関係をとりむすびながら、環境科学の授業書と強い相互作用を通して未来のくわれわれに向かうものと、考えている。

- 27) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，34（名古屋大学出版会，1995）
- 28) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，20-21（名古屋大学出版会，1995）
- 29) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，21（名古屋大学出版会，1995）
- 30) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学，14（名古屋大学出版会，1995）
- 31) 池田寛二：環境社会学研究，1，21-22（1995）
- 32) 嶋津暉之：水問題原論（北斗出版，1991）
- 33) 植田和弘：廃棄物とリサイクルの経済学，4（有斐閣，1992）
- 34) 梶山正三：ごみ問題紛争事典（リサイクル文化社，1995）
- 35) 寄本勝美：ごみとリサイクル（岩波書店，1990）
- 36) 植田和弘：廃棄物とリサイクルの経済学，地球環境経済論（下）153-178（慶應通信，1995）
- 37) 熊本一規：ごみ問題への視点（三一書房，1995）
- 38) 宇井純：NHK人間大学 日本の水を考える（日本放送出版協会，1994）
- 39) 中西準子：水の環境戦略（岩波書店，1994）

Die Phänomene der deutschen Übersetzung des
Prajñāpāramitā hṛdaya - sūtra
und seiner Text - Kritiken.

Hideshige Omura
und
Marcell Wenzel Chalupa

RÉSUMÉ

1. Die Textkritik über den Vaidya-Text.
2. Darauf die verbesserte deutsche Übersetzung.
3. Die konkreten Erläuterungen von Leerheit-Logik und die Kritik der englischen Übersetzungen.

EINLEITUNG

Es ist allgemein bekannt, daß die indische Philosophie - mit dem Buddhismus - seit der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts beachtlichen Einflüsse auf viele Literaten und Philosophen im deutschsprachigen Kulturkreis ausgeübt hatte.

Im Jahre 1992 haben wir bereits "Das Prajñāpāramitā hṛdaya - sūtra" aus dem sanskritischen original Text ins Deutsche übersetzt und mit Erläuterungen ausgestattet (Anm.-1), damit einen Beitrag nicht nur zum Verständnis der japanischen Kultur, sondern auch zur Verbreitung des Buddhismus, genauer gesagt, des Mahāyāna-Buddhismus und seines Gedankengutes, in dem deutschsprachigen Kulturkreis gebracht wird.

Das Prajñāpāramitā hṛdaya-sūtra ist in Asien, vor allem aber bei uns in Japan, am populärsten unter allen Mahāyāna-Sutren, beinhaltet doch diese Kern-Sutra in seiner abgekürzten und konzentrierter Form buchstäblich alle Grundkonzeptionen des Buddhismus.

Doch hatten alle Buddhistischen Sutren, in Japan eine spezielle Rezeptionsform erfahren. Fast alle Sutren, die nach Japan kamen, und Prajñāpāramitā-hṛdaya-sūtra machte hier keine Ausnahme, waren ursprünglich in der Chinesischen Sprache verfaßt.

Da es sich schon bei den Chinesischen Schriftstücken um Übersetzungen aus den Sanskrit gehandelt hatte, waren somit die Sutren zweimal übersetzt. Eine Übersetzung aus dem alchinesischen Text in eine moderne Fremdsprache der Gegenwart erscheint daher sehr fragwürdig zu sein. Zwar sind die englischen oder französischen Sutra Übersetzungen leicht verfaßt, doch die deutsche Übersetzung ist unmöglich zu verfassen, ohne die Tiefe und Bedeutung der Sutra-Aussage zu verlieren. Somit haben wir uns entschlossen die deutsche Fassung direkt aus dem Sanskrit Original zu

übersetzen, um nicht nur die Sprachliche, sondern auch die Mentalität und gedanklich bedingte Bedeutung der Sutra zu erhalten.

Obwohl die deutschen Geisteswissenschaften auf dem Gebiet der Indien-Philosophie, Sanskrit-Philologie und Buddhismus-Studien führend sind, erscheint uns nach unseren Nachforschungen, daß zur Zeit unsere Übersetzung die einzige ist. Auf das Erscheinen der Übersetzung der Kern-Sutra haben viele Institutionen mit Seminaren für Orientalistik, Indologie und Japanologie mit großer Interesse reagiert und haben, insbesondere in deutschsprachigen Ländern, diese Arbeit als einen wertvollen Buddhistischen und Japankundlichen Betrag eingeschätzt.

Obwohl es sich bei dieser Übersetzung um den Original-Text handelt, läßt sich wohl eine Textkritik nicht vermeiden. So sind die unzähligen philologischen sowie philosophischen Arbeiten des Sutras in der Welt entstanden und somit sind auch die unterschiedlichen Verinnerlichungen der Lehr-Texte begründet.

In der vorliegenden Arbeit werden wir uns ausführlich mit der Kritik des "Original-Textes", beschäftigen.

1. Kapitel

"Der sogenannte - Originaltext"

Das handgeschriebene, altindische in Sanskrit geschriebener Text wird zur Zeit nur in Japan als einzig gut erhaltener Original in der Welt, aufbewahrt. Dieses Original wurde im Jahre 1884 im altbuddhistischen Tempel "Horyuji" wieder gefunden (Material-A / Anm.-2) und vom Englischen Philologen Max Müller revidiert. (Material-B / Anm.-3) Max Müller hatte anschließend dieser Text und seine englische Übersetzung veröffentlicht. (Anm.-4) In der Gegenwart wird dieser Original im "Staatlichen Museum Tokyo" aufbewahrt.

Der sogenannte Horyuji Text ist wohl ein altindischer Originaltext, doch nur einer von

vielen verschiedenen handschriftlichen Texten aus Altindien. Somit besteht kein Beweis dafür, daß dieser Text tatsächlich der Originaltext ist oder nur eine, in damaliger Zeit, interpretierte Abschrift.

Die Zweifel unbeachtet ist das Kern-Sutra von Japanern konsequent, seit dem Anfangsstadium, wo Buddhismus nach Japan aus China kam, am beliebtesten unter vielen anderen Sutren. Es wird vorgelesen und abgeschrieben, gemalt oder literarisch thematisiert und interpretiert durch die jeweiligen japanischen buddhistischen Schulen. Noch in diesen Tagen werden Worte des "Hannya-Singyo", so heißt in Japan die Prajñāpāramitā-hṛdaya-sūtra, von vielen Menschen zitiert. Das zeigt die Popularität des Sutra auch in diesen Tagen. Diese Popularität begründet auch seine Textkritik, die bei uns eine philologisch-philosophische Geschichte, seit den Jahren der Buddhismusrezeption hat. Die zahlreichen rekonstruierten Texte die man als Originale anbietet, zeigen von dieser Interesse. Hiermit haben wir doch von Neuen die ausführliche Kritik an den Texten des Sutra von beiden Seiten, d.h. von der philologischen und philosophischen, zu üben. Diese Übersetzung kann man nicht als eine computerisierte und mechanische Übertragung aus einer Sprache in eine andere betrachten.

Im Allgemeinen soll man in den Übersetzungen den Verfasser, den Herausgeber, die Verlagsanstalt oder die Ausgabe klar angeben. Es liegt in der Sache selbst, daß bei den Literaturen die aus dem Altertum stammen und die zum Beispiel anfangs nur mündlich und erst später schriftlich aufgezeichnet wurden, die Quellen nur sehr schwer, wenn überhaupt, zu finden sind. Mit Rücksicht auf diese Tatsache haben wir uns entschlossen als eine Grundlage für unsere Arbeit den neuesten Text als ein Original anzunehmen.

Das Material B).

PRAGÑA-PARAMITA-HRIDAYA-SUTRA.

Shorter Text Restored.

॥ नमः सर्वज्ञाय ॥

आर्यावलोकितेश्वरबोधिसत्त्वो गंभीरायां प्रज्ञापारमितायां चर्या चरमाणी व्यवलोक
यति स्म । पंच स्कंधाः तांश्च स्वभावशून्यान्प्रशयति स्म ।

5

इह शारिपुत्र रूपं शून्यता शून्यतैव रूपं रूपान्न पृथक् शून्यता शून्यताया
न पृथग्रूपं यदूपं सा शून्यता या शून्यता तदूपं ।

एवमेव वेदनासंज्ञासंस्कारविज्ञानानि ।

इह शारिपुत्र सर्वधर्माः शून्यतालक्षणा अनुत्पन्ना अनिरुद्धा अमला न विमला
नीना न-परिपूर्णाः । तस्माच्छारिपुत्र शून्यतायां न रूपं न वेदना न संज्ञान संस्कारा 10
न विज्ञानानि । न चक्षुः श्रोत्रग्राणजिह्वाकायमनांसि । न रूपशब्दगंधरसस्पर्शव्यधर्माः । न
वक्षुर्धातुर्यावन्न मनीधातुः ।

न विद्या नाविद्या न विद्याक्षयो नाविद्याक्षयो यावन्न जरामरणं न जरामरणक्षयो
न दुःखसमुदयनिरोधमार्गो न ज्ञानं न प्राप्तिर्व ।

बोधिसत्त्वस्य प्रज्ञापारमितामाश्रित्य विहरति चित्तवरणः । चित्तवरण- 15
स्तित्वाद्ब्रह्मो विपर्ययात्तिकांतो निष्ठनिर्वाणः । अर्धव्यवस्थिताः सर्वबुद्धाः प्रज्ञापार-
मितामाश्रित्यानुत्तरां सम्यक्संबोधिमभिसंबुद्धाः ।

तस्माज्ज्ञातव्यो प्रज्ञापारमितामहामंचो महाविद्यामंचो ऽनुत्तरमंचो ऽसमसममंचः सर्व-
दुःखप्रशमनः सत्यममिथ्यत्वात् प्रज्ञापारमितायामुक्तो मंचः । तद्यथा गते गते पारगते
पारसंगते बोधि स्वाहा ।

॥ इति प्रज्ञापारमिताहृदयं समाप्तं ॥

Diesem Prinzip des, so zu sagen " common-sense " folgend, haben wir ein Text in der Hand der bereits von den heimischen Philologen und Philosophen rekonstruiert und kritisiert wurde und somit als eine feste Grundlage dienen konnte.

Das ist der Vaidya - Text. (Material-C / Anm. -5)

Das Material C).

Der L. Vaidya-Text (1961)

प्रज्ञापारमिताहृदयसूत्रम् ।

[संक्षिप्तमातृका]

॥ नमः सर्वज्ञाय ॥

आर्यावलोकितेश्वरबोधिसत्त्वो गम्भीरायां प्रज्ञापारमितायां चर्यां चरमाणो व्यवलोकयति स्म । पञ्च स्कन्धाः, तांश्च खभावशून्यान् पश्यति स्म ॥ 5

इह शारिपुत्र रूपं शून्यता, शून्यतैव रूपम् । रूपान्न पृथक् शून्यता, शून्यताया न पृथक् रूपम् । यद्रूपं सा शून्यता, या शून्यता तद्रूपम् ॥

एवमेव वेदयासंज्ञासंस्कारविज्ञानानि ॥

इह शारिपुत्र सर्वधर्माः शून्यतालक्षणा अनुत्पन्ना अनिरुद्धा अमला न विमला नोना न परिपूर्णाः । तस्माच्छारिपुत्र शून्यतायां न रूपम्, न वेदना, न संज्ञा, न संस्काराः, 10 न विज्ञानानि । न चक्षुःश्रोत्रघ्राणजिह्वाकायमनांसि, न रूपशब्दगन्धरसस्पर्शव्यधर्माः । न चक्षुर्धातुर्धातुर्वान्न मनोधातुः ॥

न विद्या नाविद्या न विद्याक्षयो नाविद्याक्षयो यावन्न जरामरणं न जरामरणक्षयो न दुःखसमुदयनिरोधमार्गा न ज्ञानं न प्राप्तिव्यम् ॥

बोधिसत्त्वस्य(श्व ?) प्रज्ञापारमितामाश्रित्य विहरति चित्तावरणः । चित्तावरण- 16 नास्तित्वादनन्तो विपर्ययातिक्रान्तो निष्ठनिर्वाणः । त्र्यध्वव्यवस्थिताः सर्वबुद्धाः प्रज्ञापारमितामाश्रित्य अनुत्तरां सम्यक्संबोधिमभिसंबुद्धाः ॥

तस्माज्ज्ञातव्यः प्रज्ञापारमितामहामन्त्रो महाविद्यामन्त्रोऽनुत्तरमन्त्रोऽसमसममन्त्रः सर्वदुःखप्रशमनः सत्यममिथ्यत्वात् प्रज्ञापारमितायामुक्तो मन्त्रः । तद्यथा-गते गते पारगते पारसंगते बोधि स्वाहा ॥

इति प्रज्ञापारमिताहृदयसूत्रं समाप्तम् ॥

2. Kapitel

Die Geschichte der Textkritik des Sutras in Japan im 20. Jahrhundert.

Seit der Zeit das Sutra aus China nach Japan kam, wurde der Text genauer Kritik unterzogen. Somit hat die Kritik eine lange Tradition in Japan. Auch Neuzeitlich wurde die Kritiktätigkeit wieder belebt, einerseits durch der Fund des Textes in Horyuji Tempel und damit verbundenen Kritiken und andererseits durch unzähligen Buddhistischen Sutren, die in Tuenhang in China entdeckt wurden.

Das eigentliche und uns vertraute Kern-Sutra " Prajñāpāramitā-hṛdaya-sūtra" wurde so in einer, für uns neuer, Gestalt gefunden. Nicht in dem Sanskritisch Originaltext, sondern in der altchinesischen Phonetik abgeschriebenem Sanskritischen Text, kam Prajñāpāramitā-hṛdaya-sūtra zum Vorschein.

(Material-D / Anm.-6).

Von diesem sogenannten "Hsüan-tsang-Text " hatte man bis vor kurzem angenommen, daß Hsüan-tsang hatte den Text vom Avalokitesvara Bodhisattwa ausgehändigt bekommen. (Anm.-7). Erst im Jahre 1987 hatte Prof.Dr. Fumimasa Fukui (Professor an der Waseda Universität-Tokyo) in seiner neuesten Forschungsbericht veröffentlicht, daß Hsüan-tsang den Text erhalten habe und der indische buddhistische Mönch Amoghavajra diesen Text aus dem altindischen Sanskrit ins die altchinesische phonetische Schrift übersetzte. (Anm.-8)

Dr. Fukui hatte als erste in der Welt im Jahre 1989 einen weiteren, neuen Text-Maitribhadra Text veröffentlicht. (Anm.-9)

Das Material-D).

梵本般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩與三藏法師玄奘親教授梵本不潤色

鉢囉般二合 譏攘若二合 播囉波二合 弭哆蜜多 紇哩二合 那野心 素怛攪經 阿哩

也聖二合 嚩嚩觀 枳帝自 濕嚩路在 冒地善 娑怛侮二 儼鼻攪深 鉢囉

般二合 譏攘若 播囉波 羅羅 弭蜜 哆多 左哩二合 左囉行 麼叟尾也二合

嚩嚩引 迦照 底娑麼見二合 畔左五 塞建引 馱引五 娑怛引 室左二合 娑

嚩自 婆嚩性引 戊倆空二合 跛失也二合 底娑麼現二合 伊賀此七 捨舍 哩利 補

怛囉子二合 嚕咩色 戊爾空二合 戊爾也空二合 帶性 嚕是 咩咩色九 嚕播色

曩不 比唎合二 他異 戊爾也合二 侈空多 戊爾也空二合 侈野十一亦 曩不 比唎

他異 夔合二 嚕咩色 夜是 怒嚕合二 咩咩色 彼合二 侈夜空 戊

爾也是 侈空 娑彼 嚕咩色 噎嚕如 弭是 吠那受 散識攘想

散娑迦引 囉行 尾識攘合二 喃識 伊賀此 捨合 哩利 補怛囉子二合 薩

囉嚕諸 達麼法諸 戊爾也合二 侈空 落乞叉合二 拏相 阿怒不 侈播合二 曩

生阿 寧不 嚕馱阿不 阿不 尾麼百 阿不 怒曩增 阿不 播哩補 攞

減二合 哆是 娑每故 捨合 哩利 補怛囉子二合 戊爾也合二 侈空 娑中 曩無

嚕咩色 曩無 吠引 那曩受二 曩無 散識攘起二合 曩無 散娑迦囉行

二合 曩無 尾識攘合二 喃識 曩無 斫乞葛 眼戊 嚕怛囉耳二合 迦囉二 拏

十五合 曩無 尾識攘合二 喃識 廿六曩 斫乞葛 眼戊 嚕怛囉耳二合 迦囉二 拏

鼻 唵 賀 舌 嚙 迦 野 身 麼 曩 勃 意 曩 嚙 呿 呿 那 聲 彥 馱 香 囉 娑

味 娑 播 囉 二 瑟 吒 尾 也 觸 達 麼 法 曩 斫 芻 眼 馱 都 界 哩 也

乃 嚙 至 曩 麼 怒 意 尾 譏 攘 譏 二 喃 識 馱 都 界 曩 尾 爾 也 明 曩

二 合 尾 爾 也 明 盡 曩 尾 爾 也 明 乞 叉 喻 盡 曩 尾 爾 也 明 乞 叉 喻 盡 曩

野 乃 嚙 至 嚙 囉 老 麼 囉 喃 無 曩 嚙 囉 老 麼 囉 拏 無 乞 叉 喻 盡 曩

無 稭 佉 苦 娑 敏 那 野 集 寧 嚙 馱 滅 麼 哩 譏 攘 二 合 道 曩 譏 攘 喃 智

曩 無 鉢 囉 二 比 底 得 九 曩 鼻 娑 麼 證 四 十 哆 以 娑 每 無 那 所 鉢 囉 二 比

府 得 二 合 恒 嚙 故 四 十一 胃 善 地 提 娑 薩 恒 嚙 喃 唾 四 十二 鉢 囉 般 二 合 譏 攘 若 播 波 囉

弭 多 四 十三 麼 室 哩 底 也 依 二 合 尾 賀 於 囉 底 也 二 合 住 四 十四 只 踈 心 嚙 無 囉 早 拏

十五 尾 爾 也 明 乞 叉 喻 盡 三 曩 尾 爾 也 明 乞 叉 喻 盡 四 野 乃 嚙 無 五

波	五	二	遠	曩	拏	蜜	怛	囉	娑	嗟
囉	十	合	伽	無	十	多	怛	合	每	囉
羅	合	世	蘭	悉	四	四	囉	比	那	老
弭	二	尾	哆	底	只	麼	只	底	野	麼
蜜	合	也	囉	怛	踰	室	踰	得	集	囉
哆	所	合	寧	囉	心	哩	地	九	寧	喃
十二	多	囉	究	囉	囉	底	提	無	嚕	死
五	麼	室	瑟	拏	囉	也	娑	鼻	馱	五
麼	室	哩	吒	拏	囉	依	囉	姿	滅	無
哩	故	故	竟	囉	囉	二	囉	麼	囉	無
底	底	世	寧	哩	囉	合	囉	麼	哩	老
底	世	得	哩	也	底	依	底	囉	譏	麼
得	二	合	囉	囉	也	於	也	每	攘	囉
二	合	得	囉	囉	囉	囉	囉	那	二	拏
合	得	無	沒	囉	囉	底	底	所	合	死
無	佛	囉	馱	囉	囉	二	也	囉	道	死
馱	五	鉢	囉	囉	囉	合	囉	那	七	囉
上	一	盤	囉	囉	囉	二	囉	所	無	拏
糝	囉	四	囉	囉	囉	合	囉	囉	無	死
藐	世	底	囉	囉	囉	二	囉	囉	囉	乞
世	若	哩	囉	囉	囉	合	囉	囉	囉	叉
二	二	也	囉	囉	囉	二	囉	囉	囉	喻
合	合	三	囉	囉	囉	合	囉	囉	囉	六
糝	播	合	囉	囉	囉	二	囉	囉	囉	盡
		合	囉	囉	囉	合	囉	囉	囉	六
		合	囉	囉	囉	二	囉	囉	囉	無
		合	囉	囉	囉	合	囉	囉	囉	囉
		合	囉	囉	囉	二	囉	囉	囉	得
		合	囉	囉	囉	合	囉	囉	囉	佉
		合	囉	囉	囉	二	囉	囉	囉	苦
		合	囉	囉	囉	合	囉	囉	囉	

正。沒地竟五十三 麼鼻糝沒馱哆引是 娑每故二合 誡攘二合 哆應 尾演知五十四 鉢囉
 般。誡攘二合 播波囉羅 弭蜜 哆多十五 麼賀大引 滿怛嚧咒阿無 娑麼等 娑底等 滿
 也二合 滿怛囉咒五十七 阿無 耨哆囉上 滿怛囉咒阿無 娑麼等 娑底等 滿
 怛囉咒五十九 薩一 嚧切 耨佉苦 鉢囉二合 捨止息卒 娑底真 麼弭不 贊
 哩也二合 怛嚧虛二合 鉢囉二合 誡攘若 播波囉羅 弭蜜 哆多十二 目訖妬
 說。滿怛囉咒二合 怛儻也 他二合 誡諦誡諦六十 播囉誡諦六十 播囉僧
 誡諦六十 冒地引 娑嚧賀六十 梵語般若波羅蜜多心經一卷併口口
 之

1、世恐也の誤植 2、底恐麼の誤

3.Kapitel

Die Vergleiche mit dem Vaidya Text und anderen Texten.

In unserer vorliegenden Arbeit haben wir uns bei allen vergleichenden Texten auf die Tatsache beschränkt, daß alle Texte in Tuenhuang entdeckt worden waren und von früheren Philologen rekonstruiert und kritisiert waren. Dadurch wurde unsere Sutra-Übersetzung in die deutsche Sprache sehr begünstigt.

Die folgenden Texte wurden mit dem Vaidya - Text verglichen:

I.) Materialien :

- a) Hsüan-tsang Text, 1939, von Shindo Shiraishi transkribiert. (Anm.-10)
- b) Amoghavajra Text ,1987,von Fumimasa Fukui transkribiert, der selbe Original mit a).
- c) Maitribhadra Text, 1989, von Fumimasa Fukui transkribiert.
- d) Sindo Shiraishi Text, 1939, von ihm rekonstruiert. (Anm.-11)
- e) Hajime Nakamura Text, 1959, von Ihm und seinem Kollegen Kazuyoshi Kino rekonstruiert. (Anm.-12)
- f) E. Conze Text, 1967, von Ihm rekonstruiert. (Anm. -13)
- g) Kijum Tokuyama Text, 1984, von Ihm rekonstruiert. (Anm. -14)
- h) H.Omura Text (1996), aus dem L.Vaidya-Text(1961), von ihm rekonstruiert.

II.) Der Vaidya Text hat folgende Druckfehler :

- a.) Zeile 8. vedayā-vedanā
- b.) Zeile 11. na viyñānāni - vijñānaṃ
- c.) Zeile 15. viharati cittāvaraṇā - viharaty acittāvaraṇā

III.) Die Wörter und Zeichen, die wir bei der deutschen

Übersetzung ergänzt oder ausgestrichen haben.

- a.) Zeile 9. śūnyatākṣaṇa - sunyatā 'lakṣaṇā (vgl. Oben g)
b.) Zeile 14. na prāptivam - na praptir nābhismayaḥ (vgl. Oben a), b), c).)
c.) Zeile 15. (sca ?) - ausgestrichen, da man kein Original ausfindig machen konnte.

Das Material a).

Der Hsüan-tsang-Text, 1939 von S. Shiraishi transkribiert

Prajñā-pāramitā-hṛdaya-sūtram.

āryāvalokiteśvaro bodhisattvo gambhiram prajñā-pāramitā-caryam
caramāno vyavalokayati sma: "pañca skandhās, tāṃś ca svabhāva-
śūnyān paśyati sma."

"iha Śāriputra rūpaṃ śūnyam, śūnyataiva rūpaṃ. rūpān na pṛtha
śūnyatā, śūnyatayā na pṛthag rūpaṃ. yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā
sa rūpaṃ.

evam eva vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānaṃ.

iha Śāriputra sarva-dharmā śūnyatā-lakṣaṇā anutpannā aniruddhā
amalā avimalā anūnā aparipūrṇā. tasmā Śāriputra śūnyatāyāṃ na rūpaṃ
na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānaṃ, na cakṣu-śrotra-
ghrāṇa-jihvā-kāya-manāmsi, na rūpaṃ śabda-gandha-rasa-spraṣṭavya-
dharmā, na cakṣu-dhātur yāvan na mano-vijñājanaṃ-dhātu, na vidyā
nāvidyā na vidyā-kṣayo nāvidyā-kṣayo yāvar na jarā-ṃaraṇaṃ na jarā-
maraṇa-kṣa-yo, na duḥkha-saṃudaya-nirodha-mārgā, ña na jñānaṃ na
prāptinābhi- sama[yaḥ].

tasmād aprāptivād bodhisattvānaṃ prajñā-pāramitām āśritya viharaty
a-citt'āvaraṇa, citt'āvaraṇa-nāstitvād atrasto viparyāśātikrānta niṣṭha-nir-
vānaṃ. try-adhva-vyavasthitā sarva-buddhā prajñā-pāramitām āśrityā-nut-
tarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhā.

tasmā jñātavyaṃ prajñā-pāramitā mahā-mantro mahā-vidyā-mantra
anuttara-mantra asamasama-mantra, sarva-duḥkha-praśana, satyam ami-
śryatvā. prajñā-pāramitām ukto mantra, tad yathā :

/gate gate pāra-gate pārasaṃgate bodhi svāhā !/"

Das Material b).

Der Amoghavajra-Text, 1987 von F. Fukui transkribiert

Prajñā-pāramitā-hṛdaya-sūtram

āryā-valokiteśvalo bodhisattvo gambhirāṃ prajñā-pāramitā-caryāṃ
caramāṇo vyavalokayati sma : pañca skandhās tāṃś ca sva-bhāva-
śūnyāṃ paśyati sma.

iha Śāriputra rūpaṃ śūnyaṃ śūnyataiva rūpaṃ rūpān na pṛthak
śūñyā śūnya-tāyā na pṛthag rūpaṃ yad rūpaṃ sā śūnyatā yā śūnyatā
sā rūpaṃ.

evam eva vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānam.

iha Śāriputra sarva-dharmāḥ śūnyatā-lakṣaṇā anutpannā aniruddhā
amalā avimalā anūnā aparipūrṇāḥ. tasmāc Chāriputra śūnyatāyāṃ na
rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānam, na cakṣuḥ-
śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāṃsi na rūpa-śabda-gandha-rasa-spraṣṭavya-
dharmāḥ na cakṣur-dhātur yāvan na mano-vijñānam dhātuḥ nāvidyā na
vidyā nāvidyā-kṣayo nāvidyā-kṣayo yāvan na jarāmaraṇaṃ na jarā-
maraṇa-kṣayo na duḥkha-saṃudaya-nirodha-mārgā [jñā] na jñānam na
prāptir nābhisamayaḥ.

tasmān nā prāpti-tvād bodhisattvānāṃ prajñā-pāramitām āśritya viha-
raty acittāvaraṇaḥ. cittāvaraṇa-nāstitvād atrasto viparyāsātikrāntaḥ niṣṭhā-
nirvāṇaṃ. tryadhva-vyavasthitāḥ sarva-buddhāḥ prajñā-pāramitām āśrit-
yānuttarāṃ samyak-[sam]bodhim abhisambuddhāḥ.

tasmā jñā-tavyam prajñāpāramitā mahā-mantro mahā-vidyā-maṃtraḥ,
anuttara-mantraḥ, asamasama-mantraḥ, sarva-duḥkha-praśamaṇaḥ, satyam
amithyatvāt. prajñāpāramitām ukto mantraḥ, tad yathā : (om)

gate gate pāra-gate pārasaṃgate bodhi svāhā.

[iti prajñāpāramitā-hṛdayaṃ samāptaṃ]

Das Material c).

Der Maitrībhādra-Text, 1989 von F. Fukui transkribiert

Pra-jñā-pāramitāhṛdayasūtram

Āryā-valokite-śva-ro bodhisattvo gambhiram pra-jñā-pāramitā-caryām caramāṇo vyavalokaya-ti sma : pañca skandhā-s, tāś ca sva-bhāva-sūnyān paś[ya]ti sma.

iha Śāriputra rūpaṃ śūnya-tā, śūnya-taiva rūpaṃ rūpān na pṛ-tha[k] śūnya-tāyā na pṛ-thag rūpaṃ yad rū-paṃ sā śūnya-tā śūnya-tā sā rūpaṃ.

evam eva vedanā-saṃjñā-saṃ-skāra-vijñā-naṃ.

iha Śāriputra sarvadharmāḥ śūnya-tālakṣa-ṇā anutpannā aniruddhā amalā avimalā anūnā aparipūrṇāḥ tasmā Śhāriputra śūnya-tāyām rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñā-naṃ, na cakṣuḥ-śro-tra-ghrā-jñaṃ-ihvā-kāya-manāṃsi na rūpa-śabda-gandha-rasa-spra-ṣṭavya-dharmāḥ na cakṣurdhātur yā-van na manovijñānadhatuḥ.

nā vidyā nāvidyā-nākṣayo navidyā-nākṣayo yāvan na jaraṇaṃmaraṇaṃ na jaraṇaṃmaraṇaṃnākṣayo na duḥkha-saṃudaya—nirodha-mārgā na jñānaṃ na prāptir nābhisamayaḥ.

tasmā aprā-pti-tvā[d] bodhisattvā-nāṃ pra-jñā-pāramitā-m āsṛitya viha-raty acittāvaraṇaṃ cittāvaraṇanāstit-vād atra-staḥ viparyāsātikrān-taḥ niṣṭhānirvā-ṇaḥ. try-[adhva]vya-vasthi-taḥ sarva-buddhāḥ pra-jñā-pāramitām āsṛi-ty-ānuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhāḥ.

tasmā jñātavyam pra-jñā-pāramitā mahāmaṃtro mahāvīdyāmant-rah, anuttara-mantraḥ asamasama-mantraḥ, sarvaduḥkha-praśamaṇaḥ satya-m amithya-tvā. pra-jñā-pāramitā-[yā]m ukto mantraḥ, tadya-thā :

gagatega pāragate pārasaṃgate pārasata bodhi-svāhā.

Das Material d).

Der S. Shiraishi-Text (1939)

namas Sarvajrzāya

āryĀvalokiteśvaro bodhisattvo gambhīrāyāṃ prajñā-pāramitāyāṃ caryāṃ
caramāṇo vyavalokayati sma :

“pañca skandhās, tāṃś ca svabhāva-śūnyān *Bhagavan* paśyati sma.”
ev *ṃ vyalokya aryĀvalokiteśvaro bodhisattvo* 'vocat :

“iha Śāriputra

rūpaṃ śūnyatā, śūnyataiva rūpaṃ,

rūpān na pṛthak śūnyatā, śūnyatayā na pṛthag rūpaṃ,

yad rūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tad rūpaṃ,

evam eva vedanā-saṃjñā-samskāra-vijñānāni.

iha Śāriputra sarva-dharmāḥ śūnyatā-lakṣaṇā anutpannā ani-
ruddhā avimalāvimalā nōnā papariṇāṇāḥ.

tasmāc Chāriputra śūnyatāyāṃ

na rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskāro na vijñānaṃ,

na cakṣuḥ-śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāṃsi,

na rūpa-śabda-gandha-rasa-spraṣṭavya-dharmāḥ,

na cakṣur-dhātur yāvan na mano-vijñāna-dhātuḥ,

nāvidyā nāvidyā-kṣayo yāvan na jarā-maraṇaṃ na jarā-mara-

ṇaṃ na jarā-maraṇa-kṣayo,

na duḥkha-saṃudaya-nirodha-mārgā,

na jñānaṃ na prāptiḥ.

aprāptitvād bodhisattvasya prajñā-pāramitām āsṛityā viharaty

a-citt'āvaraṇaḥ, ctt'āvaraṇa-nāstitvad atrasto viparyāsātikrānto

niṣṭha-nirvāṇaḥ.

try-adhva-vyavasthitāḥ sarva-buddhāḥ prajñā-pāramitām āsṛi-

tyānuttarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhāḥ.

tasmāj jñātavyaṃ prajñā-pāramitā mahā-mantra, mahā-vidyā-

mantra, 'nuttara-mantra, 'samāsama-mantraḥ, sarva-duḥkha-

praśamaṇaḥ, satyam amithyatvāt.

'prajñā-pāramitāyāṃ' ukto mantrah, tad yathā :

'gate gate pāra-gate pārasaṃgate bodhi svāhā !' ”

iti Prajñā-pāramitā-hṛdayaṃ samāptaṃ.

Das Material e).

Der H. Nakamura-Text (1959)

Namas Sarvajñāya

āryāvalokiteśvaro bodhisattvo gambhirayāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ
caramāṇo vyavalokayati sma : pañca skandhās, tāṃś ca svabhāva-sūnyān
paśyati sma.

iha Śāriputra rūpaṃ sūnyatā, sūnyataiva rūpaṃ. rūpān na pṛthak śū-
nyatā, sūnyatāyā na pṛthag rūpaṃ. yad rūpaṃ sā sūnyatā, yā sūnyatā
tad rūpaṃ. evaṃ eva vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānāni.

iha Śāriputra sarva-dharmāḥ sūnyatā-lakṣaṇā anutpannā aniruddhā
amalāvimalā nonā na paripūrṇāḥ. tasmāc Chāriputra sūnyatāyāṃ na
rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārā na vijñānāṃ. na cakṣuḥ-
śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāṃsi, na rūpa-śabda-gandha-rasa-spraṣṭavya-
dharmāḥ, na cakṣur-dhātur yāvan na mano-vijñāna-dhātuḥ.

na vidyā nāvidyā na vidyākṣayo nāvidyākṣayo yāvan na jarāmara-
ṇaṃ na jarāmaraṇakṣayo na duḥkha-saṃudaya-nirodha-mārgā, na jñā-
naṃ na prāptiḥ.

tasmād aprāptivād bodhisattvānāṃ prajñāpāramitām āsṛitya viharaty
a-cittāvaraṇaḥ. cittāvaraṇa-nāstitvād atrasto viparyāsātikrānto niṣṭhanir-
vāṇaḥ. tryadhvavyavasthitāḥ sarva-buddhāḥ prajñāpāramitām āsṛityānut-
tarāṃ samyaksambodhiṃ abhisambuddhāḥ.

tasmāj jñātavyaṃ prajñāpāramitā-mahāmantra mahāvīdyāmantra
'nuttaramantro 'samasama-mantraḥ, sarvaduḥkhapraśamaṇaḥ. satyam
amithyatvāt prajñāpāramitāyāṃ ukto mantraḥ. tad yathā :

gate gate pāragate pāra-saṃgate bodhi svāhā.

iti Prajñāpāramitā-hṛdayaṃ samāptam.

Das Material f).

Der E. Conze-Text (1967)

Prajñāpāramitā-hṛdaya-sūtra

I. Āryā-avalokiteśvaro bodhisattvo gambhīrāṃ prajñāpāramitācaryāṃ caramāṇo vyavalokayati sma : pañca skandhās, tāṃś ca svabhāva-sūnyān paśyati sma.

II. iha Śāriputra rūpaṃ sūnyatā sūnyataiva rūpaṃ rūpān na pṛthak sūnyatā sūnyatāyā na pṛthag rūpaṃ yad rūpaṃ sā sūnyatā yā sūnyatā tad rūpaṃ evam eva vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānānam. iha Śāriputra sarva-dharmāḥ sūnyatālakṣaṇā anuṭpannā aniruddhā amalā avimalā anūnā aparipūrṇāḥ. tasmāc Chāriputra sūnyatāyāṃ na rūpaṃ na vedanā na saṃjñā na saṃskārāḥ na vijñānāṃ, na cakṣuḥ-śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāyamanāṃsi na rūpa-śabda-gandha-rasa-spraṣṭavya-dharmāḥ na cakṣur-dhātur yāvan na manovijñāna-dhātuḥ na avidyā na avidyā-kṣayo yāvan na jarāmaraṇaṃ najarāmaraṇakṣayo na duḥkha-saṃudaya-nirodha-mārgā na jñānaṃ na prāptir na aprāptiḥ.

III. tasmāc Chāriputra aprāptivād bodhisattvo prajñāpāramitām āsṛitya viharaty acittāvaraṇaḥ. cittāvaraṇa-nāstitvād atrasto viparyāsa-atikrānto. niṣṭha-nirvāṇaḥ.

IV. tryadhva-vyavasthitāḥ sarva-buddhāḥ prajñāpāramitām āsṛitya-anut-tarāṃ samyaksambodhim abhisambuddhāḥ. tasmāj jñātavyaṃ prajñāpāramitā mahā-maṃtro mahā-vidyā-maṃtro 'nuttara-mantro 'samasama-mantraḥ sarva-duḥkha-praśamaṇaḥ satyam amithyatvāt. prajñāpāramitāyāṃ ukto mantraḥ.

V. tadyathā oṃ gate gate pāragate pārasaṃgate bodhi svāhā.

Das Material g).

Der K.Tokuyama-Text (1984)

namas sarvajñāya,

Āryāvalokiteśvarabodhisattvo gaṃbhira prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ caramāṇo vyavalokayati sma. pañca skandhāstāśca svabhāvāḥ śūnyāṃ paśyati sma. iha śāriputra rūpaṃ śūnyatā, śūnyatāiva rūpaṃ, rūpān na pṛthak śūnyatā, śūnyatāyā na pṛthagrūpaṃ, yadrūpaṃ sā śūnyatā, yā śūnyatā tadrūpaṃ, evameva vedanā saṃjñā saṃskāra vijñānāni. iha śāriputra, sarvadharmāḥ śūnyatā'lakṣaṇā anutpannā aniruddhā amalā 'vimalā nōnā na paripūrṇāḥ. tasmāc chāriputra śūnyatāyāṃ na rūpaṃ, na vedanā, na saṃjñā, na saṃskāro, na vijñānāṃ, na cakṣuḥ śrotra ghrāṇa jihvā kāya manāṃsi, na rūpa śabda gandha rasa spraṣṭavya dharmāḥ, na cakṣurdhātur yāvan na mano vijñāna dhātur, na vidyā, nāvidyā, na vidyākṣayo, nāvidyākṣayo, yāvan na jarāmaraṇaṃ, na jarāmarāṇakṣayo, na duḥkha samudaya nirodha mārgo, na jñānaṃ, na prāptira prāptivādbodhisattvānāṃ prajñāpāramitāmāśṛ[ritya]tya viharatya citt'āvaraṇaḥ. cittāvaraṇa nā'stitvādatrasto, viparyāsā'tikrānto, niṣṭha nirvāṇaḥ. tryadhvavyavasthitāḥ sarvabuddhāḥ prajñāpāramitāmāśṛ[ritya]-tyā'nuttarāṃ samyaksambodhimabhisambuddhāḥ. tasmāj jñātavyaṃ. prajñāpāramitā mahāmaṃtro mahāvīdyāmaṃtro'nuttaramaṃtro 'samasama-maṃtras sarvaduḥkhapraśamaṇaḥ. satyamamithyatvācca prajñāpāramitāyāmukto maṃtraḥ. tadyathā,

Gate gate pāragate

pārasaṃgate bodhi svāhā.

iti prajñāpāramitāhṛdaya sūtraṃ, samāptaṃ.

Das Material h).

Der H. Omura Text (1996), aus dem L. Vaidya-Text (1961), von
H. Ōmura rekonstruiert

Prajñāpāramitāhṛdayasūtram

[Saṃkṣiptamātrkā]

Namaḥ Sarvajñāya

āryāvalokiteśvarabodhisattvo gambhīrayāṃ prajñāpāramitāyāṃ caryāṃ
caramāṇo vyavalokayati sma. pañca skandhāḥ, tāṃśca svabhāvasūnyān
paśyati sma.

iha Śāriputra rūpaṃ sūnyatā, sūnyataiva rūpan. rūpanna pṛthak
sūnyatā, sūnyatayā na pṛthag rūpam. yad rūpaṃ sā sūnyatā, yā sūnyatā
tad rūpam.

evam eva vedanā-saṃjñā-saṃskāra-vijñānānani.

iha Śāriputra sarvadharmāḥ sūnyatā'lakṣaṇā anuṭpannā aniruddhā
amalā na vimalā nonā na paripūrṇāḥ. tasmāc Chāriputra sūnyatāyāṃ
na rūpam, na vedanā, na saṃjñā, na saṃskārāḥ, na vijñānām. na
cakṣuḥ-śrotra-ghrāṇa-jihvā-kāya-manāṃsi, na rūpa-śabda-gandha-rasa-
spraṣṭavya-dhar-māḥ. na cakṣurdhāturjāvanna manodhātuḥ.

na vidyā nāvidyā na vidyākṣayo nāvidyākṣayo yāvanna jarāmaṇaṃ
na jarāmaṇakṣayo na duḥkha-saṃudaya-nirodha-mārgā na jñānaṃ na
prāptir nabhisamayaḥ.

bodhisattvasya prajñāpāramitāmāśritya viharatyacittāvaraṇaḥ. cittāvara-
ṇanāstitvādatrasto viparyāsātikrānto niṣṭhanirvāṇaḥ. tryadhva-
vyavasthitāḥ sarvabuddhāḥ prajñāpāramitāmāśritya anuttaraṃ samyak-
saṃbodhimabhisambuddhāḥ.

tasmājñātavyaḥ prajñāpāramitāmahāmaṃtro mahāvīdyāmanthro'nuttara-
manthro'samasamantraḥ sarvaduḥkhaśraṣamaṇaḥ satyamamithyatvāt
prajñāpāramitāyāmukto mantraḥ. tad yathā—gate gate pāragate pāra-
saṃgate bodhi svāhā.

iti prajñāpāramitāhṛdayasūtram samāptam.

4. Kapitel

Die Prinzipien der Übersetzung.

Da das Original in altindischen Versen geschrieben wurde, könnte man die Übersetzung entsprechend, auch in die altdeutsche Versen übertragen. Nun, in diesem Falle handelt es sich nicht so sehr um die Art der Übertragung als um das philosophische Verständnis des Textes. Mit Absicht haben wir darauf geachtet, daß der Text dem gegenwärtigen Denken und Verständnis entspricht.

Um ein kleines Beispiel zu nennen, greifen wir das indische Wort "rupam" auf. Rupam, bedeutet in der Sanskritischen Sprache die Farbe, der Körper und die Materie. Wissend, daß sich der deutschsprachige Kulturkreis der Gegenwart besonders stark am Materialismus und Physik orientiert, haben wir bewußt das Wort rupam als die Materie übersetzt. (Anm. -15)

Sicherlich haben wir aber auch die Übersetzungsprinzipien von Erich Frauwallner beherzigt so wie andere, weiter, genannte, Quellen. (Anm.-16)

Bötlingk, Otto und Roth Rudolph : Sanskrit Wörterbuch, Edgerton-Franklin : Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Diktionary, Sanskrit-Japanisch-Wörterbuch und Japanische Buddhistische Wörterbücher sowie Altchinesisch-Japanische Wörterbücher und schließlich Englische Übersetzungen, waren uns eine große Unterstützung in unserer Arbeit. (Anm.-17).

5. Kapitel

Deutsche Übersetzungswörter, die aus den Gründen der Semantik und des Syntax des Gegenwartsdeutschen ergänzt wurden.

Der klare Verstand verbietet es, schon auf dem Grund der Textkritik, daß man viele Ergänzungen und Ausstreichungen in einer Übersetzung, machen darf. Bei der deutschen Übersetzung haben wir die größte Schwierigkeit gehabt die Kopulas in dem Sanskritischen wie z.B. "aste" (ist), einfach auszustreichen. Die Ausnahme bildeten

ständige Wiederholungen oder die Kopulas, die in austreichbaren Kontext waren. In der Chinesischen, Russischen oder Japanischen Sprache ist die Ausstreichung der Kopula eigentlich einfach. Doch in der Deutschen Sprache kann sie nicht, auf Grund der Grammatik und des Syntax, einfach durchgeführt werden.

Um nur ein Beispiel zu geben, nennen wir die Worte "rūpaṃ śūnyatā" die in Sanskritischen Syntax bilden. Übersetzt ins deutsche als "die Materie" oder (die Form, die Farbe) bilden diese Worte kein Syntax.

Wenn man dies mit der S-V-C Syntax ausdrücke, so wäre es zu übersetzen, "Die Materie ist eine Leerheit", oder "Die Materie ist leer". Diese Übersetzung ist allerdings nur der Ausdruck einer allgemeinen und gewöhnlichen Wahrheit, so zu sagen einer formalen Logik. Nach der Wissenschaftlichen Abhandlung durch G.W.F. Hegel in "Wissenschaft der Logik" (Anm.-18),

"Urteil ist die ursprüngliche Teilung des ursprünglichen Einen, oder der Einheit, und das Wort Urteil bezieht sich auf das, was es eigentlich ist."

Somit begründet die gewöhnliche Logik ein, so zu sagen, Denkschema:

S ist a.....,

S ist b.....,

S ist c.....,

S ist d.....,

S ist i.....,

S ist n.....,

Wobei a.) steht für ; die Biologie, b.) für ; der Mensch, c.) für ; das Tier, d.) für ; der Affe, i.) für das ; Lebewesen, n.)für ; der Organismus, usw.

Doch die "Prajñāpāramitā - Weisheit" begehrt vollkommen andere Logik.

a. ist gleich (oder bedeutet) : Leerheit

- b. ist gleich (oder bedeutet) : Leerheit
- c. ist gleich (oder bedeutet) : Leerheit
- d. ist gleich (oder bedeutet) : Leerheit
- i. ist gleich (oder bedeutet) : Leerheit
- n. ist gleich (oder bedeutet) : Leerheit

Somit haben wir übersetzt-rūpaṃ śūnyatā-oder-sūnyatā rūpaṃ -.

Die Materie (oder Form, Farbe)ist gleich (oder bedeutet) Leerheit.

Dabei sind wir mit der englischen Übersetzung wenig zufrieden. Diese begeht die gewöhnliche, institutionelle Logik, die aussagt : "The form is emptiness",

Wobei es richtig ausgedrückt werden sollte : "The form, that mean [i.c.]emptiness".

Materialien : E), F),G).

(Anm.-19)

Die "Prajñāpāramitā-Weisheit" des Buddhismus begeht doch keine Urteilung des Eins. Die ergänzenden Worte[(d.i.)], die man in Klammern vorfindet, wurden durch die Gegenwart Sprache des deutschen Syntax und der Grammatik hineingezwungen. Die "Sunyata" als das höchste Abstrakte, ist in der Beziehung zu allen Dingen allgemeingültig. Nicht leer oder die Leere sollte im Text stehen, sondern Leerheit ohne jeglichen Artikel.

Das Material E).

PRAGÑĀ-PĀRAMITĀ-HRIDAYA-SŪTRA Shorter text restored.

Adoration to the Omniscient !

The venerable Bpdhisattva Avalokiteśvara, Performing his Study in the deep Prajñāpāramitā (perfection of wisdom), thought thus: 'There are the five skandhas, and these he Considered as by their nature empty (phenomenal).'

'O Śāriputra' he Said, 'form here is emptiness ' and emptiness indeed is form. Emptiness is not different from form , form is not different from emptiness. what is form that is emptiness, what is emptiness that is form,'

'The same applies to perception, name, coception, and knowledge.'

'Here, O Śāriputra, all things have the character of emptiness, they have no beginning, no end,

they are faultless and not faultless, they are not imperfect and not perfect .

Therefore, O Śāriputra, in this emptiness there is no form, no perception, no name, no concepts, no knowledge. No eye, ear, nose, tongue, body, mind. No form, sound, smell, taste, touch, objects.'

'There is no eye.' etc., till we come to 'there is no mind.' (What is left out here are the eighteen Dhātus or aggregates, viz. eye, form, vision; ear, sound, hearing; nose, odour, smelling; tongue, flavour, tasting; body, touch, feeling; mind, objects, thought.)

'There is no knowledge, no ignorance, no destruction of knowledge, no destruction of ignorance' etc till we come to 'there is no decay and death;no destruction of decay and death; there are not the four truths, viz. that there is pain, origin of pain, stoppage of pain, and the path to it. There is no knowledge, no obtaining (of Nirvāna).'

'A man who has approached the Praḅᅇāpāramitā of the Bodhisattva dwells enveloped in consciousness. But when the envelopment of consciousness has been annihilated, then he becomes free of all fear, beyond the reach of change, enjoying final Nirvāna,'

'All Buddhas of the past, present and future, after approaching the Praḅᅇāpāramitā , have awoke to the highest perfect knowledge,'

'Therefore one ought to know the great verse of the Praḅᅇāpāramitā, the verse of the great wisdom, the unsurpassed verse, the peerless verse, which appeases all pain—it is truth, because it is not false—the verse proclaimed in the Praḅᅇāpāramitā :

O wisdom, gone, gone, gone, to the other shore, landed at the other shore, svāhā !'

Thus ends the heart of the Praḅᅇāpāramitā.

Das Material F).

MAKAHANNYA HARAMITTA SHINGYŌ

Avalokitesvara Bodhisattva, doing deep Prajna pāramitā, Clearly saw the emptiness of
all the five O conditions, Thus completely relieving misfortune and pain.

O Shariputra, form is no other than emptiness, emptiness no other than form;

Form is exactly emptiness, emptiness exactly form.

Sensation, conception, discrimination, awareness, are
likewise like this.

O Shariputra, all dharmas are forms of emptiness, not born,
not destroyed;

Not stained, not pure, without loss, without gain;

So in emptiness there is no form, no sensation, conception,
discrimination, awareness;

No eye, ear, nose, tongue, body, mind;

No color, sound, smell, taste, touch, phenomenon;

No realm of sight . . . no realm of consciousness;

No ignorance and no end to ignorance . . .

No old age and death, and no end to old age and death;

No suffering, no cause of suffering, no extinguishing, no path;

No wisdom and no gain. No gain and thus

The bodhisattva lives Prajñā pāramitā .

O With no hindrance in the mind. No hindrance, therefore no fear,
Far beyond deluded thoughts, this is nirvana.

All past, present, and future Buddhas live Prajñā pāramitā,

And O therefore attain anuttara-samyak-sambodhi.

Therefore know, Prajñā pāramitā is

The great mantra, the vivid mantra,

The best mantra, the unsurpassable mantra,

It completely clears all pain – this is the truth, not a lie.

So set forth the Prajñā pāramitā, Mantra,

Set forth this mantra and say:

Gate ! Gate ! Paragate ! Parasamgate !

Bodhi svaha ! Prajñā pāramitā.

Das Material G).

[I . Introduction]

Avalokiteśvara. while meditating deeply on wisdom, observed that the five aggregates are all empty, [and that insight into this principle] would make possible liberation from all forms of pain.

[2. The Nature of Emptiness]

O Śāriputra. form is not different from emptiness and emptiness is not different from form; form is emptiness and emptiness is form. The same is true of feelings, perceptions, impulses, and consciousness.

O Śāriputra. all phenomena are marked with emptiness. They do not originate nor go into extinction ; they are neither impure nor pure; they neither increase nor decrease.

[3. The "Śūnyatizing" Process]

Therefore in emptiness : a) there is no form, feeling perception, impulse, or consciousness; b) eye, ear, nose, tongue, body, or mind; c)no forms, sounds, smells,tastes the touchable, or mental objects; d) no ignorance, down to no aging and death and no extinction of aging and death; e) no pain. no origin, no extinction, and no path; and f)no cognition or non-cognition because there is nothing to be attained.[4. Bodhisattva]

Because a bodhisattva depends on the perfection of wisdom, there is nothing that obstructs his mind. Because there is no obstruction, there is no fear. He parts from delusion and attains nirvāna. The Buddhas of the past, present and future realized, realize, and will realize supreme enlightenment by relying on the perfection of wisdom.

[5. Mantra]

Therefore it ought to be known that the perfection of wisdom is the great spell [mantra]. This is the spell of great wisdom, the supreme spell, the spell without equal, which eliminates all forms of pain. It is the truth, not false. The perfection of wisdom is explained in a spell . . . gate gare pāragate pārasamgate bodhi svāhā.

Das Kern-Sutra der Prajñā-Vollkommenheit Die abgekürzten Buchstaben

Verbeugung vor dem Allwissenden,

Heiliger Avalokiteschvara-Bodhisattva, sich das In-der-tiefen Prajñā-Vollkommenheit-Üben übend, hatte erleuchtet die Fünf-Gruppen, ihrem eigenen Wesen nach leer, hatte erachtet.

„Nun Schariputra, die Materie, d.i. Leerheit, Leerheit wegen, d.i. die Materie, außerhalb der Materie, d.i. keine Leerheit, was die Materie, d.i. Leerheit, was Leerheit, d.i. die Materie.

Ebenso Empfinden, Vorstellen, Gestalten, auch Erkennen.

Nun Schariputra, alle Gegebenheiten Leerheit-Unzeichen, Unentstehen-Unvergehen, Unschmutz-Unreine, Unleeren-Unfüllen. Also Schariputra, Leerheit wegen, d.i. keine Materie, kein Empfinden, kein Vorstellen, kein Gestalten, kein Erkennen. Kein Auge, kein Ohr, keine Nase, keine Zunge, kein Körper, kein Gehirn, weder Materie-Ton-Geruch-Geschmack-Berührung-Gegebenheiten noch Augenerkennen bis zum Denken.

Kein Wissen kein Unwissen kein Wissenaufhören kein Unwissen aufhören weder Alterntod noch Alterntodaufhören kein Leiden keine Leidenmasse keine Auflösung kein Weg keine Weisheit kein Gewinnen keine Erleuchtung.

Keiner Erleuchtung wegen, der Bodhisattva, sich der Prajñā-Vollkommenheit hingebend, bleibt unabhängig. Der Unabhängigkeit wegen, der Unerschrockene, der Unselbstentfremdete, [ist] im Nirvana.

Alle in der Vergangenheit-Gegenwart-Zukunft bleibenden Bud-dhas, sich der Prajñā-Vollkommenheit hingebend, [sind] die zur höchsten echten vollkommenen Erleuchtung Gelangten. Also zu verstehend : der Prajñā-Vollkommenheit-Groß-Spruch, der Groß-Wissen-Spruch, der Höchst-Spruch, der Ungreichbar-Spruch, alle Leiden löschend, keiner Unwahrheit wegen wahrhaft, der in der Prajñā-Vollkommenheit gesprochene Spruch : demzufolge—gate gate pāragate pārasaṃgate bodhi svāhā.

Somit das Sutra der Prajñā-Vollkommenheit vollendet.

(平成 8 年 6 月 7 日 受理)

ANMERKUNGEN :

- (1). H.Omura und M.W.Chalupa;
Die Übersetzung des Sutra Textes "Prajñāpāramitā-
hṛdaya -Sutra "mit Erläuterungen.
(MEMOIRS of the MURORAN INSTITUTE of
TECHNOLOGY, Cultural Science)
Volume 41,Nov.1991, Muroran Hokkaido/ JAPAN)
- (2) Kopiert handschriftlich vom japanischen Mönch Jagon
1694. In :Yoshio, Shimba: Hannya shingyo taisei, 1931
reprinted Kaimeishoin-Verlag, 1977,S.293 f.
- (3) Der Max Müller- Text (1884) In : ebenda, S.305 f.
- (4) Siehe Anmerkung (Anm.-19)
- (5) Mahāyāna - Sutra - Samgraha, Part 1, Edited by Dr. P. Vaidya.
Buddhist Sanskrit Texts - No.17 (the Mithila Institute of Post
Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning)
Darbhanga 1961.
- (6) Yoshio, Shimba : ebenda, S.312-316.
- (7) Siehe die Materialien a), d), e), f), g),
- (8) Fumimasa, Fukui : Hannyashingyo no Rekishiteki-Ken-
kyu, Shunju-Verlag, 1987, S. 123-139.
- (9) F.,Fukui : Recently discovered of the Sanskrit Heart 22

Sutra in Chinese Translation, attributed to Maitribhadra
(Cixian, jiken, X century) In BUKKYO-GAKU, Vol.26
1981, S. 1-139.

- (10) Shindo, Shiraishi : Bukkyogaku-Ronbunshu, Kyobi-Verlag.
1988, S. 462-555
- (11) S.Shiraishi : a.a. O. S. 487 f.
- (12) H. Nakamura : Hannyashingyo-Kongohannyagyō,
Iwatanamishoten-Verlag, 1987, S. 174 g.
- (13) Shogo, Watanabe : A Study of the Prajñāpāramitā-hṛdaya-sūtra.
In BUKKYO-GAKU, Vol.31 1991, S. 41-86.
- (14) Kijun, Tokuyama : Bonji Hannyashingyo, 1984, S.22-23.
- (15) Vlg. Hajime, Nakamura : Hikakushisoron, Iwanami-Verlag,
1993, S. 16 f. Yoshio, Shiba : Hannyashingyotaisei,
1931, reprinted Kaimeishoin-Verlag, 1977. S. 2 f. S. 15 f.
- (16) Frauwallner, Erich, : Die Philosophie des Buddhismus,
Akademie-Verlag, Berlin 1956, S.4 ff.
- (17) Böhtlingk, Otto u. Roth, Rudolph : Sanskrit-Wörterbuch,
Neudruck der St. Petersburg Ausgabe von 1855-1875
The Assosiation for Publishing Akademie Masterpieces,
1976, Reprinted in Japan.
a)Unrai, Ogiwara : Bonwa Daijiten, Kodansha-Verlag,

1985.

b)H.Nakamura : Bukkyogo-Daijiten, Tokyoshyoseki-Verlag, 1985.

c)Egerton, Franklin : Buddhist Hybrid Sanskrit Grammer and Diktionary, Reprinted in Delhi 1985.

(18) G.W.F. Hegel : Wissenschaft der Logik, Bd.I. S. 226 f.

(19) Das Material E) ; übersetzt von Max Müller 1884 In:Yoshio Shimba:a.a.O. S. 509 f.

Das Material F) ; übersetzt von Sōto Shu Shumucho 1982
Kinko Printing Tokyo/Japan.

Das Material G) ; übersetzt von Minoru Kiyata,
Buddhist Books International Los Angeles/Tokyo.

Der Tee als Medizin und Kunst.

Herausgegeben von

Marcell Wenzel Chalupa
und
Hideshige Omura

RÉSUMÉ

Der Tee ist seit Jahrhunderten bekannt als ein Genußmittel mit einem hohen Anspruch an die Ästhetik, sowie als ein breitwirkendes Tonikum und Medizin.

Der friedvolle Eroberungszug des Tees durch die Welt begann vor mehr als 2000 Jahren in China. In Japan entwickelte er eine besondere Ästhetische Kultur - Der Theismus. Seine Beliebtheit in der heutigen Welt ist und bleibt unbestritten. Schon in der entfernten Vergangenheit hatte man in China dem Tee besondere heilbare Wirkungen zugeschrieben. Mit dem Einzug der Wissenschaft des 20. Jahrhunderts wurde auch seine chemisch-pharmakologische Zusammensetzung bekannt und somit auch seine vielfach positiven therapeutischen Einflüsse auf den menschlichen Organismus aufgeklärt. Das wahrlich breite Spektrum des Tees von einem Kulturträger bis hin zu einem Antiviralen Mittel ist die Grundlage dieser Arbeit.

Die Tee-Pflanze (Camellia sinensis)



Einleitung

Der Tee ist nicht nur ein Genußmittel, sondern auch als Medizin und Tonikum ist er, vor allem in Asien, seit gut 4000 Jahren bekannt und geschätzt. Drogen, also getrocknete Pflanzenteile - vor allem deren Blüten und Blätter - waren bis zu 19. Jahrhundert in der Welt die Hauptquellen der Heilmittel Behandlung. Diese, wurden dann durch die Herstellung von standardisierten Substanzen abgelöst. In China und Japan, wo man vor allen den Grün-Tee trinkt, schrieb man beinahe charismatische Kräfte diesem Getränk.

Der Tee kam nach Japan in 6. Jahrhundert. Buddhistische Mönche haben ihm, neben anderen Gütern und dem Buddhistischen Glauben und Weisheit, nach Japan gebracht. Nach Europa allerdings kam der Tee erst am Anfang des 16. Jahrhunderts. Holländische Schiffe haben ihn nach Holland und Frankreich gebracht, wo er eine Asiatische Arznei angeboten wurde. Meistens war der Tee durch die lange und widrige Land - und Seereise schon bei seiner Ankunft in Europa verdorben. Trotzdem erreichte er hohe Preise und für die Schiffahrtsgesellschaft hohe Gewinne.

Marco Polo und auch andere Asien Reisende, haben den Tee während ihrer Chinareise in seinem Ursprungsland kennengelernt. Ein sprunghafter Handel, wie etwa mit der Seide, ist allerdings nicht entstanden. So, obwohl wir die Seidenstraße kennen eine Teestraße ist unbekannt. Die lange Transportreise nach Europa, verbunden mit dem Klimawechsel und Feuchte machte den Transport schwierig und die Teeware kam nicht immer in gutem Zustand auf den Markt. Mit Sicherheit war auch die Absperrung des Landes China in der Ming-Dynastie sowohl auch die rigorose Isolationspolitik Japans in der Ieyasu Ära dem Handel nicht gerade förderlich.

Wie auch immer, bis zu zwanzig Millionen Pfund Tee wurde nach Europa aus Asien jährlich importiert. Chinesischer und Japanischer Tee erfreuten sich besonderer Beliebtheit. In 18. Jahrhundert wurde dann der Tee zum Britischen Nationalgetränk. Die heutige Welt -Tee-Produktion umfaßt rund 250 Millionen

Kilogram. In England ist der zurzeitige Teeverbrauch bis zu 5Kg pro Kopf, in Vergleich mit der Bundesrepublik, wo nur etwa 150 Gramm pro Kopf jährlich, verbraucht werden.

Aus manchen Berichten von holländischen und portugiesischen Handelsleuten wurde überliefert, daß der Tee in China gut gekocht, mit Milch vermischt und mit Salz gewürzt, getrunken wurde. Diese, so zu sagen Suppe hatte besondere therapeutische Wirkungsweise. Sie sollte den allgemeinen Stoffwechsel beleben, gegen Podagra (Hyperurikämie), Blasen-und Nierensteine wirken und die Verdauung zu fördern.

Aber auch aufgebrühten Trockenblätter im klaren, heißen Wasser waren schon populär. In dieser Form wurde der Tee Genuß in die heutigen Tage überliefert. So, über die Jahrhunderte hinweg, in denen man der Tee zu erst als eine Medizin oder Heilmittel getrunken hatte, entstand durch seine allgemeine Beliebtheit ein Genußmittel, der heute allen Bevölkerungsschichten zugänglich ist.

DIE TEEKULTUR

Die Geschichte des Tees begann in China in dem Gebiet "Yangtse-Kiang" als die Zubereitung einer Medizin. Die Älteste Geschichte, die den Tee als Mittelpunkt hatte, entstand wohl im 8. Jahrhundert. Man nannte ihn die "Flüssige Jade" und war seit vielen Jahrhunderten in großen Ansehen in allen Schichten der chinesischen Bevölkerung. Chinesischer Kaiser hatte ihn als Geschenk für besondere Dienste an seine Vasalen verteilt. Der Tee wurde in der ersten Linie als eine Medizin betrachtet und somit galt er als etwas Besonderes im Reiche der Mitte.

Der Theismus

In Japan, wo der Tee seinen Einzug in 15. Jahrhundert feierte, entwickelte der Tee Genuß eine Asiatische - Romantische Teekultur der die Züge einer Religion hatte - den

Teismus.

Die lange Zeit der Isolation Japans beeinflusste die Entwicklung der Teekultur in der Japanischen Bevölkerung in nachhaltig positiver Weise. Nicht nur die oberen, reichen Kasten, sondern auch die einfache Bevölkerung konnte sich dem Tee Genuß widmen. In der selben Weise in der man Blumenarrangement zusammenstellte um den Eindruck der ursprünglichen Natur zu erreichen, hatte die einfache Bevölkerung auch den Tee Genuß und die spirituelle Ausstrahlung des Teismus gepflegt. Die Anbetung von einfachen und natürlichen Dingen der Natur, wie Wasser und Steine aus der Perspektive der Ästhetik und der Versinnlichung, war in allen Bevölkerungsschichten weit beheimatet. Kein Student der Japanischen Kultur kann in seinem Studium der Tee und damit verbundener Ästhetik und Einfluß, übersehen und auslassen. Die Taoisten haben ihn als Weg zur Unsterblichkeit bezeichnet. Buddhistische Mönche trinken ihn auch heute zur Belebung des Geistes in den langen Stunden der Meditation.

Und obwohl die Europäer, aus verständlichen Gründen die orientalischen Religionen wie oft Sitten ablehnten, der Tee als eine soziale Komponente wurde ohne Zweifel voll in dieser Kultur übernommen.

Der Tee in Asien versinnlichte die Einstellung und die Philosophie von Konfuzius, die Besonderheiten und Pikanterie von Laotse und das unsterbliche Aroma des Sakyamunis.

Er ist eine Einstellung und Ausdruck der Lebensart. Durch ihn verstehen und begreifen wir die psychische Subtilität Asiens. Die Geschichte des kulturellen Ausdruckes in der Entstehung des Porzellans und des Essens, der Kleidung und der Malerei, des Lacks und der Literatur, haben dem Tee und dem Teismus unendlich zu danken.

Der Tee in Occident

Sowohl die Europäischen Seeleute sowie arabische Reisende haben den Tee bereits in 9. Jahrhundert in China kennengelernt. Marco Polo beschreibt den Tee in seinen Berichten und auch über seinen Einfluß als ein Politikum um den sich zu streiten lohnt

und der man, auch, als eine Steuereinnahme Quelle am chinesischen Hof schätzt.

Nach Europa kam der Tee erst mit Holländischen Schiffen am Ende des 16. Jahrhunderts. Auch in Europa wurde er erst als eine Medizin gepriesen, und durch die Ärzteschaft empfohlen.

Wie auch immer, der Tee war zu dieser Zeit sehr teuer. Man berichtet, daß ein Pfund Tee im Jahre 1750 kostete gut 15 Shillings. Damit war er nur dem reichen Adel zugänglich und als Präsent in hohen Kreisen recht begehrt. So wurde der Tee, oder bei den Chinesen genannter Tcha und bei anderen Nationen gerufener Tay, als Geschenk an den Englischen König Charles II. durch die Ostindische Gesellschaft, geschenkt.

Die Popularität des Tees wuchs, vor allem in England, so zu sagen über die Nacht. Aus den Kaffee-Häusern entstanden Tee -Häuser und aus dem Tee als Getränk entstand der Tee das Politikum oder der Tee als Steuermittel.

Boston Tea Party

Seine politischen Ambitionen als Auslöser des Amerikanischen Unabhängigkeit Kampfes ist wohl dokumentiert und steht ohne Zweifel über alle Mißachtungen. In der jüngsten Geschichte ist die Sogenante "Boston Tea Party" mit allen ihren Implikationen wohl bekannt.

Am Ende des 17. Jahrhunderts gilt England als einer der größten Tee-Importere der Welt. Der Tee, der Die Ost- Indische -Gesellschaft von China und Japan nach England bringt, ist, neben dem Europäische Markt, auch für die Amerikanische Kolonien gedacht. Da sich bei dem Getränk, der seine Popularität in der Welt genießt, auch um ein politisches Mittel handelt, wird er durch die Englischen Regierung mit Steuer belegt nur um den Kolonisten in Amerika zu zeigen, wer die ausführende Macht in den neuen Kolonien hat, und wer deshalb Steuer erlassen kann. Die aufbegehrende und freiheitlich gestimmte Bevölkerung Amerikas entschließt sich deshalb zum Tee-boycott und kauft den Tee nicht mehr. Dieser bleibt nun in den Lagerhallen der Ost-

Indischer-Gesellschaft liegen. Eine Ware die nicht unbedingt unbegrenzt lagerfähig ist, bleibt nun auf Gedeih und Verderb gehortet, mit einer ungewissen Zukunft. Die Ost-Indische-Gesellschaft wendet sich an die Englische Regierung und damit auf das Parlament mit der Bitte um eine entscheidende Unterstützung in Ihrem Geschäftstreiben in den Kolonien.

Die meisten Parlamentarier besitzen selbst Beteiligungen und Aktien der Ost-Indischen-Gesellschaft und somit geben sie unverzüglich eine Monopol-Lizenz aus, die den Teevertrieb gänzlich in die Hände der Gesellschaft gibt. Ab sofort ist die Gesellschaft nicht mehr an Zwischenhändler gebunden, sondern kann den Tee direkt an die Kolonisten verkaufen. Diese Entscheidung verbilligt der Tee, wobei die Steuer, die minimal ist, nach wie vor bleibt, und somit nur als eine reine politische Mahnung besteht und zeigt, wer eigentlich der Herr in Amerika ist.

Das wiederstrebt dem Freiheitsgefühl der Kolonisten die, die Unabhängigkeit Amerikas von dem Mutterland England durchsetzen wollen. Ein anderer Aspekt dieses Monopols ist, daß alle Teehändler in den Kolonien sind somit aus dem Handel gezwungen da die Gesellschaft den Tee nun zu Niedrigspreisen anbieten kann. Die Kolonisten entscheiden sich allerdings gegen den Tee und für das Bestehen des Tee-boykotts. Die Überlegung war auch, wenn das Englische Parlament eine Monopol Stellung eine Gesellschaft einmal gegeben hatte, so ist die Möglichkeit, daß auch andere Firmen solche Monopol-Briefe leicht erhalten können. Die Kolonisten versuchen neben dem Tee-boykott die Tee Vorräte zu vernichten und es entstehen Aufruhen und Zwischenfälle.

In der Nacht dringen, als Indianer verkleidet Kolonisten auf einen Englischen Schiff und werfen alle 342 Tee-Kisten in den Bostoner Hafen. Diese Aufruhe und die Zerstörung vom Tee im Werte von vielen Tausenden Dollar kommt in die Geschichte als "Boston Tea Party".

Viele Kolonisten waren grundsätzlich gegen alle Aktionen die mit Gewalt verbunden sind, wohlwissend daß solche Aktionen nur Gegendruck hervorrufen werden . Die Antwort des Englischen Parlamentes lies nicht lange auf sich zu warten in dem sie

proklamierte eine Erstellung der "Status Quo" in den Kolonien. Zu diesem Zwecke wurde der "Zwingender Akt" ins Leben gerufen der, unter anderen, auch die finanziellen Verluste durch die Tee Vernichtung, wett machen sollte. Dieser Akt wurde als eine Willkür durch die Kolonisten betrachtet und der Unabhängigkeitsfunke wurde nur noch angeblasen.

Wenn wir das Geschehen nun verlassen und uns nur dem Resultat widmen, kann man mit recht behaupten, daß die Amerikanische Unabhängigkeit auf dem Datum basiert, auf dem man den Tee in den Bostoner Hafen geworfen hatte.

Der Tee machte in allen gesellschaftlichen Kreisen, und auch in Amerika, weiterhin vorschritte. Der berühmter Intellektueller und Wörterbuch Autor Samuel Johnson, der im Begriff war ein Buch der Amerikanischen Sprache herauszugeben, bezeichnete sich selbst als ein schamloser Tee trinker, der den Tag beginnt, überdauert und beschließt mit dem Tee.

Europa und Asien werden eng verbunden in der Hochschätzung des Tees und der Gutachtung des Teismus den dieser ist die Kunst in verschleierung der Schönheit die man sich nicht traut zu enthüllen. In jeder Teetasse ist ein Charme ein Substile Idealization der Welt.

Die Arten des Teezubereitens

Durch die Jahrhunderte kann man in den verschiedenen Arten der Teezubereitung auch unterschiedliche Epochen ersehen. Selbstverständlich kann man nach wie vor einen guten oder schlechten Tee vorbereiten. Die Qualität ist nicht nur von der Art der Zubereitung abhändig. Alle drei Arten, die in drei Zeitperioden in China beheimatet waren, kennen einen guten oder weniger guten Tee bieten. Der Chinesischer Poet aus der Sung-Zeit, Lichihlai schrieb zu der richtigen Tee Zubereitung folgendes:

"Es sind nur drei äußerst bedauernde Geschehnisse in der Welt;

Das Verderben der guten Jugend durch falsche Bildung, die Abwertung von guten Bildern durch ungehobelte und vulgäre Bewunderung und die völlige Verschwendung von guten Tee durch unfähige Zubereitung".

So wie alle Dinge auf dieser Welt, hat auch der Tee unterschiedliche Perioden der Zubereitung und daraus resultierenden Schulen:

- a) Der gekochte Tee
- b) Der geschlagene Tee
- c) Der gebrühte Tee.

Somit wurde der Tee in verschiedener Weise zubereitet. Der Kuchen Tee wurde gekocht, der Pulverisierte Tee wurde geschlagen und der Blätter Tee wurde gebrüht.

Alle drei Arten des trinkbaren Tees sowie des Tees als Substanz entsprach drei unterschiedlichen Zeitabschnitten, drei Dynastien in Ursprungsland China.

- a) Tang-Dynastie
- b) Sung-Dynastie
- c) Ming-Dynastie

Die Teepflanze war den Botanikern in alten China seit langer Zeit bekannt. Man nannte ihn je nach der Zeit, mit unterschiedlichen Namen: Tou, Tseh, Chung, Kha, Ming und Cha. Am Ende der Tang - Dynastie hatte man den Tee als Tee-Kuchen (oder Ziegel) zubereitet. Die Vorbereitung war durchaus primitiv und grob. Die Blätter wurden gedämpft, gebrochen und in Mörsern gemahlen und anschließend in die Form eines Kuchens geknetet. So zubereitet wurde der Tee dann mit Reis, Salz, Ingwer, Orangenschalen und Milch gekocht. Man kann noch in den heutigen Tagen in manchen Gebieten den Tee in ähnlicher Weise vorgesetzt bekommen. In Tibet wird er immer

noch mit Butter getrunken, oder in Rußland mit Zitrone Scheiben vorgesetzt. Zu Ende der Tang -Ära hatte man den Tee mit viel Feinheit und Raffinesse zubereitet. Sicherlich waren die Einflüsse des Buddhismus, der aus Indien nach China kam, von Bedeutung. Das Porzellan hatte seine Farbe und Gestalt verändert. Die Schalen wurden mit grüner und blauer Farbe ausgestattet. Später, in der Sung-Zeit findet man den Tee in blauen, dunklen Schalen. Der Tee in der Mingzeit hatte man mit Vorliebe in weißen Schalen serviert.

Betrachten wir aber der Tee in der Tang-Zeit, Der Tee Kuchen wird am Feuer geröstet bis er weich und gediegen wird. Dann zwischen Papier zum Pulver gerieben. Als einzige Ingredienz wird noch Salz zugegeben, alle andere Zutaten werden abgelehnt. So vorbereitet kommt er in den Kessel, um aufzukochen. Mit kaltem Wasser kurz abgeschreckt um das Wasser zu beruhigen und der Tee zum Setzen zu bringen, wird das Gebräu in die Schalen gegossen und getrunken.

Der Tee und das Tao und Zen

In der Sung-Zeit kam der Tee in pulverisierter Form in die Mode. Die Blätter wurden zum Pulver gemahlen und mit einem Bambusbesen in der Schale mit heißem Wasser geschlagen. Salz - aus der Tang-Zeit wurde gänzlich abgelehnt. Der Pulverisierte Tee wird nun in schwere, braune Schale serviert. Die Tee-Zeit beginnt eine poetische Zeit. Buddhismus, vor allem die südliche Zen- Sekten die unter dem Einfluß des Taoismus stehen, entwickeln Rituale des Teetrinkens. In dieser Zeit kommt der Tee mit dem Buddhismus nach Japan. Die Buddhistische Mönche sammeln sich vor der Statue des Bodhi Dharma und in einem Ritualen Zeremoniell trinken sie den Tee aus einer Schale. Der Taoismus unter dem Buddhistischen Einfluß entwickelte sich hier in Japan zu Zen-Buddhismus und die Teezeremonie lebt seither in Japan. In den 13. Jahrhundert fallen Mongolische Stämme ins China und zerstören die hohe Tee Kultur. Obwohl dieser Okkupation nicht lange andauerte, der pulverisierte Tee wird als Getränk vergessen und auch in der Ming-Zeit nicht mehr angewendet. Der Tee wird nun aufgebrüht und

in weißen Besteck serviert. In dieser Form wird der Tee auch durch die Europäische Reisende kennengelernt. Der pulverisierte Tee lebt seit dem nur noch in Japan, wo er eine große Blütenzeit seiner Entwicklung in der Teezeremonie erlebe.

Der aufgebrühte Tee, der man jetzt in den Zeit der Ming-Dynastie, die durch Wirren und Aufruhen beladen war, zubereite ist nur ein Getränk, ohne sein Charisma und Lebensspiritismus.

Japan ist ein Monitor der Chinesischen Kultur. Wohl ist der Tee um das Jahr 729 in der Zeit des Shomu-Teno nach Japan, durch den Ambassadeur am Hofe Tang , gekommen. Die eigentliche Teepflanzen, die in Japan heimisch wurden, brachte aus China Mönch Saicho und pflanzte sie in dem Gebiet Yeizan - wo sie gut gedeihen haben.

Eine zweite Tee Import Welle die den Teeanbau in Japan belebte fand in 1191 statt, wenn Yeisaizenji von seinen Zen Studien nach Hause kam. Der Platz Uji bei Kioto, wo man die Tee Pflanze gesetzt hatte, ist bis heute berühmt.

In 15. Jahrhundert ist der Tee in Japan voll etabliert und der Teismus ist ein Kultureller Ausdruck in der Teezeremonie. Der gebrühte Tee ist zwar bekannt und wird in allgemeinen getrunken, der pulverisierte Tee, der aus China nach Japan kam, ist hier in der Tee-Zeremonie erhalten. Der Tee Ideal, oder Thaeismus ist Heute nur in Japan in der Tee-Zeremonie beheimatet.

Wir dürfen sagen, daß der Zennismus ist eine Weiterentwicklung des Taoismus. Der Taoismus ist eine Verkörperung der Ästhetik. Chinesischen Gelehrten haben immer den Taoismus als " die Art in der Welt zu existieren" beschrieben.

Taoismus sucht immer die Schönheit in unserem Leben und in der Welt, die nicht immer uns so vorteilhaft erscheint. Damit unterscheidet sich Taoismus zu Buddhismus. Eine Allegorie aus der Sung-Zeit, die drei Essig-Prüfer beschreibt zeigt am bestens die drei phylosophisch-religiösen Einstellungen:

Sakyamuni, Confuzius und Laotse stehen vor einem Faß mit Essig.

Alle drei tauchen einen Finger in den Faß und kosten den Essig.

Als eine materielle Tatsache findet Confuzius den Essig sauer, Buddha findet ihn bitter denn das Leben und den Lebensweg mit der Umwelt für den Mensch ist bitter und Laotse findet den Essig süß denn er sucht und findet das Nützliche und dadurch Positive für den Mensch.

Das Nützliche ist ohne die Form und Aussehen. Beides ist ohne Wichtigkeit denn die Nützlichkeit des Kruges liegt in der Leere des Kruges, wo Wasser bleiben kann, wo sich Wasser sammeln kann. In der Leere ist deshalb die mögliche Dynamik; ist die Aktion. Einer, der in sich selbst ein Vakuum herstellen kann, so daß andere frei mit ihren Gedanken eintreten können, wird unweigerlich zum Meister aller Situationen. Er kann alles übersehen. Er kann das Ganze erkennen und dadurch das Einzelne richtig bewerten und einsetzen. Diese Philosophie beeinflusste Japan und Japaner in vielerlei Hinsicht und in vielen Gebieten des Lebens. Nicht widerstehen; denn die Gesamtheit beherrscht den Teil. Diese Einstellung beeinflusste alle Bereiche des Seins. Sogar und vor allem des Fechtens und des Kampfes in dem man den Gegner ermüdet und entkräftet durch gezielten Nichtwiderstand. Vakuum, wobei man seine Kräfte und Stärke konzentriert für den entscheidenden Moment. Auch in der Kunst ist diese Einstellung sichtbar. In dem man etwas nicht erklärt, sondern offen läßt, gibt man dem Zuschauer die Möglichkeit dies selbst zu Ende zu denken, ausfüllen, das bestehende Vakuum zu füllen und somit ein Teil des Werkes zu sein.

Die eigene Ästhetische Emotionen werden somit der Teil des Ganzes.

Zen kommt aus dem Taoismus, wie ein Baum der seine Zweige entwickelt und in die Weite strecken und wachsen lassen kann. Zen verdankt der Name dem Sanscritischen Wort Dhyana, was Meditation bedeutet. Sakyamuni selbst fühlte, daß die Selbstrealisation und Erleuchtung durch die Meditation zu erreichen ist. Diese Weisheit erreichte er dann an seine Nachfolger bis hin zum Bodhi Dharma, dem ersten Patriarch des Chinesischen Zen. Zen, sowie Tao ist ein Vertreter des unbedingten

Individualismus. Der, dem Zen folgend, zielt einen direkten Kontakt zu der Natur der Sachen zu erhalten. Deshalb bevorzugt der Zen Bilder in Schwarz und Weiß anstatt in den vielsagenden Farben, die so manche Buddhistische Schulen bevorzugen.

Der Individualismus, der man dem Zen als eine Grundlage, auf der er steht bescheinigt, spiegelt sich am besten in einem Dialog, der durch die Überlieferung bekannt geworden ist. Dieser Dialog beschreibt den Taoist Soshi:

Eines Tages spazierte Soshi mit seinen Freunden entlang des Flusses. "Schau, wie vergnügt sich die Fische erfreuen im Wasser" ruft seinem Freund Soshi zu. Sein Freund entgegnete Soshi kurz", Du bist kein Fisch, wie kannst Du es wissen, daß sich die Fische im Wasser erfreuen?"

"Du bist nicht ich "erwidert Soshi; " wie kannst du es wissen, daß ich nicht weiß, daß sich die Fische erfreuen?"

Taoismus begründet eine Basis für alle Ästhetischen Idee wobei Zen macht diese Ideen praktikabel.

Über Zen und Tao zu sprechen in der Verbindung mit dem Tee und dem Teismus ist eine Notwendigkeit um den Verständnis zu dem Theismus sowie zu Tee-Zeremonie entstehung zu gewinnen. Der weitere Schritt in der Tee Kultur ist der Schritt zum Tee-Raum, dessen Entstehung und dessen Ethik.

Die Tee-Zeremonie

Die Zen Kultur beeinflusst das Leben in Japan, wobei das Leben ist ein Ausdruck der gesamten Kultur Japans. Der Tee- Raum ist nur ein Beispiel.

Der Tee-Raum, oder in der Japanischen Sprache "Sukiya" genannt wird, war und bis heute ist unter dem Einfluß des Theismus,des Zen.

Diese Sukiya ist kein Tempel der Kultur, keine architektonische Kostbarkeit. Leicht

gebaut aus Holz und Bambus ähnelt mehr einer Strohütte. Der erste Tee-Raum wurde durch den Tee-Meister Rikiu gebaut. Die Proportionen des Entwurfs wurden durch Showo in den 15. Jahrhundert durchgeführt. Showo, selbst ein bekannter Tee-Meister hatte bestimmte Vorstellungen über die Masse und das gesamte Aussehen des Tee-Raumes postuliert. Rikiu hatte die gesamte Tee-Zeremonie sowie alle Bestandteile zum hohem Grade der Perfektion weiter entwickelt. Die Tsukiya besteht aus dem eigentlichen Tee-Raum, einem Vorzimmer (Midsuya) wo alle Tee-Untensilien aufbewahrt werden, und einem Wartezimmer (Machiai) wo alle Gäste vor der eigentlicher Tee-Zeremonie warten. Zu einem Tee-Raum gehört ein japanischer Garten der die richtige Stimmung und Inspiration vor der Zeremonie bietet. Eine Tee-Zeremonie ist ein Geschehen in Menschlichen Leben, das nicht wiederholbar ist. Sicherlich kann man unterschiedliche Zeremonie besucht haben, die Zeit und die damit verbundenen Saison, der Kreis der Anwesenden sowie alle Untensilien die in jeden Falle in der Zeremonie benützt werden, sind einmalig. Als ein einmaliges Geschehen muß man die Zeremonie werten und aufbewahren. Der Gastgeber, der sich bewußt ist welche Einmaligkeit, verbunden mit der Saison in der Ausrichtung der Zeremonie, vor Ihm steht, bedenkt alles was notwendig ist, damit dieses spirituell durchdringendes Geschehen den richtigen Verlauf einnehmen kann. So werden die Einladungen wohl überlegt, das Geschirr wohl ausgewählt. Neben der Kombination des Besteckes muß auch die Rolle, die die Wand schmückt, nach unterschiedlichen Gesichtspunkten gewählt werden. Welche Blumen spiegeln am bestens die Jahreszeit und das Geschehen. Der Gastgeber weiß, daß die Gäste wohl alle Nuancen wahrnehmen und alles bewerten werden. Wenn der Tag und die Zeit angekommen ist, sammeln sich die Gäste in dem Wartezimmer. Hier haben sie die Möglichkeit ihre Mäntel abzulegen, und das Wasser zu kosten, das man zu der Teezubereitung benützen werde. Man wartet auch auf dem Gastgeber um ihn zu begrüßen. Die Gästengruppe besteht meistens aus 5 Personen.

Diese suggestive Zahl basiert an einem alten Spruch der besagt "Fünf ist mehr als Grazien und weniger als Musen". Gäste wählen einen Hauptgast der die gesamte

Gruppe vertreten wird. Nach dem sie alle den Gastgeber begrüßt haben, werden sie in den Garten geführt, um sich dort an die bevorstehende Zeremonie spirituell vorzubereiten. Auf dem Wege von dem Wartezimmer zum Tee-Raum (Roji) bleiben die Gäste vor einem Tsukubai - Steinernem Wasserbecken stehen aus dem sie mit einem Schöpflöffel Wasser zum reinigen von Mund und den Händen entnehmen. So gereinigt und von allen weltlichen Problemen frei treten die Gäste zum Tee-Raum. Der Eingang (Nijiriguchi) ist nicht höher als 90 cm und deshalb zwingt alle Teilnehmer sich zu bücken und in dieser gebückten Form hinein zu kriechen. Dieses Eintreten ist Absicht, nur um allen Teilnehmern ins Gedächtnis zu rufen, daß hier keine weltliche Positionen und Stände Gültigkeit haben. Der eigentliche Tee-Raum zeichnet sich mit einer bescheidenen Einfachheit. Der Raum ist klein und suggeriert eine gewollte Armut. Diese Armut ist allerdings eine raffinierte und sehr ausgewogene und bedachte Kreation, denn das Erbauen von Tee-Raum gilt wohl als einer der teuersten Baumaßnahmen Japans. Nach dem Eintreten betrachten die Gäste die Schriftrolle die jetzt an der Wand in einem kleinen Alkoven hängt und inspizieren den Kessel mit der Kohlenpfanne. Alle nehmen Plätze ein die sie zuvor zugewiesen bekommen habe. Der Gastgeber präsentiert allen Besuchern einen kleinen Imbiß um damit den möglichen Hunger wähen der Zeremonie zu stillen. Nach dem kleinen Essen werden durch den Gastgeber Süßigkeiten geboten, um den bitteren Geschmack des Pulvertees zu überspielen. Während der Gastgeber nun zu der eigentlichen Tee-Vorbereitung schreitet, erholen sich die Gäste in dem Garten und warten auf die Einladung.

Der Gastgeber bietet die Gäste wieder ein. In der Zwischenzeit hatte man die Schriftrolle aus dem Alkoven entfernt und auf seinen Platz eine Vase mit Blumen gehängt. Alle Gäste bewerten die Blumenzusammenstellung und nehmen wieder Plätze. Jetzt werden sie mit einer Schale in der ein sehr dickflüssiger Tee ist, bedient. Alle Gäste trinken nacheinander aus dem selben Gefäß wobei sie, nach dem trinken, die Kante der Schale putzen bevor sie die Schale weiter reichen. Nach dem Tee - Einnehmen entwickelt sich wieder ein Gespräch über alle Untesilien und über den Tee, den sie gerade genossen haben. Der Gastgeber beginnt einen Zweiten, diesmal

dünnblütigen Tee vorzubereiten. Dieser Tee benötigt mehr Wasser. Auch diesmal wird der Tee in der Schale mit kochendem Wasser aufgeschlagen und jeder Gast erhält eine Schale Tee mit dazugehörenden Süßigkeiten. Diese Süßigkeiten, die im Aussehen und Geschmack die Jahreszeit spiegeln sollten, werden von jedem Gast entnommen und den Rest weiter gereicht. Auch hier nach dem Trinken entwickelt sich ein Gespräch über die Schöpfkelle und der Wasserkessel. Damit ist die eigentliche Tee-Zeremonie(Chaji) zu ende.

Aber kehren wir noch einmal zu der Architektonik des Tee-Raumes und zu seiner Einfachheit.

Mit Sicherheit ist hier der Einfluß des Zen-Buddhismus am stärksten zu spüren. Die bestehende Zen-Kloster sind keine Tempeln, sondern Schulen und Meditationsplätze. Das Tee-trinken der Mönche vor der Statue des Bodhi-Dharma, war die Grundlage der Tee-Zeremonie. Die Räumlichkeiten der Klöster sind einfach und schmucklos gehalten. In dem Alkoven des Versammlungsraumes steht die Statue des Bodhi-Dharma oder Sakyamunis begleitet mit seinen Nachfolgern Kashiapa und Ananda. Die einzigen Opfergaben sind Blumen und Weihrauch die man Kashiapa und Ananda entgegen, für ihre Verdienste um die Zen-Sekte, bringt. Diese Einfachheit sowie auch der Alkoven finden wir wieder in dem Tee-Raum und in der "Tokonoma" dem Alkoven des Tee-raumes. Alle großen Tee-Meister waren auch Zen Studenten. Deshalb die Einflüsse des Zen so unmittelbar in der Beseligung der Zeremonie. Die Größe des Raumes, etwa 3 m² ist wiederum durch das Vikramaditya-Sutra festgelegt. In dieses Sutra, Vikramaditya begrüßt Manjushiri und 84 Tausend Buddhajünger in so einem kleinen Raum. Es ist nur eine Beschreibung der Nichtigkeit des Raumes für einen Erleuchteten. Sowohl der Garten wie auch den Roji soll einem die Möglichkeit des sich selbst sehen, der Meditation geben. Auch dieser Weg ist eine Reinigung von Weltlichen Einflüssen und Sorgen. Alles hier einwirkt auf die spirituelle Erhabenheit und Ästhetisches Denken.

Die Japanische Tee-Zeremonie ist ein sozialer Akt mit der Referenz zu allem Lebendigen. In dessen Handlung wird Harmonie des Geistes mit der Umwelt

angestrebt und Respekt für den Mensch sowie für alle Dinge postuliert. Es anstrebt das perfekte Leben in dem man Frieden dem Menschen und seinem Geiste bringt.

Der Tee und seine Pharmakologische Wirkung.

Durch die allgemeine Zuwendung zu natürlicher Lebensweise und damit verbundenen Suche nach natürlichen Heilmitteln kam, neben anderen Pflanzen und deren Drogen, auch der Tee in das Spektrum der modernen, forschenden Wissenschaft. Vor allem in den 70. Jahren dieses Jahrhunderts, haben Wissenschaftler entdeckt, daß Fruchtsäfte, Weine und Getränke wie den Tee eine ausgeprägte Antivirale Wirkung aufweisen. Diese Antivirale Wirkung wurde in Labor -und Tiertesten nachgewiesen. Durch Reihenuntersuchungen wurden Substanzen in unterschiedlichen Pflanzen, Früchten und Tees festgestellt die mannigfaltige Pharmakologische Wirkungen aufweisen.

THEA FOLIUM

Die Tee-Pflanze (Thea Folium) kommt zu dem Verbraucher in zwei Formen. Die in Europa wohl bekannte getrocknete" Schwarze Form "und die in Asien mehr konsumierte "Grüne Form".

Der Schwarze und Grüne Tee sind getrocknete Blätter des Teesträuches "Camellie sinensis". Die Blätter des Schwarzen Tees sind zusätzlich fermentiert, und somit entsteht die schwarze Kolorierung.

Die Blätter enthalten etwa 2,5 bis 4,5% Coffein (bzw. Thein, ein Alkaloid identisch mit dem (coffein, Chemisch=
Trimethyldihydroxypurin)

0,04% Theobromin,
geringe Mengen von Theophyllin,
10% von Gerbstoffen und
Ätherische Öle.

Die Gerbstoffen beinhalten ein Gemisch von Polyphenolen. Es wurde festgestellt, daß der in Asien konsumierter Grün-Tee dreimal so viel Polyphenole enthält als der Schwarz-, bzw. fermentierter Tee.

Es sind mehr als 200 Polyphenole in verschiedenen Pflanzen und Früchten nachgewiesen. So findet man in den:

Äpfeln und Kartoffeln	= Chlorogen Säure
Nüssen und Trauben	= Ellagik Säure
Wein (Rot-Wein)	= Gallik Säure
Kleie und Gerste	= Ferulik Säure
Zwetschken, Kirschen	= Cinnamik Säure und in
Grün-Tee	= Catechin (170mg/1gr. Tee)

POLYPHENOLE IN GERBSTOFFEN

Die Stoffe Tannin (Acidum Tannicum) und Gallotannin Säure von denen man wußte, daß sie sich in Gallen von verschiedenen Pflanzen befinden und Estern der D-Glucose mit Gallussäure und Galloylgallussäure sind, befinden sich vor allem in den Blättern des Grün-Tees.

Die therapeutische Nutzbarkeit von Tanninalbuminat, aus dem die Freisetzung des Gerbstoffes Tannin nur langsam erfolgt und daher keine Reizungen verursacht, wird vor allem als entzündungs- und sekretionshemmender, bakterizider Stoff gegeben. Tannin als astringierende Substanz wird mit Erfolg bei Durchfällen sowie Spülungen, Tamponagen und Schleimhautkatarrhen seit langen angewandt.

Eine neue Indikation hatte sich seit 1970 herauskristallisiert. Vor allem die

Canadischen Wissenschaftler haben, mit an Polyphenolen reichen Fruchtsäften, experimentiert und dabei interessante antivirale und anticarcinogene Eigenschaften festgestellt. In Screening-Test hatte man dann festgestellt, daß der Grün-Tee dreimal so viel therapeutisch wirksamen Polyphenol enthält als der fermentierte Schwarzer-Tee. Es scheint, daß der Polyphenol Tannin-oder Acidum Tannicum-besonders aktiv Virus abtötend wirkt. Der Wirkungsmechanismus ist zur Zeit noch nicht voll aufgeklärt. Es scheint allerdings, daß Tannin den Virus derartig bedeckt, daß er nicht mehr die Fähigkeit besitzt in die Gastzelle und dessen Nukleus einzudringen.

Phenole zeigen generell eine Anticarcinogene Wirkung. Als Antioxidancien sind sie stärker wirksam gegen freie Nitroamine als Vitamin C (Ascorbinsäure) oder Beta-Caroten (Provitamin -A).

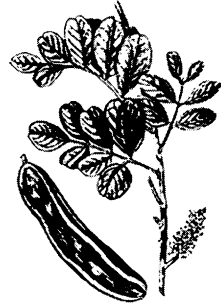
Unter allen wirksamen Polyphenolen oder Tanninen befindet sich eine Substanz mit dem Namen Catechin. Catechin findet man besonders stark konzentriert in den Blättern des Grün-Tees. Catechin kann man allerdings auch in anderen Pflanzen finden die in Europa beheimatet sind. Crataegus, Heidelbeeren, Weiderinde und Johannisbrot sollte man als Beispiele nennen.

Der adstringierende Geschmack von Chinarinde, sowie Weiderinde usw. beruht auf dem Vorkommen von Catechingerbstoffen.

JOHANNISBROT

Eine andere Pflanze die Catechine beinhaltet ist das Johannisbrot. (*Ceratonia siliqua*) Getrocknet und gemahlen wird Johannisbrot als Prävention und Behandlung von Durchfallerkrankungen angewandt. Johannisbrot besteht außerdem aus Eiweiß, Traubenzucker und Fett. Im Mittelmeergebiet sowie in Arabien, wo Johannisbrot kultiviert wird, bietet es ein Nahrungsmittel für die Menschen und Tiere.

Johannisbrot Pflanze und Frucht.



RATANHIAWURZEL.

Ratanhiawurzel (*Ratanhiae Radix*) die in der Kordillere beheimatet ist, beinhaltet bis zu 18% Catechingerbstoffe. Als Tinktur für Topische Behandlung wird sie gerne gegen Gingivitis und Stomatitis benutzt. Die braunrote Wurzel der *Krameria Triandra* die Hülsenfrüchte bringt, wird daher gerne auch in die Zahnpasten als Zusatz beigemischt.

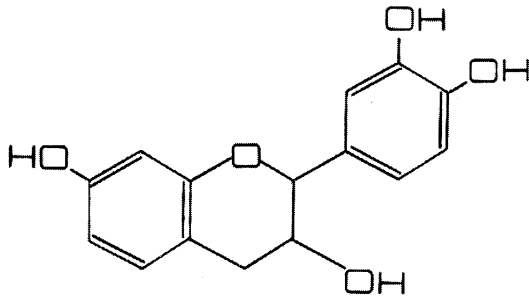
TORMENTILLWURZEL

Tormentillwurzel (*Rhizoma Tormentillae*) hat die selbe Indikation wenn auch der Gehalt an Catechingerbstoffen bis zu 20% reichen.

CATECHINE - CYANIDANOL

Catechine, als Polyphenole, schienen auch manchen Intoxikationen präventiv entgegen zu wirken. Catechin - Cyanidanol ist ein hervorragender Radikalfänger. Gibt man dieser hepatotrope Mittel präventiv vor einer möglichen Lebervergiftung, zum Bsp. mit Amanitin oder Galaktosamin, werde dieser die Giftwirkung neutralisieren. Die praktische antitoxische Wirkung von Cyanidanol als Antidot kann man nicht nur bei Alkohol-Intoxikationen anwenden, sondern auch bei langzeit Medikationen mit toxischen Nebenwirkungen wie im Falle der Behandlung mit Tuberkulostatika oder Psychopharmaka.

Catechine - Epicatechin
(ein Derivat von Flavonen)



TANNIN

Wie man sieht, ist die Wirkung des Phenolen Tannin/Catechin nachweislich signifikant in der Topischen Behandlung sowie in der antitoxischen Prophylaxe. Da Phenolen auch starke Radikalfänger von Nitroaminen sind, kommt eine anticarcinogene Wirkung zu Tage.

Japanische Studien zeigen, daß eine Erhöhung der Resistenz gegen Dysenterie, unter dem Einfluß der Grün-Tee Polyphenolen, durchaus möglich ist. Damit wurde die Therapeutische Indikation erweitert, nicht zuletzt durch anschließende Berichte, die über eine Anwendung von Polyphenolen aus Grün-Tee gegen Dysenterie auch in anderen Asiatischen Ländern beschreiben. Es scheint somit, daß die Polyphenole generell positive Einflüsse auf den Menschlichen Organismus haben.

Der Tee, als Träger von Tannin, wurde oft in der Vergangenheit als Elixier des Lebens bezeichnet. Die Antivirale und Anticarcinogene Wirkung auf Grund von Phenolen wurde seit 1940 besprochen. Es scheint, auch, daß der Tee eine ausgeprägte inhibierende Wirkung auf ein breites Erreger-Spectrum habe. Neue Japanische Untersuchungen zeigen, daß Tees - vor allem der Grün-Tee - eine gute Anwendung in der Stomatologie haben. Tees die einen hohen Gehalt an Tanninen und Fluoriden aufweisen, wirken positiv gegen die Entstehung von Caries. Es wurde bereits auch eine Zahnpaste, die eine Tannin-Basis besitzt, entwickelt. Die Anwendung ist vor

allem bei Kindern gedacht, wo die Entstehung von Cavitäten besonders gravierend ist.

EPIGALLO-CATECHINGALLAT

Einer der bekanntesten Phenole die sich im Japanischen Grün-Tee (*Camellia Sinensis*) befindet ist Epigallo-Catechingallat der in Tierversuchen eine ausgeprägte antimutagene Wirkung zeigt. Damit gilt *Camellia Sinensis* als ein potenter natürlicher Krebs-Antidot.

Die Wirkung wird dokumentiert in der Inhibition von Nitrosaminen die als starke Carcinogene Stoffe gelten. Polyphenole die eine Schleimhautaffinität besitzen, würden vor allem bei der Behandlung von Oralen Tumoren von Bedeutung sein. Eine Versuchsreihe in den Ländern wo das Kauen und Schnupfen vom Tabak populär ist, würde mit Sicherheit interessante Wirkungseinflüsse bieten.

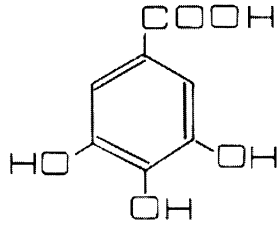
Daß der Tee eine antinfektiöse und entzündungshemmende Wirkung besitzt, ist den Chinesen, wo der Tee als so zu sagen "Aurum Potabile" geschätzt wird, seit Jahrtausenden bekannt.

Die Wirkungsweise liegt vor allem in der Freisetzung des Gerbstoffes - Tannin der die oberen Schichten und des Bindegewebes zu einer oberflächlichen Verdichtung bringt. So verdichtetes Gewebe bildet eine unlösliche Verbindung mit dem körpereigenen Eiweiß und somit zur Reizminderung, Sekretionshemmung und Infektionsprävention beiträgt.

Es sind aber nicht nur die Polyphenole-Tannine und deren Derivatene die den Tee so wirksam und so geschätzt machen.

Teeblätter besitzen auch andere Substanzen, die seit Generation in der Behandlung von Krankheiten angewandt werden.

Theophyllin und Theobromin die mit dem Coffein chemisch verwandt sind und in der Behandlung von Asthma Bronchiale als Mittel der Wahl gelten, wurden ursprünglich in den Blättern gefunden und von dort dann isoliert. Heute stellt man Theophyllin synthetisch her da die Ausbeute aus dem Tee nur sehr wenig an Wirkstoff bietet.



Gallussäure - 3,4,5, -Trihydroxybenzoessäure

THEOPHYLLIN

Vor allem das Alkaloid Theophyllin, das man in der Natur in den Teeblättern vorfindet, ist ein stark wirksames Broncholytikum. Theophyllin ist ein weißes, geruchloses, im Wasser schwer lösliches und bitter schmeckendes Pulver. Die Wirkungsweise basiert auf der Relaxation der glatten Bronchialmuskulatur durch eine Hemmung der Phosphodiesterase und der Adenosinrezeptoren, sowie auf eine Translokation des intrazellulären Kalziums.

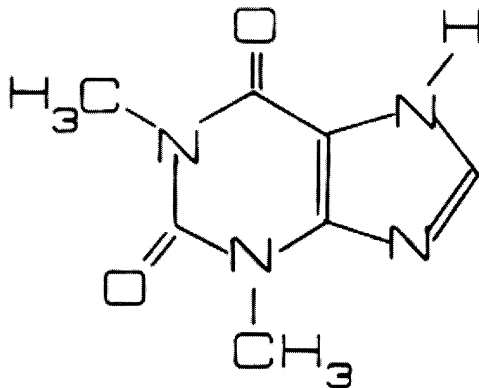
Diese dreifache Wirkungsweise bewirkt, unter anderem, eine Modulation von Katecholaminen und daraus resultierender Erschlaffung der Bronchialmuskulatur. Daneben einwirkt Theophyllin auf die Erhöhung des Linksventrikulären, enddiastolischen Druckes und auf die Steigerung des Herzzeitvolumens. Mit der Abnahme des peripheren Widerstandes durch Dilatation der peripheren Gefäße ist Theophyllin besonders bei der Behandlung von Lungenödems und der Dyspnoe wichtig.

Daneben weißt Xanthin-Theophyllin bedeutende Wirkung auf das Zentralnervensystem sowie auf den Wasser- und Mineralhaushalt des Körpers. Auf das ZNS wirkt er, so wie Coffein, anregend. Als Diuretikum wurde Theophyllin vor allem bei Behandlung von kardialen und nephrotischen Ödemen angewandt.

Kardiales Ödem, der mit Zyanose und Dyspnoe bei dekompensierten Herzkrankheiten auftritt, sowie Renale Ödeme auf Grund von chronischen Nierenleiden waren die Indikationen von Theophyllin bis zum Aufkommen der modernen Saluretika. Bei der Behandlung von Lungenödemen wird Theophyllin auch heutzutage angewandt, vor allem in der Verbindung mit Begleitenden Herzglykosiden.

Die starke Harnauscheidung unter Theophyllin ist vor allem durch die positiv inotrope Wirkung auf den Herzmuskel, die Hemmung der Rückresorption von NaCl in den Tubuli und die verstärkte Durchblutung des Nierenbeckens, verursacht.

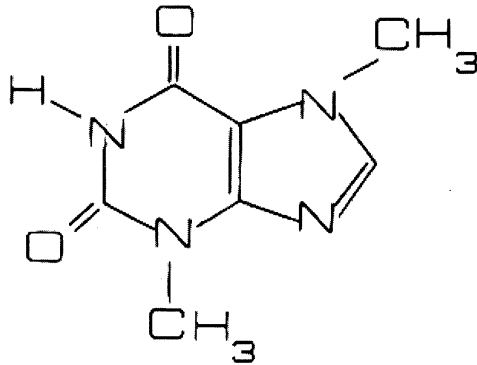
Theophyllin



THEOBROMIN

Die Anwendung von Theobromin, eine andere Substanz, die man im Tee findet, wird heute nicht mehr empfohlen. Theobrominum purum war wegen seiner gefäßerweiternder Wirkung lange Zeit als Diuretikum angewendet.

Theobromin

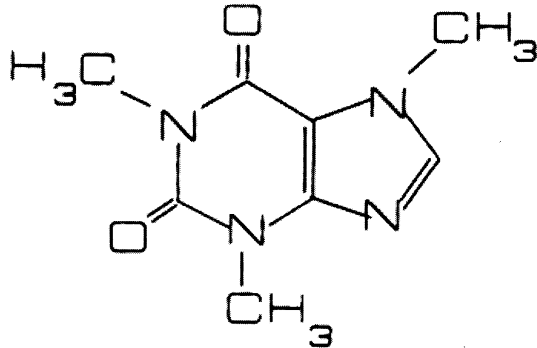


COFFEIN

Die nächste Xantin-Substanz in den Blättern von *Camellia Sinesis* ist das Coffein. Coffein ist eine weiße, kristalline Substanz die schlecht im Wasser löslich ist, besitzt allerdings eine gute Lipidlöslichkeit und dadurch wird Coffein durch den Verdauungstrakt gut resorbiert. Coffein wirkt auf den ZNS stimulatив. Mit der Einnahme treten auch diuretische und kardiovaskuläre Effekte auf. In niedrigen Dosen kommt es zu Cerebrokortikale Stimulation die eine deutliche Beeinflussung der Grundstimmung sowie des Antriebs zu Grunde hat. Die Reaktionsfähigkeit wird deutlich verkürzt, die Lernfähigkeit wird erhöht und erleichtert. Es kann unter Coffein zur stimmungslage Anhebung bis hin zu Euphorie kommen. In hohen Dosen wird die Medulla Oblongata stimuliert wobei bei toxischen Dosen das Rückenmark.

Einnahmen von Kaffee und Tee - die Coffein enthalten, wird Patienten mit Epilepsie oder frischen Herzinfarkt wegen der Kortikaler und kardiovaskulären Wirkung nicht empfohlen.

Coffein



ÄTHERISCHE ÖLE

Die letzte Substanzgruppe stellen die ätherischen Öle dar, die vornehmlich aus lipophilen Mono- und Sesquiterpenen bestehen und bei oraler Gabe leicht resorbierbar sind. In allgemeinen verursachen sie eine steigende Harnproduktion. Bei vielen kann man auch eine antibiotische sowie relaxierende und expectorale Wirkung nachweisen. Bei einer Überdosierung können Ätherische Öle eine Anurie bis hin zu Hämaturie verursachen.

NITROSAMINE

Durch die Nahrung werden jeden Tag Nitrite in den Körper aufgenommen. Aus den Nitriten, unter dem Einfluß von Sekundär Aminen, werden dann im Magen Nitrosamine entstehen. Nitrosamine sind vielfach für die Entstehung von Tumoren verantwortlich.

KREISLAUF UND DER TEE

In der neuesten Zeit werden Phenole, die auch unter dem Namen Catechine bekannt

sind, in Tierversuchen auf eine Blutdruck senkende Wirkung, sowie bei Menschen auf eine Coronare Antiatheroma Wirkung untersucht. Es ist seit Generationen in Asien die Sitte nach der Mahlzeit und während des Essens Grün-Tee zu trinken. Eine offene Studie zeigte, daß Grün-Tee konsumation senkt beträchtlich die Cholesterin und Triglyceride Werte im Blut und damit gegen eine Plaques Bildung in den Arterien einwirkt. Die besten regulativen Resultate wurden erzielt wenn man mit dem Essen oder unmittelbar nach dem Essen den Tee trinkt. Es ist durchaus möglich, daß die Forschung, die auf der Suche nach natürlichen, aus der Natur gewonnene Heilmitteln ist, uns in der Zukunft neue und erweiterte Indikationen von Tee-Wirkung - auch gegen Arteriosklerose - zeigen wird.

SCHLUßWORT

Der Tee, der etwa seit 4000 Jahren in China beheimatet ist, und ganz Asien; und nach und nach alle Kontinente erobert hat, ist bei weitem nicht in seiner Psychosomatischen Wirkung gänzlich erforscht. Sein wohltuender Einfluß wurde allerdings auch ohne Wissenschaftliche Analyse hoch geschätzt und seit lange anerkannt. In der Historie des Menschen fand er einen festen Platz.

Um ihn wurde gestritten, ja sogar gekämpft und nicht zuletzt viel Geld und Risikobereitschaft geopfert. Seit 1637 wurde der Tee regelmäßig aus China und Japan nach Europa transportiert. Trotz allen politischen und wirtschaftlichen Schwierigkeiten hatte er an seiner Popularität mehr und mehr gewonnen. Die ganze Welt scheint in der Tee verliebt zu sein. Heutzutage wird er angebaut und geerntet außer in seinem Traditionsgebieten China und Japan, in Indien und Ceylon, in Indonesien und in Afrika. Nach wie vor ist das Tee- Handelszentrum England, denn die Firmen die vor Jahrhunderten den Teehandel begonnen haben, haben nach wie vor die besten Kontakte zu den Produzenten. Tee ist allerdings kein Luxuartikel mehr. Er ist zum Genuß- und Nahrungsmittel, mit all seinen guten Einflüssen sowohl auf die Seele wie auf den Körper, geworden.

LITERATUR:

1. Bramah, Edward, Tee & Caffee. London 1972
2. Endres P, Ferlitz R. Bronchitis Syndrom. 1980, Ricker G. Therapie Innere Krankheiten, Springer.
3. Ebbige-Wubben, J.C. Thema Tee, Katalog Museum Boymans-van Beuningen. Rotterdam 1978.
4. Fortune R. A Journey to the Tea Countries of China, London 1852
5. Macintyre D. Abenteuer der Segelschiffahrt 1500, Wien 1971
6. Neuhof J. Die Gesandtschaft der Ost-Indischen Gesellschaft, Amsterdam 1669
7. Polo M. Von Venedig nach China, Tübingen 1972
8. Sarkar G. The World Tea Economy, London/Delhi 1972

THEOPHYLLIN / THEOBROMIN

1. Palm D. Meier-Sydow, Erkrankungen der Atmungsorgane Gustav Fischer, Stuttgart 1979, 100 - 165.
2. Renovanz HD., Rench H. Broncholytika, eine Übersicht, Medizinische Monat. Pharma. 3
3. Nolte D. Stand der oralen Theophyllin-Therapie, Therapiewoche 31.

GERBSTOFFEN

1. Brieskorn Ch. Allgemeines über Bitterstoffe. 1966, Planta Med. 14.
2. Schmid W. Zur Pharmakologie der Bittermittel. 1966, Planta Med. 14

XANTHINE

1. Böhme H. Die Flavonoide, Editio Cantor 1967, Aulendorf/Würt.

2.Meng K. Diuretika, 1974, Thieme Stuttgart

TANNINE - CATECHINE

- 1.Kada T. Detection and Chemical Identification of Natural Bio-Antimutagens. Mutation Research 1985.
- 2.Onisi M. Epidemiological Evidence about Caries Preventive Effect of Drinking Tea. Jurnal of Preventive Dentistry 1980, 6.
- 3.Friedman M. Fluoride Concentrations in Tea. Clinical Preventive Dentistry in 1984, 6.
- 4.John T.J. Virus Inhibition by Tea, Coffeine and Tannic Acid, Indian Medic. Research 1979.

LEBERTHERAPEUTIKA

- 1.Hagen J. Aktuelle Fragen zur Hepatologie, Therapiewoche 1981, 31.
- 2.Koch H. Leberschutz-Therapeutika. Pharma unserer Zeit 1980, 9.
- 3.Floersheim GL. Die Klinische Knollenblätterpilz-Vergiftung 1982, Schweizerische Med. Wochenschrift 112.

SKLEROSIS

- 1.Young W. Tea and Atherosclerosis 1969, Nature 216
- 2.Curbm J.D. Coffe, Coffeine and Cholesterol in Japan. Men in Hawaii American Jurnal of Epidemiology 1986, 123.

TERMINOLOGY

- 1.Pschyrembel W. Klinisches Wörterbuch, W. de Gruyter, Berlin 1977
- 2.Kuschinsky G. Taschenbuch der Mod. Arzneibehandlung Thieme, Stuttgart 1973.

Die Leiden und der Gesundheitszustand Goethes.
Eine kurze Abfassung über die Leiden und deren Gründe
von Johann Wolfgang von Goethe.

Marcell Wenzel Chalupa
und
Hideshige Omura

RÉSUMÉ

Bei kaum einem anderen Menschen wurde das Wissenschaftliche und vor allem das künstlerische Leben durch eigene, durchlebte Krankheiten und Gebrechen nachhaltiger beeinflusst als bei dem Universalgenius Johann Wolfgang von Goethe.

Seine Kinderkrankheiten und später vor allem seine chronischen Erkrankungen betrachtete er stets als eine immerwährende Warnung und Maßregelung seines Lebensstiels. Goethe selbst hatte sich eingehend mit der Medizin und Heilkunde beschäftigt. Aus Goethes Beschreibungen der Krankheitsbilder, die er durchlebte, konnte die moderne Medizin nach heutigen Kenntnissen und Maßstäben, eine annähernd genaue Diagnose seines Leidens erstellen. Die Erklärung der Krankheiten, die Goethe erlitten hatte, deren Entstehung, Verlauf und Genese sind weitere Merkmale dieser Arbeit.

GOETHE UND DIE MEDIZIN.

Was verstehen wir eigentlich unter dem Wort "Gesundheit?"

Die Weltgesundheitsorganisation (WHO) definiert sie als

ZITAT: "Zustand in dem der Mensch eine gute psychische, physische und soziale Balance innehat".

Betrachten wir nun Goethes Leben, sein Wirken und vor allem seine Gesundheit, dann erscheint vor unseren Augen eine vielschichtige Persönlichkeit.

Einerseits attestiert ihm sein Arzt eine körperliche und geistige Ausgewogenheit die Seinesgleichen suchen kann. Andererseits bemängelt selbst der Dichter der Zustand seines Befindens mit den Worten:

ZITAT: "Es gibt Tugenden, die man, wie die Gesundheit, nicht eher schätzt, als man sie vermißt".

Goethe selbst betrachtet die Gesundheit als eine, ehe dynamische Sache. Ein Prozeß der Ihm ermögliche alle negative Einflüsse zu überwinden. Seine Arbeit, Kreativität und seine geistige Beweglichkeit sind das Ziel in diesem Prozeß der nach Ausgewogenheit und Vollkommenheit strebt.

Das Kraftstrotzende, Vitale und Natürliche empfindet Goethe als Inniggesunde. So schreibt er selbst:

ZITAT: "Ich kann aus meinem eigenen Leben ein Faktum erzählen, wo ich bei einem Faulfieber der Ansteckung unvermeidlich ausgesetzt war, und wo ich bloß durch einen entschiedenen Willen die Krankheit von mir abwehrte. Es ist unglaublich, was in solchen Fällen der moralische Wille vermag".

Romantische und Psychischbewegte empfindet er dagegen als krankhafte und

ansteckende. Aus dieser Anstellung resultierend fällt ihm schwer persönlich Kranke zu trösten und in die, so zu sagen, kranke Augen zu schauen.

Diese Anfälligkeit und Ansteckungsangst wird von Ihm angesprochen:

ZITAT: "Die Furcht dagegen ist ein Zustand träger Schwäche und Empfänglichkeit, wo es jedem Feinde leicht wird, von uns Besitz zu nehmen".

Lebensbedrohliche Krankheiten und Seelischen Krisen haben Ihn mehrmals an den Grabesrand gebracht. Trotzdem konnte Goethe durch, wie er es nannte, durch Läuterung und Entsagung, geistig gereift, genesen.

Seine erste Todeskrise erleidet er bei seiner Geburt. (1) Zyanotisch, Halberstickt kommt er auf die Welt, da ein möglicher Geburtshelfer Kunstfehler diese erste Lebenskrise hervorgerufen hatte.

Weitere "Kinderkrankheiten" folgten ohne Ausnahme. Sogar eine (2) Pockenkrankheit schwächt den Körper des späteren Dichters.

Seine Studienjahre sind wohl erfüllt mit turbulentem Lebenswandel. Eine narzißtische Liebe zu Käthchen Schönkopf sowie der Genuß von Alkohol und Kaffee, verbunden mit Leichtlebigkeit und (3) Hypochondrischen Verstimmungen, verursachten eine zweite lebensbedrohliche Krise. Als neunzehnjähriger Student erleidet er einen "Blutsturz" über den man in der Fachwelt noch heute nachdenkt.

Ob es nun eine Lungenblutung oder eine Magenblutung war, bleibt eine offene Frage. Wie auch immer, namhafte Mediziner, die sich mit der (4) Symptomatik der Erkrankung beschäftigen, lehnen eine (5) Luetische Erkrankung, zu Gunsten eines Magengeschwürs, ab.

Aber auch diese Krise überwindet er im Hause seiner Eltern nur um seine verfehlte Lebensweise zu erkennen und seine langwierige Krankheit als eine "Zuchtmeisterin die ihn wieder zur Harmonie und gesunder Lebensweise gebracht hatte, anzuerkennen.

Aus dieser Zeit datiert sich ein Brief den er im August 1769 an Gottlob Breitkopf geschrieben habe:

ZITAT: "Mann mag auch noch so gesund und starck seyn, in dem verfluchten Leipzig, brennt man weg so geschwind wie ein schlechte Pechfackel. Nun, nun, das arme Füchlein, wird nach und nach sich erholen. Nur eins will ich dir sagen, hüte dich ia für der Lüderlichkeit. Man kann wohl sowas wieder quacksalben, aber es wills ihm all nicht thun.

Dieser Zeitabschnitt des körperlichen Leidens wendet seinen Blick nach innen. Goethe öffnet sich für die religiöse Welt und die mystischen Werke. Die Einflüsse der Werke Wellings, Valentinus und Paracelsus legen den geistigen Grundstein zum "Faust".

Der Anfang des 19. Jahrhundert beginnt für Goethe unglücklich. Eine Lebensbedrohliche Infektionskrankheit beraubt Ihm seine Kräfte. Auch diese Erkrankung läßt für Spekulationen viel Raum. Stichhaltig werden wir es wohl nicht erfahren um welche Krankheit, die eine Schwellung des Halses und der Lymphknoten, eine beachtliche Rötung des Gesichtes und heraustreten des Auges aus der Augenhöhle mit Blut und Eiter Austritt, es sich hier gehandelt hatte.

Ärzte nähern sich der Ansicht, daß es sich um (6) Erysipels gehandelt hatte. Möglicherweise war es seine chronische (7) Tonsillitis, die Ihm seit Jahren geplagt hatte, oder ein (8) Zahnabszeß der diese Erkrankung hervorgerufen hatte. Scharlotte von Stein sagte dazu folgendes:

ZITAT: "Es ist ein Krampfhusten und zugleich die Blatterrose. Er kann in kein Bett und muß immer in einer stehender Stellung erhalten werden sonst muß er ersticken. Der Hals ist geschwollen und dick und voller Blasen innwending. Sein linkes Auge ist ihm wie eine grosse Nuß heräusgetreten und läuft Blut und Materie heraus."

Nach dem Ausheilen dieser Plage und nach langer Zeit der Rekonvaleszenz

beginnt für Goethe eine Lebensspanne der chronischen Krankheiten. Vor allem, seinen Lebensstil und seine Liebe zu Fleischgerichten und Wein lassen eine manifeste (9) Hyperurikämie mit Nierensteinen und (10) Arthritis vermuten. Ein chronisches Leiden die sich als (11) Gicht und (12) Rheuma manifestieren, vergällen ihm seine Tage. Die Dramatik seines Zustandes wird noch gesteigert durch den Tod seines innigsten Freundes Schiller.

Mißmutige und (13) Depressive Zustände wechseln mit akuten Rheumatischen Schmerzen und Nieren-Koliken. Gerade seine Nierensteine bringen ihn auf die Bäder und Trinkkuren zu denen er ganz fest steht.

Eine Reise nach (A) Karlsbad, wo Goethe eine Trinkkur durchführen wollte, sollte nur die moderne Therapie, die Trinkkuren und Bewegung bevorzugt, anläuten. Das Rütteln auf den Straßen, die damals teilweise in sehr schlechten Zustand waren, haben seinen Nierenstein in Bewegung und anschließendem Abgang gebracht. So, auf wunderbarer Weise genesend wurde seine Trinkkur als stabilisierende Nachbehandlung empfunden. Seine Nierenleiden haben ihm, neben den Zahnproblemen, sein ganzes Leben begleitet.

Badetherapie und Trinkkuren waren zu Goethes-Zeit die Therapie der Wahl. Beinahe alles wurde durch diese Anwendung behandelt. Eine, ja mystische, Beeinflussung schreibt er der Pflanze (B) Arnika zu. Gerade zu seinen Krankheitsbildern ist die Anwendung von Arnika nicht ausreichend wirksam und eine mystische Glaubensbekenntnis liegt hier sehr nahe. Wie auch immer, subjektive, positive Empfindungen gaben sicherlich Anlaß für Goethe zu dieser Einnahme.

Goethes Zähne sind Problemen seines Lebens. Unschöne, gelbe Zähne, entzündetes Zahnfleisch sind schmerzhaft Plagen des Alltages. Mit zunehmenden Alter hatte er wohl seine Schneidezähne verloren. Das nicht nur funktionsuntüchtige, sondern auch äußerliche Problem versucht Goethe geheimzuhalten. Die Stimmung gibt er in einem Kurzgedicht wieder:

ZITAT: Ich neide nichts, ich laß es gehen,
Und kann mich immer manchem gleich erhalten;
Zahnreihen aber, junge, neidlos anzusehen,
Das ist die größte Prüfung mein, des Alten.

Eine funktionsfähige Zahnprothese, die heut zutage gang und gäbe ist, ist zu seiner Zeit noch unbekannt. Trotzdem läßt er sich eine Porzellanprothese zum Einbinden herstellen um den Zahnverlust zu verdecken.

Und wieder bringt Ihm eine, diesmal schon schicksalhafte, Erkrankung in die Nähe des Todes. Schon in seinen sechzigen melden sich (14) Symptome einer (14) Arteriosklerose die durch ihre (15) Ischämien, Schwindelanfälle und Psychoneurologische Komplikationen die Ernsthaftigkeit dieser modernen Plage ankündigen.

In 1823 erleidet der Dichter wegen einer (16) KHK einen (17) Herzinfarkt. Das Gefühl der Vernichtung, die akute Todesangst sind typisch für die (18) Angina Pectoris die den Akuten Herzinfarkt begleitet. Dazu kommen die Beschwerden des (19) Linken Ventrikels mit den entsprechenden Symptomen der Atemnot und des Hustens. Unseren modernen Medizinischen Kenntnissen vorgreifend, verbringt der Dichter die ersten Tage nach dem Infarkt in einem Lehnstuhl. Er fühlt subjektiv, daß er die Herzbelastung vermindert. Die Ärzteschaft in diesen Tagen hatte nur wenig Mitteln um solche Patienten in Kritischakuten Phasen zu behandeln. Dem heutigen Standardregel, entlastung des Herzens durch inneren, unblutigen Aderlaß der man mit (20) Sublingualen Nitroglyzerin einleiten kann, haben sie ja intuitiv rechnung getragen in dem sie blutigen Aderlaß durchgeführt haben und den Trinkvolumen vermindert haben. Es war eine absolut vernünftige Entscheidung in diesem Falle, obwohl dieses Krankheitsbild, (21) Linksherzversagen, (22) Lungenstauung, Herzinfarkt, damals völlig unbekannt war.

Nach dem Durchstehen dieser fatalen Krankheit wendet sich Goethe wieder dem Leben zu. Als 74-Jähriger verliebt sich und muß wieder verzichten. Ulrike von Levetzow könnte seine Enkelin sein. Eine verzichtreiche Liebe die möglicherweise erneute (23) Pectanginöse Anfälle heraus provoziert.

"Sein Bündel ist geschnürt und er wartet auf Ordre zum Abmarsch". Dieser Ausdruck zeigt, daß Goethe mehrmals in seinem Leben auf sein Ableben vorbereitet und innerlich bereit war. Diese Liebe, die sein Herz gebrochen hatte und gleichzeitig (24) Psychosomatische Probleme hervorgerufen hatte, sollte seine schwärmerischen Träume beenden.

Der Tod seines Sohnes ist für ihn sehr schwer zu ertragen. In sichgekehrt den Kummer in sich geschlossen zeigt sein nochmaliger Blutsturz, möglicherweise (25) Magen-Ulcus, Stress-Ulcus, eine Psychosomatische (26) Diathese.

Und nocheinmal, rafft sich der Dichter zur schöpferischen Tätigkeit. Er überwindet diese Erkrankung und vollendet eine seiner schönsten Dichtungen der "Faust".

Die "Ordre zum Abmarsch" wie es der Dichter selbst formuliert hatte, erhält er am 22. März 1832 als 83-Jähriger. Die (27) Diagnose, die sich für uns heut zutage in einer unverständlichen Bezeichnung formuliert:

ZITAT: "Stickfluß infolge eines nervös gewordenen Katarrhalfiebers", zeigt uns ohne Zweifel, daß die Ursache des Todes ein erneuter Herzinfarkt war. Das Leiden zeigte sich in der Angst und in der Unruhe. Unverträglichen Brustschmerzen zeugen von Angina Pectoris. Schneller und harter Puls verbunden mit Kältegefühl und Schweißabsonderung zeigt eine Minderdurchblutung und Grund von Versagen des Linken Ventricels. Rasseln und Röcheln in der Brust zeigt von Minderdurchblutung der Lunge.

Dr. med. Vogel, sein Hausarzt, bescheinigt Goethe einen jämmerlichen Anblick.

ZITAT: "Fürchterlichste Angst und Unruhe trieben den, seit langem nur in gemessenster Haltung sich zu bewegen gewohnten, hochbejahrten Greis mit jagender Hast bald ins Bett, wo er durch jeden Augenblick veränderte Lage Linderung zu

erlangen vergeblich suchte, bald auf den neben dem Bett stehenden Lehnstuhl. Die Zähne klapperten ihm vor Frost. Der Schmerz, welcher sich mehr und mehr auf der Brust festsetzte, preßte dem Gefolterten bald Stöhnen, bald lautes Geschrei aus."

Trotzdem glaubt der Hausarzt, das Goethe ist durchaus guter Zuversicht. Das Unvermeidliche und Definitive kam zum Dichter im Kreise seiner Familie am 22. März 1832.

Sitzend in seinem Lehnstuhl in Kreise seiner Familie, seinen Blick gewendet dem Fenster zu, gelten die letzten, überlieferten Worte seiner Schwiegertochter Ottilie zu: "Nun, Frauenzimmerchen, gibt mir dein gutes Pfötchen!"

Das Abschließende und Irdische wurde erfüllt, aber wie betrachtete der Dichter den Tod selbst?

ZITAT: "Denn was ein guter Mensch erreichen kann,
Ist nicht im engen Raum des Lebens zu erreichen.
Drum lebt er auch nach seinem Tode fort
Und ist so wirksam, als er lebte;
Die gute Tat , das schöne Wort,
Es strebt unsterblich, wie er sterblich strebte.
So lebst auch du durch ungemessene Zeit.
Genieße der Unsterblichkeit!"

"ARNICA MONTANA" - ARNIKA als Heilpflanze.

Arnica Montana ist eine in Europa beheimatete Pflanze. Sie entspringt der Familie ASTERACEAE. Die für die lokale Wirkung der Arnika relevanten Inhaltstoffe sind vor allem Sesquiterpenlaktone von Typus des Helenalins. Sie wirken Haut und

Schleimhautreizend. Im Tierexperiment zeigt Halenalin eine antibiotische, Zytotoxische und Tumorwachstum hemmende Eigenschaften.

Eine Antiphlogistische Wirkung wurde bei Rattenarthritis nachgewiesen.

A) Örtlich auf die Haut appliziert, erzeugt Arnika Hyperämie was gerade bei Rheuma-Kreis und Arthritis Erkrankungen positive Einflüsse erzeugt.

Auch als Hilfsmittel bei Neuralgien, Stenokardien, Hypertension und Arteriosklerose denkbar.

B) Stark verdünnt-bei innerlicher Anwendung kommt es zur Durchblutungsförderung des Herzens.

Paßt als tonisierendes Gefäß und Herzwirkung, mittel.

MEDIZINISCH-KLINISCHE TERMINOLOGIE.

1) Cyanotisch = Blaurote Färbung infolge mangelnder O₂-Sättigung des Blutes, und zwar wenn die Menge des reduzierten Hb 5, 0 Gr. in 100 ml. Blut überschreitet.

Lippen und Fingernägel zu erkennen.

Mögliche: Herzinsuffizienz

Lungengaswechsel.

2) Pocken = Infektionskrankheit hervorgerufen durch "Variola Virus".
Plötzlich auftretendes Fieber, Erbrechen, Hals und Mandel Entzündung, Rasch auf der Innenseite der Oberschenkel.

Sterblichkeit beträgt etwa 70%.

- 3) Symptomatik = Krankheitszeichen
- 4) Lues = Syphilis Erkrankung hervorgerufen durch " Treponema Pallidum".
Übertragbar durch Geschlechtsverkehr. Kann tödlich enden.
- 5) Erysipel = Eine, durch "Streptokokkus Bakterie" hervorgerufene infektiöse
Erkrankung der Haut mit Schwellung und Rötung des
Unterhautzellgewebes. Daher Rose, Wundrose.
Lokalisierbar zu 90% im Gesicht. Die Prognose ist zu 5% bei
Erwachsenen tödlich.
- 6) Hypochondrie = Zustand Krankhafter Neigung zur Selbstbeobachtung und
Überbewertung der Krankheit.
- 7) Tonsillitis = Zungengrundmandelentzündung mit Fieber, Schluckbeschwerden
und allgem. Krankheitsgefühl.
- 8) Abszeß = Eiteransammlung durch Krankhafte Vorgänge.
- 9) Hyperurikämie = Vermehrung von Harnsäure im Blut Vulgo = Gicht.
Harnsäure-beim Menschen d. Endergebnis des
Nucleinstoffwechsels.
- 10) Arthritis = Gelenkentzündung

- 11) Gicht = Schmerz. Durch Hyperurikämie hervorgerufene Salzablagerungen, besonders in den Gelenken. (zum Bsp. Großer Zeh)
- 12) Rheumatismus = Fließen der Krankheitsstoffe bzw. der Schmerzen. Erkrankung des Mesenchymalen (Embryonales Bindegewebe) Systems mit einer vielfältigen klinischen Symptomatik.
- 13) Depression = Verstimmungszustand.
- 14) Arteriosklerose = Hart und spröde werden der Arterien durch Ablagerungen d. Hyalins.
- 15) Ischämie = Zurückhalten des Blutes und dadurch mangelnde Blutzufuhr wie zum Bsp. bei Embolie und Thrombose.
- 16) KHK = Koronare Herz Krankheit. Ischämie im Bereich des Herzeigenen Blutversorgungssystems. Dadurch entsteht vitaler Schmerz, auch Pecanginäser Anfall.
- 17) Herzinfarkt = Durch Verschuß der Arterie abgestorbenen, auch nekrotischgewordener Gewebebezirk. Ein gebildete Atherom oder ein Thrombus verstopft ein Koronargefäß. Das Herzgewebe hinter dem Thrombus stirbt ab. Wird nekrotisch. Die Lage und Ausmaß der Nekrose entscheiden über Genesung oder Letalität.
- 18) Angina Pectoris = Engbrüstigkeit. Anfälle von heftigen Schmerzen in der linken Brustseite. Ausstrahlung in d. linken Arm. Kolapserscheinung, Todesangst. Klinisch = Sklerose d. Kranzarterien.

- 19) Linker Ventrikel = Linke Herzkammer. Linksinsuffizienz: Versagen des linken Vorhofes und linken Kammer führt zu Stauungserscheinungen im Lungen-Kreislauf-Fazit: Dyspnoe, Zyanose, Asthma, Stauungsbronchitis.
- 20) Sublingualen Nitroglyzerin = Farblose, ölige, explosible Flüssigkeit. Anwendung bei Angina Pectoris auch prophylaktisch wirkt Gefäßerweiternd. Einnahme auch unter die Zunge möglich (Sublingual).
- 21) Linksherzversagen = Linksherzinsuffizienz, Versagen des linken Vorhofes und Kammer.
- 22) Lungenstaung. = Druckerhöhung im Lungenkreislauf durch versagen des Linken Herzens. Symptomen sind Husten, Asthma und Zyanose.
- 23) Pectanginöse Anfälle = Angina Pectoris.
- 24) Psychosomatik = Seele mit Körper. Ein Zusammenspiel von psychischen und körperlichen Faktoren.
- 25) Ulkus = Geschwür des Magens oder des Zwölffingerdarmes, vulgo: Ulcus Ventriculi/Ulcus Duodeni
- 26) Diathese = Veranlagung zu bestimmten Krankheiten.
- 27) Diagnose = Erkennung der Krankheit.

A) Karlsbad =Ein Kur-und Badeort im Westen der Tschechischen Republik,
"Karlovly Vary"; Kurort besitzt mehr als 11 Quellen mit heißen
Mineralwässern 75°C. Alkalisches, salinisches, muriatisches und
kohlehaltiges Wasser.

(平成 8 年 6 月 7 日 受理)

LITERATURNACHWEISE:

- * Goethe, Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche. E. Beutler, Zürich 1948.
- * C. Vogel, Die letzte Krankheit Goethes, E. Merck, Darmstadt 1961.
- * F. Nietzsche, Gesamtwerk, Leipzig 1906.
- * F. Nager, Der heilkundige Dichter, Artemis, Zürich 1990.
- * Tagebücher, Artemis Ausgabe.
- * Weimarer, Sophien Ausgabe Großherzogin Sophia von Sachsen-Weimar-1887.
- * W. Bode, Goethe in vertraulichen Briefen.
- * C. Diem, Körpererziehung bei Goethe, Frankfurt/M. 1948.
- * Zahnmedizin, Goethe und die Zahnmedizin, 1982.
- * W. Herwig, Goethes Gespräch zu Kanzler v. Müller.
- * Weimarer Goethe-Studien-Schriften der Goethe-Gesellschaft-Weimar 1980.
- * Neue Züricher Zeitung von 1972, August.
- * R. Hänsel, H. Haas, Therapie mit Phytopharmaka, Springer/Berlin 1984.
- * Deutsche Homöopathie-Union-Karlsruhe 1984.
- * Psyehrembel-Klinisches Wörterbuch, W. de Gruyter, Berlin 1977.
- * D. N. Golding, Rheumatische Erkrankungen, Thime-Stuttgart 1967.
- * A. Faller, Der Körper des Menschen, Thime-Stuttgart 1978.
- * G. Kuschinsky, Angewandte Pharmakologie, Thime-Stuttgart 1975.

関係節の定義と述語タイプ

塩谷 亨

Definition of relative clauses and predicate types

Toru Shionoya

Abstract

This paper has two goals. In the first half, this paper will re-define relative clauses of different kinds of languages, with emphasis on Hawaiian. Although relative clauses in other languages have similarity to English, the identification of the relative clause in other languages is not consistent because of variation in syntax. This paper will propose a definition of the relative clause which can be used regardless of the variation in syntax. The revised definition will consist of two parts:

- (1) a relative clause has a structure of one of possible predicate types in that particular language, and
- (2) a noun modified by a relative clause corresponds to an element inside of the relative clause.

The above definition makes it possible to generalize relative clauses in different kinds of languages.

In the second half, this paper will analyze relative clauses in Hawaiian, using the above definition. In doing so, two types of relative clauses(i.e., the verbal relative clause and the prepositional relative clause) will be introduced.

1 序 論

関係節という構造は英語においては明確に定義されていて、何を関係節とみなすかについての基準は一貫している。英語以外のいろいろな言語にも英語の関係節に対応するような構造が存在するが、それぞれの言語の個別的特徴の違いから、何を関係節とみなすか、或いは、そもそもその言語に関係節とみなされる構造が存在するかということについての基準は必ずしも一貫していない。本稿の前半では、関係節の定義の二つの対照的な例を示し、それらを出発点として、英語及び英語以外の様々の言語の関係節を記述し、一般化するためには

どのような定義がより効果的なのかということについて考察する。また、後半では、前半の議論の結果として提案された関係節の定義を用いて、ハワイ語にはどのような関係節があるか、また、それぞれがどのような手法で形成されるかの記述を試みた。

2 関係節の定義

2.1 伝統的英語文法における関係節の定義

一般に、関係節とは名詞を修飾する節の一種を指すが、伝統的な英語文法においては関係節はかなり狭く定義され、名詞を修飾する他の要素と区別される。例えば、Quirk et al.(1985 :1244)は関係節を動詞を後置修飾する定動詞節のうちの一つのタイプとして分類している。従って、名詞の修飾している要素が関係節か否かは、それが定動詞節かどうかによって決まる。定動詞節は時制（現在、過去、未来）・法（直接法、命令法）の文法的区別を持つ動詞を含むものであり、不定動詞節、すなわち時制・法の文法的区別を持たない動詞を含む節と区別される。例えば、

(1) The news that appeared in the papers this morning was well received.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(1)の下線部は名詞<news>を後置修飾しており、かつ、時制（過去）という文法的区別を持つ定動詞<appeared>を含む定動詞節である、従って関係節の例である。それに対して、

(2) The person writing reports is my colleague.

[Quirk et al. 1985 :1263]

(2)の下線部はいわゆる分詞による名詞修飾の例であるが、(1)の下線部と同じく名詞を後置修飾しているにも関わらず、時制・法の文法的区別を持たない動詞<writing>を含む不定動詞節であるため関係節とはみなされない。また、定動詞節は常に主語を持つということによっても不定動詞節から区別される。従って、(2)の斜線部は主語に相当するものを持たないという理由からも関係節から除外される。(定動詞は常に主語を持つということを含めてその他の定動詞節の特徴については[Quirk et al. 1972 :722]を参照。)

名詞を修飾する定動詞節には関係節の他にもう一種類ある、それは同格節である。例えば、

The news that the team had won calls for a celebration.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(3)の下線部は名詞<news>を修飾しており、かつ時制の文法的区別を持つ動詞<had won>を含む定動詞節であるが、これは関係節ではなく同格節である。関係節も同格節も同様に名詞を後置修飾するものであるが、両者は次のように識別できる。先行する名詞（つまり、後続する修飾節によって修飾される名詞）に相当するものが後続の修飾節においてなんらかの文法関係（主語、目的語、又は場所等の斜格相当語）を担っている場合は、その後続する修飾節は関係節である、例えば、

(4)=(1) The news that appeared in the papers this morning was well received.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(4)の下線部は名詞を修飾する関係節であるが、先行する名詞<news>（つまり関係節によって修飾される名詞）は関係節における主語に相当する。一方、同格節は、先行する名詞との間にこのような文法関係の対応はない。同格節は単に先行する名詞の内容を表すものである、例えば、

(5)=(3) The news that the team had won calls for a celebration.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(5)の下線部は同格節であるが、先行する名詞<news>は同格節における何の文法関係にも相当しない。同格節は単に名詞<news>の内容を示しているだけである。

ここで、英語における関係節の定義をまとめると、

(6) 関係節は名詞を修飾する定動詞節、すなわち、時制・法の文法的区別を持ち、常に主語を伴う節であり、先行する名詞（つまり、後続する関係節によって修飾される名詞）は後続の関係節内のなんらかの要素に対応する。

英語以外の色々な言語に対応しようとするとこの英語における関係節の定義はかなり狭いものであることがわかる。Comrie(1981 :136)が指摘するようにこ

の定義には英語独特の個別的特徴が含まれている。例えば、上記(6)の定義に含まれている時制・法の文法的区別は英語では必須な要素であるが、ハワイ語等のように時制・法の文法的区別が必須ではない言語も多くある。例えば、

(7) Ua hele ke kanaka.

ASP go the man

"He has gone."

[Elbert and Pukui 1979 :59]

(7)では<ua>によって文法的に表されているのは相（完了相）だけでありそれだけでは現在、過去、未来のいずれの時制にも使われ得る。従って、時制は文脈により意味的にのみ示されている。このように独立節でさえ時制・法を文法的に表さなくてもよい言語では、関係節の定義に時制・法の文法的区分という条件をいれるのは疑問である。また、主語に関しても同様で、ポリネシア諸語や日本語などのように、必ずしも文が主語を含んでなくてもよい言語が多数ある。

しかしながら、このような関係節の狭い定義は英語のように色々なタイプの要素が名詞を修飾し得る言語では効果的であると思われる。実際にこの定義によって、関係節が他の名詞修飾要素である分詞（上記例文2参照）或いは、同格節（上記例文3参照）から明確に区別され得ることは既に述べた通りである。

2.2 Keenan and Comrieによる関係節の定義

Keenan and Comrie(1977 :63)は英語以外のいろいろな言語を含め関係節の一般化を可能にするために、個別言語ごとに差異を示すような統語論的な要素を一切排除して純粋に意味論的な関係節の定義を次のように提案した。

(8) まず対象がより大きな集合として特定され、それからある文（つまり、限定節）が真であるようなより小さい集合に限定される場合、そのような統語的構造が関係節である。

例えば、上で示した例文1にこの定義をあてはめると、

(9)=(1) The news that appeared in the papers this morning was well received.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(9)ではまず<news>がより大きな集合「ニュース」を特定し、それから下線部が真であるようなより小さい集合「今朝新聞に出たニュース」に限定されてい

る。従って、この構造は関係節とみなされる。

しかしながら、この定義は非常に広いもので、実はこの定義の意味するのは名詞を修飾する構造は全て、それがどんな構造であれ、関係節とみなされるということである。Comrie(1981 :136-7)が指摘しているように、名詞を修飾する定動詞節はもちろん、2.1節で示した伝統的英語文法の定義では関係節とみなされなかった分詞も、さらには限定用法の形容詞まで関係節の中に含まれる。

(10)=(2) The person writing reports is my colleague.

[Quirk et al. 1985 :1263]

例文10では、まず<person>が大きな集合「人」を特定しそれから下線部が真であるようなより小さい集合「レポートを書いている人」に限定している。

従って、これは関係節とみなされる。また、

(11) The good student all passed the examination. [Comrie 1981: 137]

例文11の下線部<good>は限定用法の形容詞であるが、ここでも、まず、<student>が「学生」という大きな集合を特定し、次に<good>が真であるようなより小さな集合「よい学生」に限定されるので、関係節の例とみなされる。また、Comrieは指摘していないが、この定義に依れば名詞を修飾している前置詞句も関係節とみなされることになる。例えば、

(12) This book on grammar

[Quirk et al. 1972: 883]

例文12の下線部は名詞を修飾する前置詞句であるが、まず、名詞<book>「本」という大きな集合を特定し、次に、下線部が真であるようなより小さな集合「文法に関する本」に限定している。従って、関係節の定義に当てはまる。

この定義が多くの言語にその統語的特徴の違いに関わらず適用できるのは事実である。しかし、このように、関係節の中に分詞、形容詞、前置詞句等全ての名詞修飾要素を含めてしまうような定義に依る以外にいろいろなタイプの言語の関係節を捉える方法はないだろうか。狭い意味での関係節だけで独立した項目としていろいろな言語に適用できるような定義はないのだろうか。

2.3 関係節の再定義

前の二つの節で述べたように、伝統的英語文法における関係節の定義も、Keenan and Comrieによる定義も、いろいろな言語の関係節を記述するには不十分なものであった。この節では、それらに代わる関係節の定義を試みる。

伝統的英語文法における関係節の定義では、関係節は定動詞節に限られていて、その定動詞節の条件というのは時制・法の文法的区別を含むということであった。その条件が、ポリネシア諸語等のように時制・法の文法的区別が必須ではない言語においては問題となるものである。そこでMosel and Hovdhaugen(1992: 632)はポリネシア語の一つであるサモア語の記述において、伝統的英語文法の関係節の定義を一部修正して、時制・法の文法的区別は持っていないなくても、相<aspect>の文法的区別を持っている動詞節であれば関係節とみなすような定義をしている。この修正された定義はサモア語の記述に関してはうまく働いたようである。このように、相の文法的区別を持つ動詞節を含めると、英語で名詞を修飾する分詞も関係節に含まれてしまうことになる。なぜなら、<being>や<having>を使うことによって分詞も相を文法的に表せるからである。

Mosel and Hovdhaugen (1992: 632)の定義も、ハワイ語に適用しようとする、問題が生じる。サモア語の文では原則的に、時制・相の文法的な区別は、命令文を除くと、必須であるが、ハワイ語では、時制や相の文法的区別を示さないような文が頻繁に見られる。例えば、

- (13) Makemake 'oia i ka u'i.
 like he ACC the beauty
 "He likes beauty."

例文13の動詞<makemake>には時制・法、或いは、相の文法的区別は表されていない。このように、時制・法、或いは、相の文法的区別は独立した文でさえ必須ではないので、それを関係節の必須条件として含めるのは問題がある。また、ここでもう一つ考えたい問題がある。そもそも、関係節は必ず動詞を含んでいなければいけないのであろうか。英語では全ての文は動詞を含んでいるので問題はない。しかし、ポリネシア語のように英語の<be>動詞に相当するもの

が存在しない言語では、全く動詞を含まない独立した文が存在する。

ここで、そもそも、伝統的英語文法の関係節の定義の中に「定動詞」という条件が入っている理由は何であるのか考えてみたい。Quirk et al. (1972 : 722)によれば英語では定動詞節はかならず主語と述語を含むとされている。実際、英語において述語を形成できるのは定動詞節のみである、不定動詞節、或いは、動詞節以外のものは述語を成さない。つまり、伝統的英語文法において「定動詞節」という条件によって定義しようとしたものは、述語だということが分かる。英語の場合には、たまたま、述語=定動詞であるが、他の多くの言語ではそれが成り立たない。ここに、関係節の定義を英語以外の言語に適用する上で生じる諸問題の原因があるようである。それでは、この述語という概念を用いてより効果的な関係節の定義ができないだろうか。ここで伝統的英語文法の関係節の定義の中の定動詞節という条件の代わりに述語という条件を入れて次のような定義を提案する。

(14)関係節は次の二つの条件を満たすものとする。

- (i)その言語において可能な述語に相当する構造を持つこと、
- (ii)関係節は名詞を修飾し、その被修飾名詞が関係節内におけるなんらかの要素に相当すること。

この定義を英語に適用した場合は、英語では述語=定動詞なので、伝統的英語文法での関係節の定義と同じ結果となる。この定義には二つの利点がある。「定動詞節」等の個別言語的特徴を含んでいない点で、英語以外の言語に適用する際には、伝統的英語文法の定義よりも効果的である。また、定義の第一項で、述語相当の構造と限定してあるので、英語の分詞、形容詞、前置詞句などから関係節を区別できる。

この定義はある言語でどのような述語のタイプが可能であるかに依存しているので、この定義を適用する際には、それぞれの言語で可能な述語タイプにはどのようなものがあるかということを調べるが必要で、それに基づいて関係節の認定をすることになる。

3 ハワイ語の関係節

3.1 ハワイ語の述語タイプ

前章で提示した関係節の定義をハワイ語に適用するに際して、まず、ハワイ語にどのような述語タイプがあるかを識別しなければならない。ポリネシア諸語においては述語を形成するのは動詞だけではない。動詞述語以外のいろいろなタイプの述語があるということはLazard and Peltzer (1991)がタヒチ語について述べている。Shionoya (1993)がハワイ語も同様に動詞以外のものが述語を導くという分析をしている。ハワイ語の述語タイプは大きく分けて、動詞述語と前置詞述語の二つに分けられる。動詞述語は動詞によって導かれる述語で、動詞の前にはたいてい時制・相マーカ―が置かれるが、必須ではない。例えば、

(15)=(7) Ua hele ke kanaka

ASP go the man

"He has gone."

[Elbert and Pukui 1979 :59]

下線部は動詞に導かれる動詞述語の例である。ここでは動詞は相マーカ―<ua>に導かれている。また、

(16) Makemake 'oia i ka u'i.

like he ACC the beauty

"He likes beauty."

例文16下線部も動詞に導かれる動詞述語の例であるがここでは(15)と違い時制・相マーカ―には導かれていない。

前置詞述語は前置詞によって形成される述語である。前置詞句は、前置詞とそれに続く前置詞の目的語である名詞の二つから成り、動詞或いはなんらかの動詞的要素を全く抜きで前置詞句だけで述語を形成する。例えば、

(17) No laila lākou?

from there they?

"Are they from there."

[Pukui and Elbert 1986: 268]

下線部は前置詞<no>と名詞<laila>から成る前置詞述語の例である。この例文は動詞を一切含んでいない。ただ、全ての前置詞が前置詞述語を導けるのではなく、属格の<a,o>行為者格の<e>、呼格<e>等、前置詞述語を導くことがでない前置詞がある。

かくしてハワイ語では動詞述語または前置詞述語を含む関係節が可能であるということになる。

3.2 ハワイ語における関係節の種類

前の節で提示した関係節の定義の第2項が述べているように、被修飾名詞は関係節における何らかの要素に対応する。Comrie(1981: 140) は被修飾名詞が関係節内のどの要素に相当するかが、どのように関係節内で示されているかによって関係節を分類することを提案しているが、ハワイ語の関係節には次の3つの種類がある。

(18)被修飾名詞が関係節のどの要素に対応するかを示すものがないもの。

以下これをコムリー (1994 :85) にならって空所型関係節と呼ぶことにする。

(19)被修飾名詞に対応する代名詞が関係節にあるもの。

以下これをコムリー (1994 :84) にならって代名詞残留型と呼ぶ

(20)被修飾名詞に照応する前方照応指標<ai>が関係節内の動詞の後に置かれるもの。

これは、コムリー (1994 :84) の言う代名詞残留型の変種であろうと思われるが、ハワイ語では、上記の(19)としてあげたようなより典型的な代名詞残留型関係節が別に存在するので、それと区別するために、以下これを前方照応型関係節と呼ぶことにする。次の節では、これら三つの用語を用いてハワイ語の関係節の記述をする。

3.3 ハワイ語の関係節の例

3.3.1 動詞述語

3.3.1.1 被修飾語が主語に対応する場合

ハワイ語において許される述語タイプの一つは動詞述語であり、その動詞述語から成る関係節が可能である。被修飾名詞が関係節内の主語に対応する場合、空所型関係節が用いられる。

(21)	ka	holoholona	e	<u>pakele</u>	iā	ia
	the	animal		ASP escape	OBL	he

"the animal who escapes from him" HW71

例文21のような一般的な動詞の他にも、存在動詞<aia>「～がある」、や動詞イディオム<'akahi>「初めて～する」、否定動詞<'a'ole>も同様に動詞述語として関係節を形成できる。

(22) he 'āina aia i ka lewa

NC-a land there is OBL the sky

"a land which is located at the sky" L555

(23) ...he pūiwa ka mea 'akahi a 'ike

ASP surprised the person for the first time see

i kēlā mea hou.

OBL that thing new

"...the person who saw that new thing for the first time was surprised."

NK 12/23/1893:4

(24) ...a 'o nā 'āina nō ho'i ia i koe

and NC the-PL land INT it ASP remain

'a'ole i lawe 'ia e Keawenuiaumi

not ASP take PAS by Keawenuiaumi

"...and they are the remaining lands that were not taken by Keawenuiaumi." Pk33

例文22-24ではそれぞれ下線部が空所型関係節であり、いずれの場合にも被修飾語は関係節内の主語に対応するものである。

3.3.1.2 被修飾語が主語以外に対応する場合

被修飾名詞が関係節を成す動詞述語の主語以外の項である場合は、前方照応型関係節が用いられる。その際に関係節内の主語は所有形としてしばしば表され関係節の前に置かれる。具体的には前方照応型関係節が用いられるのは被修飾語が次の例文25のように関係節内の目的語に対応する場合、

(25) ka wai e inu ai

the water ASP drink AP

"the water to drink"

FH 157

或いは、関係節の述べている出来事の起こる場所（例文26）や時間（例文27）、または、どのようにその出来事が起こるかという様態（例文28）に相当するする場合にも用いられる。

(26) kahi a ia 'īlio e noho ai
 place of AD animal ASP live AP
 "the place where that animal lives" HW65

(27) ka wā e mā'ona ai
 the time ASP satisfied AP
 "the time when(they)are satisfied" FH 106

(28) ka wa'a e holo ai kekahi po'e Inikini
 the canoe ASP sail AP some people Indian
 "the canoe by which some Indians sail" Hw 33

ただし、動詞の後ろに未完了を表す<ana>が置かれている場合は前方照応の<ai>は用いられない。

(29) kahi e kaheikaika ana ka wai
 place ASP flow strong DEM the water
 "the place where the water is flowing strongly" HW 47

3.3.1.3 被修飾名詞が主語の所有者に対応する場合

被修飾名詞が主語の所有者に対応する場合は、代名詞残留型関係節が用いられる。すなわち、被修飾名詞に対応する所有格代名詞が関係節内の主語に付される。

(30) ka mea i 'oi aku kona nui ma
 the thing ASP superior DIR its size OBL
 mua o ka rhinoceros
 front of the rhinoceros
 "the thing whose size is bigger than the rhinoceros" HW 9

下線部関係節の主語は<kona nui>であるが、その中の所有格代名詞<kona >が被修飾名詞<mea>に対応している。しかしながら、同じような場合に所有格代名

詞の代わりに定冠詞<ka>が用いられることがある、

- (31) nā holohona i ono ka 'io
 the-PL animal ASP delicious the meat

"the animals whose meat is delicious"

HW 49

例文30では被修飾語が関係節内のどの要素に対応するかは代名詞によって示されていたが、例文31ではそれを示すものが欠如している。従って、この例文31の下線部を空所型関係節とみなすことも可能であろうが、ハワイ語では文脈から明らかな場合は所有格代名詞を定冠詞で置き換えることは関係節内に限らずよくあることなのでここでは代名詞残留型関係節の例外とみなすことにする。

3.3.2 前置詞述語

ハワイ語で許されるもう一つの述語タイプは前置詞句であり、前置詞述語から成る関係節も可能である。被修飾語が関係節を形成している前置詞述語を導いている前置詞の目的語に対応する場合は、代名詞残留型関係節が用いられる。このような関係節の例としてもっとも一般的なのは、前置詞<no,na>「～のための」と3人称代名詞との融合形である<nona,nāna>に導かれる前置詞述語が関係節を成す場合である。

- (32) ua manu nei nāna ka punana

Ad bird this for-it the nest

"this(aformentioned)bird whom the nest belongs to"

L 503

- (33) ke ali 'i nona ke aupuni 'o

the chief 'for-him the nation NC

Hawai 'i

Hawai 'i

"the chief whom the nation of Hawai'i belongs to"

SF 157

しかしながら、希に他の前置詞が導く関係節も見られる。

- (34) ka mea iā ia ke kī o

the thing OBL he/she the key of

ka 'āina...

the land

"the person whom the key of the land is for..." NK 4/1/1894:3

例文34では被修飾名詞<mea>が関係節内の斜格前置詞<ia>の目的語に対応し、それが代名詞<ia>で示されている。

また、被修飾語が前置詞述語から成る関係節内の主語の所有者に対応する場合も、代名詞残留型関係節が用いられる。このような関係節が用いられるのは前置詞<o>に導かれる前置詞述語が関係節を成す場合である。

(35) ...ua hele mai la kekahi keiki 'o
ASP come DIR DEM some child NC

Kekalukaluokewa kona inoa...

K. his name

"...some boy whose name is Kekaukaloukewa came..."

HH 10/15/1908:3

この前置詞<o>は多くのポリネシア諸語に見られる特別な前置詞で、前置詞でありながらはっきりした格を持たないものである。本稿では、ハワイ語の<o>についての詳しい議論はできないが、この<o>の前置詞としての詳しい分析については、Shionoya (1990) のサモア語の<o>についての分析を参照されたい。例文35では関係節内の主語に所有格代名詞<kona>が付されている。3.3.1.3節で示した動詞述語の主語の所有者についての例で、しばしば、所有格代名詞の代わりに定冠詞<ka>が用いられることを述べたが、前置詞述語の場合も同様に、所有格代名詞の代わりに定冠詞<ka>が使われ得る。

(36) k̄ana ā'au palau 'o Wahiekaeka ka inoa
his war club NC W. the name

"his war club whose name is Wahiekaeka" SF 61

また、前置詞述語からなる関係節の特殊な例として、前置詞<na>に導かれる行為者強調構文がある。行為者強調構文は他動詞及び行為を表す自動詞の主語を強調するための構文で英語の分裂文<it is ...who ...>に相当する意味を持つ。その意味からすれば動詞文のように思えるが、その構造はむしろ前置詞句述語に相当する。その構造は、

(37)前置詞na+行為者主語+動詞句+その他

のようになる。例えば次のようなものが行為者強調構文の例文である。

(38) Na lākou nō e huki i ka 'ō'ō palau...

for they INT ASP pull ACC the plow

"It is them who pull the plow..."

HW47

そして、この行為者強調構文が関係節を形成する場合は、被修飾名詞は関係節を導く前置詞<na>の目的語に対応し、前置詞<na>と3人称代名詞の融合形<nāna>がそれを示す。従って、これも代名詞在留型関係節の例とみなし得る。

(39) kā lākou lio nāna e kauō i

k-POS they horse ___ ASP pull OBL

nā ka'a

the-PL wagon

"their horse who pull the wagon"

HW 53

3.4 まとめ

どの種類の関係節がどのような場合に使われるかは以下のようにまとめられる。

- (40)被修飾名詞が関係節内の主語に相当する場合、空所型関係節がもちいられる。
- (41)被修飾名詞が関係節内の主語名詞の所有者に相当する場合、動詞述語、前置詞述語の別に関わらず代名詞残留型関係節が用いられる。
- (42)被修飾名詞が関係節内の主語以外の項に相当する場合、動詞述語なら前方照応型、前置詞述語なら代名詞残留型がそれぞれ用いられる。

3.5 問題点

以上の記述に関して、若干考えるべき問題点がある。今回おこなった分析に従うと、ハワイ語において名詞を修飾する前置詞は全て関係節にみなされることになる。例えば、

(43) ke kāne i ke kula

the man OBL the school

"the man in the school"

例文(43)では前置詞句<i ke kula>が名詞<kāne>を修飾しているが、今回の分析に従うと、前置詞句はハワイ語の中で許される述語タイプの一つであり、実際、

(44) I ke kula ke kāne.

OBL the school the man

"The man is in the school."

例文(44)のような文はりっぱな文として使われる得る。そうすると、例文(43)の下線部は述語に相当する構造を持つことになり、関係節の条件を満たす。被修飾名詞は関係節内の主語に対応し、3.1.1で示した諸例と同様に空所型関係節を形成しているという分析ができる。この分析は一見、奇異に見えるが実際はこの分析には利点もある。名詞の後ろに来る前置詞句が全て名詞を修飾するわけではない、例えば、

(45) Aia ka pā'ina 'ohana ma ka hale'aina

there is the party family OBL the restaurant

Pākē.

Chinese

"The party is at the Chinese restaurant."

[Hopkins 1992: 73]

例文(45)では前置詞句<i ka hale'aina Pākē>は名詞の後ろに来ているが名詞を修飾してののではなく、この文で述べられている事項の場所を示しているものである。ここで、名詞を修飾している前置詞句を関係節として分析することによって、文全体にかかる副詞句として使われている前置詞句と区別をつけることができる。

4 結び

今回提案した関係節の定義に依れば、3章で示したように、ハワイ語の二つの述語タイプから形成されるいろいろな種類の関係節の記述、一般化が可能になる。またこの定義に依れば、英語のように関係節と分詞の間の区別がはっきりしている言語については、それらの間の区分を損なうことなく、更に、関係節を独立し

た一つの項目としていろいろな言語の間で対照、一般化することを可能にする。

(平成8年6月7日 受理)

LIST OF ABBREVIATIONS

Grammatical Terms

ACC:accusative case	INT:intensifier
AD:anaphoric demonstrative	NC:neutral case
AP:anaphoric particle	OBL:oblique case
ASP:aspect marker	PAS:passive marker
DEM:demonstrative	PL:plural marker
DIR:directional	POS:possessive

Hawaiian Texts(see References for further information)

- FH Folktales of Hawai'i.
HH Ka Hoku o Hawaii.
HW O na Holoholona Wawae Eha.
L The Hawaiian Romance of Laieikawai.
NK Nupepa Kuokoa.
PK Moolelo Hawaii o Pakaa a me Kuapakaa.
SF Selection from Fornander's Hawaiian Antiquities and folk-lore.

References

- Beckwith, Martha W. 1919. The Hawaiian Romance of Laieikawai.
Thirty-Third Annual Report of Bureau of American Ethnology to the
Secretary of the Smithsonian Institution 1911-1912, 285-666. Washington:
Government Printing Office.
- Comrie, Bernard. 1981. Language universals and linguistic
typology. Oxford: Basil Blackwell.

- コムリー、バーナード. 1994. 講演〈言語類型論〉入門 下. 月刊言語
23.10 :82-89.
- Elbret, Samuel H.,ed. 1959. Selection from Fornander's Hawaiian Antiquities
and Folk-lore. Honolulu:Universty of Hawai'i Press.
- Elbert, Samuel H. and Mary K.Pukui. 1979. Hawaiian grammar.
Honolulu: University of Hawaii Press.
- Hopkins, Alberta P. 1992. Ka lei ha'aheo. Honolulu: University of
Hawaii Press.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie. Noun phrase accessibility
and universal grammar. Linguistic inquiry. 8.1:63-100
- Lazard,Gilbert and Louise Peltzer. 1991. Predicates in Tahitian.
Oceanic linguistics. 30.1: 1-31.
- Mo'okini, Esther T. 1985. O na Holoholona Wawae Eha o ka Lama Hawaii.
Honolulu:Bamboo Ridge Press.
- Mosel, Ulrike and Even Hovdhaugen. 1992. Samoan Reference Grammar.
Oslo:Scandinavian University Press.
- Nakuina,Moses K. 1990. Moololo Hawaii o Pakaa a me KuaPakaa.
Honolulu:kalamaku Press.
- Pukui,Mary K. and Laura C. S. Green. 1995. Folktales of Hawai'i. Honolulu:
Bishop Museum Press.
- Pukui, Mary K. and Samuel H. Elbert. 1986. Hawaiian dictionary.
Honolulu: University of Hawaii Press.
- Quirk, Randolph, et al. 1972. A comprehensive grammar of the
English language. London: Longman.
- Quirk, Randolph, et al. 1985. A grammar of contemporary English.
London: Longman.
- Shionoya, Toru. 1990. Non-verbal predicates in Samoan. Nagoya
working papers in linguistics. 6:229-241.

Shionoya, Toru. 1993. Hawaiian predicates. Nagoya working papers
in linguistics. 9:83-94.

Hawaiian Newspapers

Ka Hoku o Hawaii. Hilo, 1906-1948.

Ka Nupepa Kuokoa. Honolulu, 1861-1927.

文法単位としての文について

松名 隆

On the Sentence as a Grammatical Unit

Takashi Matsuna

Abstract

So far there have proposed so many definitions of the sentence as a grammatical unit. Traditionally, except such grammarians as Jespersen, it was defined mainly in terms of its meaning content, such as complete meaning or complete thought, or its logical content, such as a combination of a logical subject and a logical predicate.

However, these content-based definitions were rejected mainly by structuralists because of the lack of objectiveness. These structuralistic approaches try to define the sentence in terms of its distributional independence or by way of phonological criteria.

In this paper, the author shows that these 'objective' approaches cannot wholly define the sentence as is induced from utterances, and then examines the three conditions of the sentence proposed by Motoki Tokieda. Then, in the final analysis, it is showed that these conditions do not recognize the sentence wholly and structurally in a cognitive sense, and, as a conclusion, the author's tentative cognitive definition of the sentence is proposed: the sentence is one or a set of unified construct(s) synthesized by the speaker's overall recognition of this (these) construct(s).

はじめに

従来の様々理論を背景とした文法研究において、文という術語が用いられ文の構造について多くの分析がなされてきたが、文法を理論として構築しようとするならば、その中核に位置すべき文について当然のことながら理論的な把握がなされていなければならない。しかしこれまでの様々な文法（言語）理論において、この文の把握が充分になされてきたであろうか。文を文法体系の中の一単位として明確に位置づけるためには、文という単位がいかなる意味で単位であるかが明瞭に示されていなければならない。

本稿では、従来のいくつかの文に関する説を検討し、さらに国語学者時枝誠記の文法理論における文論の展開を再検討しつつ筆者の文に関する見解を提出したいと思う。

1. 伝統文法における文の定義とその問題点

伝統文法といってもその文に関する扱いはさまざまであるが、ほぼ共通していることは、文を意味的に定義しようとしていることである。たとえば Sweetは、

(1) A Sentence is a word or group of words capable of expressing a complete thought or meaning.¹⁾

(2) A sentence is a word or combination of words capable of expressing a thought, that is a combination of a logical predicate with a logical subject.²⁾

と規定しているが、最初の定義ではcompleteの意味が構造的に明かにされていないという点で、伝統文法における文の意味的定義のひとつの限界が示されている。この点に関しては、Friesの次の見解が代表的なものであろう。

(3) The more one works with the records of the actual speech of people the more impossible it appears to describe the requirements of English in terms of meaning content.³⁾

また上の2番目の規定については、これもFriesが指摘しているように、⁴⁾ これでは次のふたつの表現、

(4) the dog is barking

(5) the barking dog

これらの一方が文で他方が文ではないとする根拠が明かではないという問題点がある。

さらにまた、主部あるいは述部を欠いている次のような表現の場合、

(6) Come!/ Yes!

(7) The more, the merrier.

これらについて彼は、(6)のようなものを'sentence word'、(7)のようなものを'sentence group'とよんでいる。⁵⁾ しかしたとえば(6)の'Yes!'のような場合、この表現から'logical subject'と'logical predicate'をどのように想定するのかが明かではなく、そのため彼はこのようなものを'condensed sentence'として次のように述べている。

(8) From a grammatical point of view these condensed sentences are hardly sentences at all, but rather something intermediate between word and sentence.⁶⁾

だがこれは、上の定義を維持せんがための解釈にすぎない。なぜなら'Yes!'という表現にどのように'logical subject'と'logical predicate'が'condense'されているのかがこれも明かではないからである。

またSweetの上述の意味的定義はFriesが指摘する点の他に、この定義ではどこまでが文でそれ以上は文とはいえないのかが明かではないという問題がある。すなわち、文の外延的規定が示されていないということである。

次にJespersenの文の定義である。

(9) A sentence is a (relatively) complete and independent human utterance -- the completeness and independence being shown by its standing alone or its capability of standing alone, i.e. of being uttered by itself.⁷⁾

これは、Sweetのように文を意味内容によって定義するのではなく、いわゆる'one-word sentence'⁸⁾のようなものをも、たんなる'ellipsis'ではなくひとつの文として扱うことを念頭においた定義である。ここでは、'standing alone'という形式的特徴を有する'utterance'が、この特徴によって示される'completeness'や'indpendence'によって文として定義されている。

このJespersenの定義は、形式的規定となっている点でSweetの意味的規定と

は異なるものでては、ここでは'standing alone'という形式的特徴をどのように認定するのか、さらにまた、'capability of standing alone'としているが、この'capability'はどのように判断するのかということが問題となる。

また一方において、この定義には意味的規定が欠けているという問題がある。言語に関わる概念規定においては、その意味と形式がなんらかのかたちで示されなければならないことは言うまでもないことである。なぜなら、いかなる言語表現であっても、それはなんらかの意味と形式の統一されたものとして存在するからである。もちろん検討を要するのはその意味と形式の構造であるが、その構造に分けいる前提として、概念規定においてこの両面が踏まえられているか否かの確認を要するということである。

伝統文法においては、他の用語と同様に文に関しても主として意味的定義が様々に試みられてきたが、上で指摘されたような問題点のゆえに、その後より客観的な規定にむけて検討がなされてきた。しかしそこでは形式的定義の試みが主流となり、意味的規定を欠いた一面的な規定に偏った傾向がみられる。しかもそれは、'the methodological separation of semantics and grammar'⁹⁾として積極的に推し進められてきたものである。では意味的規定を考慮に入れずにはたして文というカテゴリーを全体として捉えることが可能であるのか次に検討してみたい。

2.Friesの文の定義について

彼はBloomfieldの次の文規定から出発する。

- (10) ...each sentence is an independent linguistic form, not included by virtue of any grammatical construction in any larger linguistic form.¹⁰⁾

ここからさらに発展させて、Friesは次のように文を規定している。

- (11) We start then with the assumption that a sentence(the particular unit of language that is the object of this investigation) is a single free utterance, minimum or expanded;i.e. , that it is "free" in the sense that it is not included in any larger structure by means of any grammatical device.¹¹⁾

ここでの'free'という用語の説明は、上のBloomfieldの文規定を継承したもので

あるが、'utterance'については彼は次のように規定している。

- (12) In this book, then the two-word phrase utterance unit will mean any stretch of speech by one person before which there was silence on his part and after which there was also silence on his part.¹²⁾

しかしここで注意しなければならないのは、この'utterance unit'が必ずしも'a single utterance'とはかぎらないということである。すなわち'utterance unit'は'silence'によって区切られた一連の'speech'ということになるが、その中には次の3種類が想定できるとしている。¹³⁾

- (13) A single minimum free utterance.

- (14) A single free utterance, but expanded, not minimum.

- (15) A sequence of two or more free utterance.

そうすると次に、では何をもって'a single utterance'と認定するのかという問題が出てくる。そこで彼は次のように述べている。

- (16) ...by a long process of comparing each utterance unit with many of the others, seeking recurrent partials, it was possible to separate those that consisted of single free utterances from those that consisted of sequences of free utterances.¹⁴⁾

さてここで問題となるのは、'a single utterance'として認定される'utterance unit'と'sequence of free utterances'として認定される'utterances unit'を「比較」という方法で正確に区別できるかということである。すなわち、'recurrent partial'が常に'a single utterance'であるのか、それをさらにまた確認する必要があるということである。そしてそれがどのような性質または構造を有する'unit'であるかが明示されていない。そしてそれが明示されないままに、続いて文の分類へと進んでいくのである。

このようにFriesは、Bloomfieldの上の文の定義を発展させようと試みたわけであるが、それが成功しているとはいえない。しかしこのBloomfieldの規定は現在でも文を一般的に規定する出発点として大きな影響力をもっているように思われる。そこでつぎに、Lyonsの文に関する議論を検討してみよう。

3. Lyonsによる文の規定について

Lyonsは⁽¹⁰⁾のBloomfieldの定義に関して次のように述べている。

- (17) The point of Bloomfield's definition can be stated more concisely as follows: the sentence is the largest unit of grammatical description. A sentence is a grammatical unit between the constituent parts of which distributional limitations and dependencies can be established, but which can itself be put into no distributional class.⁽¹⁵⁾

これは、Bloomfieldの規定を「分布」の観点から規定しなおしたものである。そして、Bloomfieldが自らの定義の例証として示した次のような発話、

- (18) How are you? It's a fine day. Are you going to play tennis this afternoon.
に関して次のように述べている。

- (19) (They) are all distributionally independent of one another; and for that reason they are recognized as three distinct sentences.⁽¹⁶⁾

このように、分布的独立性という特徴から文を規定しようとするわけであるが、Lyonsはこのような特徴に反する発話についてさらに議論を展開する。

- (20) A few examples may now be given of various kinds of utterances or parts of utterances which are traditionally regarded as sentences, although they are not distributionally independent in the sense in which we have been using the term 'distribution'.⁽¹⁷⁾

そして次のような発話を例として上げている。

- (21) He'll be here in a moment.

こうして彼は次のような提案へと達する。

- (22) However, if, as generally the case, the utterances can be segmented into stretches which are distributionally independent of one another in all respects apart from the selection of the 'personal' pronouns, these stretches may be regarded as 'derived' sentences within which nouns have been replaced with pronouns (masculine, feminine, etc., as appropriate) by secondary grammatical rules.⁽¹⁸⁾

さてここで、'apart from the selection of the "personal" pronoun'としているように、この "derived" sentence'はLyonsの上の文の規定と矛盾するものであることは明かである。そこで彼は、次のように議論を展開する。

- (23) As a grammatical unit, the sentence is an abstract entity in terms of which the linguist accounts for the distributional relations holding within utterances. In this sense of the term, utterances never consists of sentences, but of one or more segments of speech (or written text) which can be put into correspondence with the sentences generated by the grammar.¹⁹⁾

このようにLyonsが上のように規定する文とは、'abstract entity'としての文であって、それは実際の発話から抽象した単位ではなく、言語学者が分布上の関係(distributional relation)を説明するためのものであるということになる。これはBloomfeildの上の定義を継承し発展させようという意図からの提案であろうが、実際の発話の中から文という単位を抽出し理論化できなかったことを示すものでもある。このような文の規定のしかたは、これまで検討してきたものと異なるものであるが、発話の中に文を見いだそうという試みについてもLyonsは述べている。次にそれを検討する。

彼は分布的独立性の基準では明確に文を区分できない次のような発話例を上げている。²⁰⁾

- (24) I shouldn't bother if I were you I'd leave it till tomrrow

そして分布的基準ではこの発話は次の2つの区分の可能性があるとしている。

- (25) I shouldn't bother if I were you. / I'd leave it till tomorrow.

- (26) I shouldn't bother./ If I were you, I'd leave it till tomorrow.

そして次のような音韻的基準(phonological criteria)を導入する。

- (27) In deciding between these two possibilities in any particular case we should have recourse to other considerations, principally to the criteria of potential pause and intonation....it makes for a simpler total description of the language if the phonological features in question are allowed to determine the cases, such as the one exemplified above, left undecided by the strictly grammatical criteria.²¹⁾

このように分布的基準によっては実際に想定される発話の中の文を確定することができないために、第2の基準として音韻的基準を導入しようということである。これは確かに発話において文を確定する方法として一見評価できそうであるが、ではなぜそこに'potential pause and intonation'を想定できるのかにつ

いては分布的基準では説明できないのである。すなわち上の発話例において、この基準では2つの'potential pause and intonation'の可能性を指摘することはできても、その可能性の内のどちらかを決定する基準とはなっていないということである。実際の発話では、上の2つの可能性の内のいずれか一方のみが生ずるはずである。

では音韻的基準はこのいずれかを決定できるであろうか。答えは否である。なぜなら、Lyonsが述べているように、これは分布的基準に次ぐ二次的基準であり、'potential pause and intonation'が発話の切れ目を示す形式的特徴となるであろうが、上の例でいえば、依然として発話の切れ目には2つの可能性があるのである。問題は、その可能性の内のどちらか一方を決定する要因は何かということである。

これと関連して、Lyonsが上げている次の発話例を検討してみよう。

(28) I saw him yesterday and I shall be seeing him again tomorrow

この発話についてLyonsは次のようにのべている。

(29) An utterance such as (above) would be segmented by the test of distributional independence into two sentences (the break coming between *yesterday* and *and*). However, the supplementary criteria of potential pause and intonation will distinguish utterances in which two or more consecutive sentences are to be taken as clauses in a single sentence or as independent sentences.²²⁾

この(28)の発話は、(24)のそれとは異なって分布的基準によれば明確に2つに分けられるものである。しかしこの発話は、'what are traditionally referred to as compound sentences made up of co-ordinate clauses'²³⁾とも考えられるものである。そこで'supplementary criteria'として'potential pause and intonation'という音韻的基準が(24)の場合と同様に導入される。

さてこのことは、従来から文と考えられてきたものを分布的基準からは統一的に説明できないことを意味している。また音韻的基準は、文の切れ目を示すことができるのみであって、なぜその切れ目と切れ目の間の発話が文といえるかを説明するものではない。このように、2つの基準を設定することによって従来からの文の分布的・音韻的特徴を示すことはできても、なぜそれが文とい

えるのかという、そのふんといわれるものの一般的内的特性については依然として未解明のままなのである。

4. 文認定の「客観的基準」ということについて

このように、これまで伝統的文法以後の文の定義に関するいくつかの試みについて検討してきたが、いずれの場合も、文をその内容と形式全体にわたって統一的に説明したものとは言いがたい。これまでの流れを大きくふりかえってみると、文の内容面からの定義が、漠然としたものであったり、説明が不十分であったりというように、構造的な踏み込みに欠けていたのにならして、より客観的な文認定の基準が求められ、分布的独立性や音韻的特徴によって文という単位を認定する提案がなされてきた。しかし、これらが文の内的特性を全体として捉えたものでないことは上で検討した通りである。

それではなぜ上のような基準が文という単位を統一的に把握できないのか。それはまさに言語研究の基本的立場に関わっているように思われる。つまり、上で検討したような「客観的基準」は、発話を研究者の立場からの外からの(=「客観的」)観察によって見いだされたものである。しかし発話いうものは、研究者が観察するまえに先ずは発話者の主体的行為として表現されたものである。ところがこのことは、言ってみればしごくあたりまえのことであるがゆえに、研究者の常識以前のこととして現在では片付けられてしまっているように思われる。しかし、発話が発話者の主体的表現であるという「客観的」事実を無視すること、すなわちそのことを自らの研究のなかに論理として組み込まないということは、発話の本性を一面的に捉えたことにしかならないのではないだろうか、そしてこのことが「客観的基準」による文の把握を不完全なものにしているように思われる。

そこで次に、国語学者・時枝誠記の文に関する考察を検討してみたい。その理由は、言語過程説という発話者²⁴⁾の主体的立場を論理として組み入れた独自の言語理論を確立した立場からの彼の研究の中に、文の統一的解明に関する多くの示唆が含まれていると考えるからである。

5. 時枝誠記の文一般論について

時枝の発話者の主体的立場を重視する言語観は彼の次のような単位観にもみることができる。

- (30) 言語に於ける単位といはれるのは、分析の極に到達した原始的単位の意味に於てではなく、それは質的単位の意味に於てでなければならない。質的単位とは、主体的意識に於て認定せられた一の全体概念であり、統一体の概念である。(中略) 文についても同様であって、予め認定された統一体としての文の概念があつて始めて一個の文二個の文と判定することが出来るのであつて、問題はかく主体的に認定された単位としての単語或は文の本質が学問的に如何に説明されるかといふことである。²⁵⁾

このように時枝は、発話者の主体的立場から、ひとつの「統一体としての文」という単位を追求しようとする。そしてその「統一体」の構造へと分け入っていくわけであるが、それを先に検討したSweetのように主述的關係で説明しようという試みを彼は批判する。

- (31) こゝに注意すべきことは、come!の如き、火事の如き、所謂一語文といはれてゐるものを、理論的形式に置き換えてまで、これを文と認めようとするには、これら一語のものを、文と認めざるを得ない要求が既に存在しているという事実である。それは、これら一語のものが、論理的形式に翻訳せられるが故に文として認められるのではなく、実は、文として認めざるを得ない他の理由が存在すると考へるべきであつて、これを主述關係に翻訳するのは、その要求を満足させんが為の便宜的手段に過ぎないことを知らなければならない。²⁶⁾

この「論理的形式に翻訳」することが困難な例は、Sweetの項の 'condensed sentence' で見たとおりである。

こうして時枝は、主体的立場からの「統一体としての文」の構造論を展開するに際して、先ず次のように概括する。

- (31) 文の性質を規定するものとして、大体、次の三つの条件が考へられる。
- (一) 具体的な思想の表現であること。
 - (二) 統一性があること。

(三) 完結性があること。²⁷⁾

そしてそれぞれの条件について以下のように議論を展開していく。²⁸⁾

(一) について時枝は、「具体的な思想の表現とは、客体的なもの、主体的なものとの結合した表現において云うことができるのである。文とは、このような具体的な思想を表現するものである。」として次のような例を上げ、

(32) 犬だ。

「客体的の表現『犬』と同時に、それに対する判断が、『だ』という語によって表現されて、ここに主体、客体の合一した具体的な表現が成立する。これが即ち文と云はれるものである。」としている。これは思想を「主述関係に翻訳する」Sweetのような文規定とは異なって、ありのままの言語表現に即した思想および文の捉え方でてるという点で評価できるものであろう。すなわち、Sweetのように、思想を先に引用したような'a combinatin of a logical predicate with a logical subject'としてしまうと、発話をそれ自体としてではなく、「主述関係」という論理的形式に置き換えてから文として解釈せざるをえなくなる。

それにたいして時枝は、思想を「客体的なもの、主体的なものとの結合」として捉えているが、これは、発話を他の論理的形式に置き換えることなくそれ自体として捉え、その意味内容を一般化したものである。こうして文という単位も、発話そのものに即した意味(=「思想」)を有する「統一体」として措定されるものである。

次に、文を発話自体に即した意味で「具体的な思想の表現」と捉える時枝は、これが「常に主体的表現と客体的表現とを具備するとは限らない」として、次の例を上げ、

(33) まあ!驚いた。

これにたいして、『まあ』は主体的な感情の表現であるが、この表現には、この感情の志向的对象である事件とか、人とかが表現されていない。しかしそれは当然なものかについての驚きの表現として『まあ』と云はれたのであるから、この『まあ』も具体的な思想の表現として文と云って差支えない。」と述べている。論理的に言えば、これは発話の形式と内容(=「思想」)を相対的独立の関係で捉え、内容が形式にそのまま反映するとはかぎらないことを示すも

のであるが、この場合、「客体的なもの、主体的なものとの結合」としての思想が「主体的表現」に媒介的に反映しているということである。ここでもまた時枝は、Sweetのcondensed sentenceのような解釈を持ち出さずに発話自体に即して文をその内容と形式から認定しようとしている。

次に、上の文に成立条件の「(二) 統一性があること。」について見てみよう。この「統一性」について時枝は次のように述べている。

- (34) 文に統一性があるということは、それがまとまった思想の表現であることを意味する。(中略) 文のまとまりは何によって成立するかといふならば、それは話し手の判断、願望、欲求、命令、禁止等の主体的なものの表現によるのである。²⁹⁾

これは、上の「(一) 具体的な思想の表現であること。」からさらに踏み込んで、「主体的表現」の文における重要性を指摘したものである。すなわち、「客体的なもの、主体的なものとの結合」としての思想が「主体的表現」によって統一性を与えられているということである。ただしこの「主体的表現」は、必ずしも「助動詞」や「助詞」などの語によって表現されるわけではないとして、時枝は次のような例を上げ、「用言に伴ふ陳述」としての「零記号」という概念を提出している。

- (35) 裏の小川がさらさら流れる。

- (36) この表現されない、零記号の陳述は、(中略) 次の図形に示すやうな関係でこの表現を統一し、その故にこれが文であると云はれるのである。

裏の小川がさらさら流れる ■

即ち、■記号で示される話し手の陳述が、「裏の小川云々」全体を包む形式において統一しているのである。³⁰⁾

ここでは上の(33)の例とは逆に、「主体的表現」が「客体的表現」を通して媒介的に表現とれていると考えることができよう。

ところで、この「主体的表現」については、時枝の次のことばにも注目すべきであろう。

- (37) つぎの例、

犬!

においては、一単語の表現のやうに見えるが、ここには語として表現されない話手の感情が、抑揚、強調の形式を以て表現されて居り、文字言語として!の記号を以て表現されて居るのである。³¹⁾

このことは、次のような英語の例にもいえることである。

(38) Splendid! /What?

(39) Poor little Ann! /What fun!³²⁾ ここでは、話者の感嘆や疑問、哀切などの感情が、感嘆符や疑問符などの記号によって、または音韻的には抑揚・強調などによって「主体的表現」として示され、それが発話全体に「統一性」を与えているということになる。そしてここにも、上の Lyons の項で検討したように、単に文の切れ目として形式的に音韻面を見るのではなく、その内容面にも注目している点で、文の認定における主体的立場を重視する時枝の姿勢をみることができる。

このように見てくると、ここで時枝のいう「統一性」とは、「客体的なもの、主体的なものとの結合」としての思想が、発話者の主体的立場からどのようにまとめられているか、そのまとめ方を示すものと考えることができる。

つづいて、文の成立条件の「(三) 完結性があること。」であるが、この条件をあげた理由として、時枝は次のように述べている。

(40) 裏の小川はさらさらと流れ

といふ表現において、陳述は零記号の形式では存在はしてゐるのであるが、それが「流れ」といふ動詞の連用形が示すやうに、完結しないものとなり、この表現全体が或る統一を得ながら、更に展開する姿勢を取つてゐる。換言すれば、この表現には完結性が無いことになって文といふことは出来ないのである。この表現が文であると云いはれるためには、表現の最後が、終止形によって切れる形をとることが必要な条件となる。³³⁾

すなわち、思想の「具体性」、「統一性」だけでは文として認定はできず、さらに表現の「完結性」という要素が必要であるということである。

この「完結」ということと「完全」との区別について時枝は言及している。

(41) 完結と完全との根本的創意は何処にあるかといへば、完全とは主観的基準に於てのみいひ得ることであつて、完結とは客観的に規定された事実

である。従って文の完結とは客観的に妥当する事実に基づくのである。³⁴⁾ここで想起すべきは、上の項で取り上げ他Lyonsのabstract entityとしての文である。文をこのように規定すると、そこではその文を基準とする「完全」性が問題となる。したがって、次の(42)のような発話は「分布的」に独立していないから文法的に「不完全」であり、(43)のような文から「派生」文であると解釈される。

(42) John's if he gets here in time

(43) We are going in John's a car, if he gets here in time.³⁵⁾

これにたいして時枝は、発話 (= 「表現」) そのものの中に文を認定しようとする点で、Lyonsの方法とは大きく異なっているのである。このことは、彼の次のことばからも知ることができる。

(44) 完結の意識は、文の不可欠の要素と考えられる主語述語補語等の有無とも関係がない。

「鬼になる人ないか。」「僕がならう。」

右の「僕がならう」といふ表現には、「鬼に」という補語を必要とするのであろうが、それはこの文の完全不完全に関することであって、完結には関係がない。この場合補語が無くともこの文は完結し、且つ表現に充足性があるから、話手に於ても、聴手に於ても、完全であるといへるのである。³⁶⁾

このように時枝のあげる文の成立条件の「(三) 完結性があること。」によれば、(42)のような発話も文と認定されるのであるが、この場合の「完結性」の形式的基準は、Lyonsの項で取り上げた'potential pause and intonation'ということになろう。しかしこれは、たんなる文認定の形式的基準(条件)ではなく、うえの「完結の意識」ということばに見られるように、これがこれまで検討してきた「(一) 具体的な思想の表現であること。」「(二) 統一性があること。」という内容的基準(条件)とあわせて提案されているということである。すなわち「完結性」とは、「完結とは客観的に規定された事実」と時枝が述べているように、発話の形式的側面を取り上げていると同時に発話者の「完結の意識」という内容的側面をも捉えたものといえよう。

さてこれまで時枝の文一般論について、文成立の三条件に沿って見てきたが、この特徴を次のようにまとめることができよう。

(1)発話者の主体的立場を重視して、発話 (=「表現」) それ自体の中に文という「統一体」としての単位を認定しようとしたこと。

(2)文の内容の検討において、主述的關係に置き換えて説明しようとするのではなく発話そのものから「統一体」の構造を抜きだそうとしたこと。

(3)「統一体」の「統一性」が「主体的表現」によって示されることを指摘したこと。

(4)「統一体」の内容的基準(条件)とあわせて、形式的基準(条件)が(内容的な含みをもたせつつ)「完結性」として示されていること。

以上の諸点を中心に、時枝の文一般論の問題点について次に検討してみたい。

6. 時枝の文一般論の問題点について

これまで検討してきたように、時枝は発話者の主体的立場を重視して、そこから「主体的表現」と「客体的表現」の「統一体」として文を捉え、それが成立するための3条件を提案した。とくに第一、第二の条件、すなわち「(一)具体的な思想の表現であること。」「(二)統一性があること。」は、文の意味内容を他の論理的形式に置き換えることなく、発話そのものから抜きだそうとした点で、より発話の意味構造に即した文の把握のしかたであるといえよう。しかし、このように文の一般的意味構造により踏み込むことができた時枝は、はたして真の意味での文一般論を提示することができたであろうか。答えは否である。以下そこに焦点をあてて論じていきたい。

先ずここでいう真の「一般論」とは何かということである。ここでは、それをおよそ次ぎのように規定したい。すなわちそれは、対象とする事物のすべてをつらぬき他の事物とは区別される性質を統一的に把握した論理または理論、ということである。これを文一般論に即していえばそれは文全体をつらぬく性質であると同時に、文ではないものとは区別される性質を統一的に把握したものでなければならないということである。

さてこのような一般論の規定からすると、時枝の文一般論では次のような問

題が生じる。先ずそれは、文一般論を提示する際して、彼が三つの条件を上げていることである。すなわち、一般論であるならば、なぜひとつに統一して提示できないのかということである。もちろん文を一般的にせよ具体的に検討していけば、様々な条件を示す必要も出てこようが、先ずは最初に、あるいは諸条件の検討の後にでも、文についてのひとつの統一的な一般論が示されて然るべきである。ところが時枝の場合は、後にも先にも文の成立3条件が検討されているのみで、これらを統一してまとめた文一般論の提示はどこにも見られない。そして、なぜ時枝はこのような統一的な文一般論を示さなかったか、あるいは示し得なかったのか理由は、この三条件の中に論理的に含まれているのである。

前項で要約したように、時枝は文の成立条件として第一、第二の内容的条件に加えて、第三の形式的条件を提示している。もちろん文も言語の一単位として形式と内容の統一において把握されねばならず、その意味で形式的条件を示すこと自体には問題はない。というよりは、むしろ文の一般的全体像の提示に際して欠くべからざるものである。問題は、時枝の場合、なぜ内容的条件と補完的に形式的条件を上げなければならなかったかということである。

もちろん前項で検討したように、第三の条件の「完結性」は、単に発話の形式面を取り上げたものではない。しかし時枝のようにただ「完結の意識」と述べるのみで、仮にこれを内容面をも取り上げたものだと思っても、それはこの「意識」の構造に少しも踏み込んだものではなくこれだけではこの条件は、第一義的には形式的条件と見なければならぬであろう。事実時枝は、「文の完結が、話者の主体的活動の表現と同様に、語の形式の上に明示されてある」³⁷⁾とか、「文の成立に語形式の完結実完結が重要である」³⁸⁾と述べているように、「完結性」の形式面に重点をおいていることが窺える。

このように、第一・第二の条件だけでは文の全体像を把握することができないために、それを補完するものとして第三の条件を導入したわけであるが、これを形式面での条件と見た場合、これでは文全体を内容面で統一的に捉えたとはいえない、すなわち、真の文一般論とはいえないのである。

さらにまた、この「完結の意識」が文の内容面を取り上げたものだとしても、

これが「統一体」としての文と構造的にどのようにつながっているのかが明かではない。これは上で述べたように、この「意識」の構造に踏み込んでいないことに由来するものであるが、そのことが、時枝の文の成立三条件をさらに発展させて、真の文一般論に仕上げることを妨げているように思われる。それでは時枝の文一般論はどのように発展させるべきであるのか、ということから次項において筆者の文一般論を提示したい。

7. 文の一般的認識構造について

まず文を発話の中の一単位として認定しようとする場合、それは時枝が(30)で述べているように、意味的単位としては「主体的意識に於いて認定せられた一の全体概念であり、統一体の概念」として「質的単位」でなければならない。すなわち、この「主体的意識」とは発話者の認識を示すものであるが、発話は発話者の認識と対応しており、それが発話の意味を構成する実体であるがゆえに、発話の中に見いだそうとする文という単位は、発話者の認識に対応したひとつの意味的統一体でなければならないということだ。

そしてこの意味的統一体は、発話の音韻的・書記的・統語的形式的と対応するものであるが、発話にいたる過程の構造から明らかのように、先ず発話者の認識面での統一性があり、それかせこれらの様々形式に対応しているのである。つまり文の統一性とは、先ず意味的側面において把握されねばならず、上の諸形式はその意味的統一性を前提としてそれに関わってくるのである。いいかえると、これらの形式は、その前提となる意味的統一性によって自らの存在意義を与えられているということである。例えばLyonsの項において、次のような発話を取り上げた。

(24) I shouldn't bother if I were you I'd leave it till tomorrow

ここでは文を確定する方法としての「音韻的基準」を取り上げて、筆者は「この基準では2つの'potential pause and intonation'の可能性を指摘することはできても、その可能性の内のどちらかを決定する基準とはなっていない」と指摘した。そしてこれを決定するものが、発話者の意味的統一性の認識ということであるが、次の問題はこの統一性または統一体の構造や如何ということである。

前々項で時枝は、文という「統一体」を「客体的な物と、主体的な物との結合」としての思想が、より構造に立ち入れば、「主体的表現」によって「統一性」を与えられたものと捉えていた。これを上の(35)の発話に即してみれば、

裏の小川がさらさら流れる。

(36) の引用のように、この発話の認識構造は、

裏の小川がさらさら流れる ■

となって、「■記号で示される話し手の陳述が、『裏の小川云々』全体を包む形式において統一している」ということになる。

次にこの枠で囲まれた「裏の小川がさらさら流れる」の部分にさらに分け入ってみると、ここでは様々概念がいわゆる（単）語という形式で表現されていることがわかる。そして諸概念は、ばらばらにただ並んでいるのではなく、お互いに結びついてひとつの全体を構成していることも理解できよう。したがって、これを「（諸）概念の構成体」と規定することができよう。なぜここで「（諸）概念」と（ ）付きで表現するかといえば、(37)の「犬!」という発話のように、一概念の構成体もあるからである。

そしてこの構成体にたいする発話者の統一的認識が、上の場合■記号で示されている。もちろんこの統一的認識が、次の例の下線部のように語の形式で表現されることもある。

(45) 母が明日来るらしい。

(46) He may never succeed.

(45) の場合は、「母が明日来る」という（構成的）認識にたいして、この認識全体を推量として統一的に認識し、(46) の場合は、he succeedという（構成的）認識にたいして、それ全体を統一的に否定的な推量として認識しているということである。このように見てくると、文という「統一体」は、（諸）概念の構成体とそれ全体にたいする発話者の統一的認識によって構成された「統一的構成体」と一応規定することができよう。

そこで次に問題となるのは、このように規定された統一的構成体がすべて文といえるかということである。(40)のように、「裏の小川はさらさら流れ」とい

う発話のばあいには、時枝の図式に倣えば、次のような統一的構成体を形成していると考えることができよう。

(47) 裏の小川はさらさら流れ ■

すなわち、枠で囲まれた諸概念の構成体全体を「陳述」（この場合は肯定的判断）というかたちで、発話者が統一的に認識しているということである。しかしこれを文と認定することはできないことには、異論はないであろう。問題はなぜそう認定できないかということであるが、これにたいして時枝は、発話の「完結性」という条件を加えた。そしてこの条件の問題点に関しては、前項で述べた通りであるが、ここで(44)の引用の中の「完結の意識」についてさらに検討してみよう。

(47)のように図式化される発話について、時枝は(40)で「この表現全体が或る統一を得ながら、更に展開する姿勢を取ってゐる」と述べているが、そこでこの発話を次のように延長してみよう。

(48) 裏の小川はさらさら流れ庭の木々の葉がさらさら輝く

このようにすると、この発話が「完結性」を得て文として認定されるということになる。ここで前半部分の認識構造は(47)のようになるが、これに倣って後半部分のそれを図示すると、次のようになろう。

(49) 庭の木々の葉がさらさら輝く ■

したがってここでは(47)と同様に、枠で囲まれた諸概念の構成体全体にたいしてそれを「陳述」（この場合も肯定的判断）として発話者が統一的に認識していると考えることができよう。

それでは の発話は、認識構造としては(47)+(49)というようにただ機械的につながっているだけであろう。そうではなく、時枝は(47)の発話について「更に展開する姿勢を取っている」と述べているが、逆に(49)も(47)を前提として展開されているということであり、したがって(48)は(47)と(49)がさらに統合された認識構造をもっていると考えられる。これを図示するとおよそ次のようになろう。

- (50) 裏の小川はさらさら流れ ■ 庭の木々の葉がきらきら輝く ■ ■

ここで右端の■、は、大きな枠の中の統一構成体全体をさらに統合した認識を示すものである。そしてこの認識は、この発話が現象的には「更に展開する姿勢を取って」はいない、すなわち認識構造的には「締めくくり的な統合的認識」という意味で、「総括的認識」と規定することができよう。

このように見てくると、(44)で時枝が述べている「完結の意識」とは、この「総括的認識」を現象的に把握したものであることが理解できよう。すなわち、「総括的認識」があるからこそ「完結」感をもつのである。そしてこうした現象的な捉え方では、前項で述べたように、文全体を内容面で統一的に把握しているとはいえず、この「総括的認識」という構造的な捉え方によってこそ、それが可能となるであろう。そこでこれまでの検討をふまえて、文の一般的認識構造について、仮説として一応次のように規定しておきたい。

- (51) 文とは、発話者の総括的認識によって統合された統一構成体である。

そしてこの文規定は、これまで文の形式的特徴とされてきたものと対応するものである。例えば、Lyonsの項で取り上げた'potential pause and intonation'という音韻的特徴は、この総括的認識を示す形式と考えることができよう。そして(28)のような発話('I saw him yesterday and I shall be seeing him again tomorrow')で、その'pause and intonation'の位置を決定するのはこの認識である。すなわち、言語においては内容が形式を規定するのであろう。また句読法によって規定されている終止符・疑問符なども同様なことがいえるが、これらの詳しい検討については別稿にゆずる。

8. むすび

以上、これまで様々文規定に関わる問題点を指摘し、それらを踏まえて国語学者・時枝誠記の文一般論の検討に入り、それを発展させる形で筆者の仮説的文一般論を提示した。ここで「仮説的」とは構造論の展開が示されていないからであり、これは今後その仮説の検証作業としても、取り組んでいかねばならない課題である。そしてここでの検討でも示唆されているように、発話者の認識内容と発話の形式との対応関係を論理として組み入れた文法理論の可能性を

探っていきたいと考えている次第である。

(註)

- 1) Sweet(1891). p155.
- 2) Ibid., p.19
- 3) Fries(1952), pp.18-19.
- 4) Ibid., p.19.
- 5) Sweet(1891), pp.157-158.
- 6) Ibid., p.157.
- 7) Jespersen(1965), p.307. (初版は1924年)
- 8) Ibid., p.306.
- 9) Lyons(1968), p.135.
- 10) Leonard Bloomfield, *Language*, より。なおこれは、Fries(1952), p.21からの再引用によるものである。
- 11) Fries(1952), p.25.
- 12) Ibid., p.23.
- 13) Ibid., p.25.
- 14) Ibid., p.39.
- 15) Lyons(1968), pp.172-173.
- 16) Ibid., p.173.
- 17) Ibid., p.173.
- 18) Ibid., p.173.
- 19) Ibid., p.176.
- 20) Ibid., p.179-180.
- 21) Ibid., p.180.
- 22) Ibid., p.180.
- 23) Ibid., p.180.
- 24) 時枝自身は「発話」・「発話者」という術語は使用せず、「表現」・「話し手」などと記述しているが、ここでは現実に想定される「表現」、すなわち

言語学的分析がなされる前の生の資料という、時枝が考えていたであろう意味で、以後「発話」・「発話者」という言い方を用いることとする。

- 25) 時枝(1941), pp.219-220.
- 26) Ibid., p.330.
- 27) 時枝(1950), p.231.
- 28) Ibid., pp.231-234. ((34)の前まで引用箇所をまとめて示す。)
- 29) Ibid., p.234.
- 30) Ibid., p.236.
- 31) Ibid., p.233.
- 32) (38)、(39)いずれも Jespersen(1924), p.306より。
- 33) 時枝(1950), pp.238-239.
- 34) 時枝(1941), p.358.
- 35) (42)、(43)いずれも Lyons(1968), p.175より。
- 36) 時枝(1941), p.359.
- 37) Ibid., p.357.
- 38) Ibid., p.363.

(平成8年6月7日 受理)

References

- Fries, C.C. (1952), *The Structure of English: An Introduction to the Construction of English Sentences*, Longman, London.
- Jespersen, Otto(1965), *The Philosophy of Grammar*, Norton, New York.
- Lyons, John(1968), *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge Univ. Press, London.
- Sweet, Henry(1891), *New English Grammar: Logical and Historical*. Oxford Univ. Press, London.
- 時枝誠記 (1941)、『国語学原論』、岩波書店。時枝誠記 (1950)、『日本文法・口語篇』、岩波書店

CONTENTS

Cultural Science

Nov. 1996

Whole No.46

Critical Study on Environmental Issues as Social Dilemmas-with special reference to Hirose's remarks	Hiroshi MARUYAMA	1
Die Phänomene der deutschen Übersetzung des Prajñāpāramitā hṛdaya - sūtra und seiner Text - Kritiken.....	Hideshige Omura und Marcell Wenzel Chalupa	17
Der Tee als Medizin und Kunst. Herausgegeben von.....	Marcell Wenzel Chalupa und Hideshige Omura	49
Die Leiden und der Gesundheitszustand Goethes. Eine kurze Abfassung über die Leiden und deren Gründe von Johann Wolfgang von Goethe.....	Marcell Wenzel Chalupa und Hideshige Omura	79
Definition of relative clauses and predicate types	Toru Shionoya	93
On the Sentence as a Grammatical Unit	Takashi Matsuna	111

平成8年11月8日 印 刷 (非売品)

平成8年11月8日 発 行

編 集 室 蘭 工 業 大 学
発 行

印 刷 室 蘭 印 刷 株 式 会 社

室蘭市本町2丁目5番1号
TEL (0143) 24-5141